

# HP Business Service Management

Windows, および Linux オペレーティング・システム用

ソフトウェア・バージョン : 9.20

---

## HP SiteScope 11.20 デプロイメント・ガイド

ドキュメント・リリース日 : 2012 年 5 月 (英語版)

ソフトウェア・リリース日 : 2012 年 5 月 (英語版)



## ご注意

### 保証

HP 製品、またはサービスの保証は、当該製品、およびサービスに付随する明示的な保証文によってのみ規定されるものとします。ここでの記載で追加保証を意図するものは一切ありません。ここに含まれる技術的、編集上の誤り、または欠如について、HP はいかなる責任も負いません。

ここに記載する情報は、予告なしに変更されることがあります。

### 権利の制限

機密性のあるコンピュータ・ソフトウェアです。これらを所有、使用、または複製するには、HP からの有効な使用許諾が必要です。商用コンピュータ・ソフトウェア、コンピュータ・ソフトウェアに関する書類、および商用アイテムの技術データは、FAR 12.211 および 12.212 の規定に従い、ベンダーの標準商用ライセンスに基づいて米国政府に使用許諾が付与されます。

### 著作権について

© Copyright 2005 - 2012 Hewlett-Packard Development Company, L.P.

### 商標について

Adobe® および Acrobat® は、Adobe Systems Incorporated の商標です。

AMD および AMD Arrow ロゴは、Advanced Micro Devices, Inc. の商標です。

Google™ および Google Maps™ は、Google Inc. の商標です。

Intel®, Itanium®, Pentium®, および Intel® Xeon® は、Intel Coporation の米国およびその他の国の登録商標です。

iPod は Apple Computer, Inc. の商標です。

Java は、Oracle Corporation およびその関連会社の登録商標です。

Microsoft®, Windows®, Windows NT®, Windows® XP, および Windows Vista® は、Microsoft Corporation の米国登録商標です。

Oracle は、Oracle Corporation およびその関連会社の登録商標です。

UNIX® は The Open Group の登録商標です。

## 謝辞

本製品には、Apache Software Foundation (<http://www.apache.org>) (英語サイト) によって開発されたソフトウェアが含まれています。

本製品には、JDOM Project (<http://www.jdom.org>) (英語サイト) によって開発されたソフトウェアが含まれています。

本製品には、MX4J Project (<http://mx4j.sourceforge.net>) (英語サイト) によって開発されたソフトウェアが含まれています。

## ドキュメントの更新情報

このマニュアルの表紙には、以下の識別番号が記載されています。

- ソフトウェアのバージョン番号は、ソフトウェアのバージョンを示します。
- ドキュメント・リリース日は、ドキュメントが更新されるたびに変更されます。
- ソフトウェア・リリース日は、このバージョンのソフトウェアのリリース期日を表します。

最新の更新のチェック、またはご使用のドキュメントが最新版かどうかのご確認には、次のサイトをご利用ください。

**<http://support.openview.hp.com/selfsolve/manuals>**

このサイトを利用するには、HP Passport への登録とサインインが必要です。HP Passport ID の取得登録は、次の Web サイトから行なうことができます。

**<http://h20229.www2.hp.com/passport-registration.html>** (英語サイト)

または、HP Passport のログイン・ページの[**New users - please register**]リンクをクリックします。

適切な製品サポート・サービスをお申し込みいただいたお客様は、更新版または最新版をご入手いただけます。詳細は、HP の営業担当にお問い合わせください。

## サポート

次の HP ソフトウェアのサポート Web サイトを参照してください。

**<http://support.openview.hp.com>**

HP ソフトウェアが提供する製品、サービス、サポートに関する詳細情報をご覧ください。

HP ソフトウェア・オンラインではセルフソルブ機能を提供しています。お客様の業務の管理に必要な対話型の技術支援ツールに素早く効率的にアクセスいただけます。HP ソフトウェア・サポート Web サイトのサポート範囲は次のとおりです。

- 関心のある技術情報の検索
- サポート・ケースとエンハンスメント要求の登録とトラッキング
- ソフトウェア・パッチのダウンロード
- サポート契約の管理
- HP サポート窓口の検索
- 利用可能なサービスに関する情報の閲覧
- 他のソフトウェア・カスタマーとの意見交換
- ソフトウェア・トレーニングの検索と登録

一部を除き、サポートのご利用には、HP Passport ユーザーとしてご登録の上、ログインしていただく必要があります。また、多くのサポートのご利用には、サポート契約が必要です。HP Passport ID を登録するには、以下の Web サイトにアクセスしてください。

**<http://h20229.www2.hp.com/passport-registration.html>** (英語サイト)

アクセス・レベルの詳細情報については、次の URL を参照してください。

**[http://support.openview.hp.com/access\\_level.jsp](http://support.openview.hp.com/access_level.jsp)**

---

# 目次

はじめに.....	9
本書の構成.....	9
対象読者.....	10
必要な情報の見つけ方.....	11
その他のオンライン・リソース.....	11
ドキュメントの更新情報.....	12

## 第 I 部 : SITESCOPE の紹介

第 1 章 : SiteScope の紹介.....	15
第 2 章 : スタートアップ・ロードマップ.....	17
第 3 章 : デプロイメントの方法と計画.....	19
エンタープライズ・システム監視の方法.....	19
ビジネス・システム・インフラストラクチャの評価.....	21
SiteScope サーバのサイズ設定.....	22
ネットワークの場所と環境.....	23
Windows 環境の場合に考慮する事項.....	24
UNIX 環境の場合に考慮する事項.....	25
第 4 章 : エージェントレス監視について.....	29
SiteScope 監視機能について.....	29
エージェントレス監視環境について.....	31
第 5 章 : SiteScope のライセンス.....	35
SiteScope のライセンスの概要.....	35
SiteScope ライセンスのタイプについて.....	36
モニタ・ライセンスの概要.....	40
ライセンス・ポイント数の見積もり.....	59
SiteScope ライセンスの追加.....	63

**第 II 部 : SITESCOPE をインストールする前に**

<b>第 6 章 : SiteScope をインストールする前に</b> .....	<b>67</b>
インストールの概要.....	68
システム要件.....	69
認定されている構成.....	77
SiteScope キャパシティに関する制限事項.....	78
SiteScope サポート・マトリックス.....	78
<b>第 7 章 : アップグレード SiteScope</b> .....	<b>79</b>
アップグレードを実行する前に.....	80
既存の SiteScope インストールのアップグレード.....	81
SiteScope ディレクトリの命名.....	82
SiteScope 構成データのバックアップ.....	82
設定データのインポート.....	83
カスタム・プロパティの検索 / フィルタ・タグへの変換.....	84
SiteScope 8.9 の SiteScope 9.5.4 へのアップグレード.....	86
SiteScope 9.5.4 の SiteScope 10.14 へのアップグレード.....	87
SiteScope 10.14 の SiteScope 11.20 へのアップグレード.....	91
SiteScope 11.x の SiteScope 11.20 へのアップグレード.....	95
トラブルシューティングおよび制限事項.....	99

**第 III 部 : SITESCOPE のインストール**

<b>第 8 章 : SiteScope のインストール</b> .....	<b>105</b>
インストールの流れ.....	105
Solaris または Linux にインストールする場合の準備.....	107
Oracle Enterprise Linux 環境への SiteScope のインストール.....	108
CentOS 6.2 環境への SiteScope のインストール.....	108
CentOS 6.2 で実行する HP Cloud Services インスタンスへの SiteScope のインストール.....	109
HP Operations Agent が必要とする依存関係のインストール.....	111
64 ビット SiteScope のインストール準備.....	113
インストール・ウィザードを使用してインストール.....	114
コンソール・モードを使用した Solaris または Linux へのインストール.....	139
トラブルシューティングおよび制限事項.....	148
<b>第 9 章 : サイレント・モードでの SiteScope のインストール</b> .....	<b>153</b>
サイレント・モードでの SiteScope のインストールについて.....	153
サイレント・インストールの実行.....	154
<b>第 10 章 : SiteScope 設定ツールの使用</b> .....	<b>155</b>
Windows プラットフォームでの設定ツールの実行.....	155
Solaris または Linux プラットフォームでの設定ツールの実行.....	163
コンソール・モードでの Solaris または Linux での設定ツールの実行.....	170

<b>第 11 章 : SiteScope のサイズ設定</b> .....	<b>177</b>
SiteScope のサイズ設定について .....	177
SiteScope キャパシティ・カリキュレータ .....	178
Windows プラットフォーム上での SiteScope のサイズ設定 .....	181
Solaris および Linux プラットフォーム上での SiteScope のサイズ設定	185
トラブルシューティングおよび制限事項 .....	190
<b>第 12 章 : SiteScope アンインストール</b> .....	<b>191</b>
Windows プラットフォームの SiteScope のアンインストール .....	191
Solaris または Linux プラットフォームの SiteScope のアンインストール	196

## 第 IV 部 : SITESCOPE の安全な稼働

<b>第 13 章 : SiteScope プラットフォームのセキュリティ強化</b>	<b>201</b>
SiteScope プラットフォームのセキュリティ強化 .....	201
SiteScope ユーザ設定の設定 .....	202
パスワードの暗号化 .....	202
SSL (Secure Socket Layer) を使用した SiteScope へのアクセス .....	202
Run-time Service Model にバルク・データを送信するための SiteScope の設定	203
<b>第 14 章 : 権限と資格情報</b> .....	<b>205</b>
<b>第 15 章 : SSL を使用するための SiteScope の設定</b> .....	<b>233</b>
SiteScope での SSL の使用について .....	234
SSL を使用するための SiteScope の準備 .....	235
SSL 用の SiteScope の設定 .....	240
相互 SSL 設定用の SiteScope の設定 .....	242
SSL デプロイメントを使用する BSM サーバに接続するための SiteScope の設定	244
クライアント証明書を要求する BSM サーバに接続するための SiteScope の設定	245
BSM サーバがクライアント証明書を必要とする時 SiteScope でトポロジ・ディスカバリ・エージェントの設定方法 .....	249

## 第 V 部 : 作業の開始と SITESCOPE へのアクセス

<b>第 16 章 : インストール後の管理</b> .....	<b>255</b>
インストール後の管理チェックリスト .....	255

<b>第 17 章 : SiteScope を使った作業の開始</b> .....	<b>259</b>
SiteScope サービスの開始 .....	259
Windows プラットフォームでの SiteScope サービスの開始と停止.....	260
Solaris および Linux プラットフォームでの SiteScope プロセスの 開始と停止 .....	261
SiteScope への接続.....	262
SiteScope クラシック・インタフェース .....	263
注意事項と制限事項.....	264

## 第 VI 部 : 付録

<b>付録 A : IIS と SiteScope の Tomcat サーバとの統合</b> .....	<b>273</b>
Apache Tomcat サーバ・ファイルの設定 .....	273
IIS の設定 .....	277
<b>付録 B : SiteScope と SiteMinder との統合</b> .....	<b>281</b>
SiteMinder との統合について .....	282
統合の要件.....	283
統合のプロセス.....	283
SiteMinder ポリシー・サーバの設定 .....	284
SiteMinder を使用するための SiteScope の設定.....	286
IIS の設定 .....	286
さまざまな SiteScope ロールの権限の定義 .....	287
SiteScope へのログオン .....	287
注意事項とガイドライン.....	288
<b>索引</b> .....	<b>289</b>



---

# はじめに

本書では, HP SiteScope のデプロイおよび設定方法について詳しく説明します。

## 本章の内容

- ▶ 本書の構成 (9 ページ)
- ▶ 対象読者 (10 ページ)
- ▶ 必要な情報の見つけ方 (11 ページ)
- ▶ HP SiteScope ドキュメント (11 ページ)
- ▶ その他のオンライン・リソース (11 ページ)
- ▶ ドキュメントの更新情報 (12 ページ)

## 本書の構成

本書は, 次の部で構成されています。

### 第 I 部 SiteScope の紹介

SiteScope について紹介し, スタートアップ・ロードマップを示します。また, デプロイメント計画, エージェントレス監視, および SiteScope ライセンスに関する情報も提供します。

### 第 II 部 SiteScope をインストールする前に

インストールの概要と, システム要件, 推奨サーバ設定について説明します。既存の SiteScope のアップグレード方法についても説明します。

### 第 III 部 SiteScope のインストール

Windows, Linux, および Solaris の各プラットフォームでの SiteScope のインストールとアンインストールの方法について説明します。また、設定ツールを使用した SiteScope の設定方法、オペレーティング・システムと SiteScope のサイズ設定方法、および多くのインスタンスを監視する場合に最適なパフォーマンスを得る方法についても説明します。

### 第 IV 部 SiteScope の安全な稼働

SiteScope プラットフォームを強化するためのオプションの設定方法、モニタにアクセスするのに必要なユーザ権限と資格情報の設定方法、および Secure Sockets Layer (SSL) を使用するための SiteScope の設定方法について説明します。

### 第 V 部 作業の開始と SiteScope へのアクセス

SiteScope サービスの開始と停止方法と、初めて SiteScope にログインする方法について説明します。また、SiteScope のインストールの後に実行しなければならない推奨管理手順についても説明します。

### 第 VI 部 付録

IIS の設定方法と SiteScope と SiteMinder ポリシー・ベース認証の統合方法について説明します。

## 対象読者

本書は、次のユーザを対象としています。

- ▶ SiteScope 管理者
- ▶ Business Service Management 管理者

本書の読者は、エンタープライズ・システムの管理および HP Business Service Management データ・コレクタに精通しているものとします。

## 必要な情報の見つけ方

本書は、HP Business Service Management 文書ライブラリ に含まれています。この文書ライブラリは、すべての Business Service Management ドキュメントへの単一のアクセス・ポイントを提供します。

文書ライブラリにアクセスするには、次の手順で行います。

- ▶ Business Service Management で、[ヘルプ] > [文書ライブラリ] を選択します。
- ▶ Business Service Management ゲートウェイ・サーバ・マシンから、[スタート] > [プログラム] > [HP Business Service Management] > [Documentation] を選択します。

---

**注：**Business Service Management 文書ライブラリ は SiteScope のドキュメントに含まれません。SiteScope のドキュメントにアクセスするには、次の手順で行います。

- ▶ SiteScope インスタンスに直接接続して、SiteScope ヘルプにアクセスします。
- ▶ システム可用性管理 を使用して SiteScope インスタンスに接続して、[ヘルプ] > [このページのヘルプ] を選択して、SiteScope サーバの SiteScope ヘルプを開きます。

## その他のオンライン・リソース

**トラブルシューティングとナレッジ・ベース：**HP ソフトウェア・サポート Web サイトのトラブルシューティング・ページにアクセスします。ここで、セルフ・ソルブ技術情報を検索できます。[ヘルプ] > [トラブルシューティング&ナレッジベース] を選択します。この Web サイトの URL は、<http://support.openview.hp.com/troubleshooting.jsp> です。

**HP ソフトウェア サポート** : HP Software サポート Web サイトにアクセスします。このサイトで、セルフ・ソルブ技術情報を参照できます。また、ユーザ・ディスカッション・フォーラムへの投稿や検索、サポート依頼の送信、パッチや更新されたドキュメントのダウンロードなども行えます。[ヘルプ] > [HP ソフトウェア サポート] を選択します。この Web サイトの URL は、<http://support.openview.hp.com> です。

一部を除き、サポートのご利用には、HP Passport ユーザーとしてご登録の上、ログインしていただく必要があります。また、多くのサポートのご利用には、サポート契約が必要です。

アクセス・レベルの詳細情報については、次の URL を参照してください。

[http://support.openview.hp.com/access\\_level.jsp](http://support.openview.hp.com/access_level.jsp)

HP Passport ユーザ ID の登録は、次の場所で行います。

<http://h20229.www2.hp.com/passport-registration.html> (英語サイト)

**HP ソフトウェア Web サイト** : HP ソフトウェア Web サイトにアクセスします。このサイトでは、HP ソフトウェアの製品に関する最新情報を提供します。新しいソフトウェアのリリース、セミナー、展示会、カスタマ・サポートなどの情報も含まれています。[ヘルプ] > [HP ソフトウェア Web サイト] を選択します。この Web サイトの URL は、<http://welcome.hp.com/country/jp/ja/prodserv/software.html> です。

## ドキュメントの更新情報

HP ソフトウェアは製品のドキュメントを新しい情報で継続的に更新しています。

最新の更新のチェック、またはご使用のドキュメントが最新版かどうかのご確認には、HP ソフトウェア製品マニュアル Web サイト

(<http://support.openview.hp.com/selfsolve/manuals>) にアクセスしてください。

# 第 I 部

---

## SiteScope の紹介



# 1

---

## SiteScope の紹介

HP SiteScope は、サーバ、オペレーティング・システム、ネットワーク・デバイス、ネットワーク・サービス、アプリケーション、アプリケーション・コンポーネントなどから構成される、分散 IT インフラストラクチャの可用性とパフォーマンスの確保を目的とする、エージェントレス監視ソリューションです。

SiteScope は Web ベースでインフラストラクチャを監視し、軽量で柔軟にカスタマイズでき、実運用システムにデータ収集エージェントをインストールする必要がありません。SiteScope は、インフラストラクチャの動作を確認するために必要な情報をリアルタイムで提供します。ユーザは常に問題の通知を受け、それらが重大なものになる前にボトルネックを解決できます。

SiteScope は、テンプレート、テンプレート変更適用ウィザード、自動テンプレート・デプロイメントなど、一連の標準化されたモニタ・タイプと設定を 1 つの構造に開発できるさまざまなツールを提供します。SiteScope テンプレートを組織全体に渡り迅速に配備し、監視側のインフラストラクチャがテンプレートの標準セットに準拠するように素早く更新できます。

SiteScope にはまた、さまざまなメディアでイベント情報の通信と記録に使用できる警告タイプも用意されています。警告テンプレートは、組織のニーズに合わせてカスタマイズできます。

SiteScope は、SiteScope が実行されるサーバの数ではなく、監視される測定値の数に基づいてライセンスされます。測定値とは、システム・リソースの値、パフォーマンス・パラメータ、URL、または同様のシステム応答のことです。つまり、SiteScope のデプロイメントは、組織のニーズおよびインフラストラクチャの要件に合わせて柔軟に規模を変更できます。SiteScope は、HP から提供される永続ライセンス、または新しい SiteScope に含まれる評価ライセンスのどちらかを使用してインストールできます。必要に応じてライセンスをアップグレードして、初期デプロイメントの監視機能を拡張したり、インフラストラクチャ内でデプロイメントを拡張したりできます。

また、SiteScope は、Business Service Management (BSM)、Network Node Manager i (NNMi)、HP Software-as-a-Service、LoadRunner/Performance Center など、ほかの HP 製品の監視の基盤としても機能します。SiteScope を配備し、BSM のサービス・レベル管理などのその他の HP のソリューションを追加することで、確実なインフラストラクチャ監視システムを作成し、ビジネスの視点から IT インフラストラクチャやサービス・レベルを管理できます。

また、SiteScope は HP Operations Manager (HPOM) 製品と連動して、エージェントレスとエージェント・ベースのインフラストラクチャ管理の強力な組み合わせも可能にします。HPOM のエージェントとして使用すると、SiteScope ターゲットは Operations Manager Service ビュー・マップに自動的に追加されます。これにより、HPOM は SiteScope のデータとモニタの状態をシームレスに表示できます。イベント統合では、SiteScope 警告およびモニタ測定値の状態が HPOM に直接送信されます。エージェントレスおよびエージェント・ベースの監視の機能を組み合わせることで、強力で徹底した監視ソリューションを使用できます。HPOM 製品の使用方法の詳細については、HPOM のドキュメントを参照してください。



# 2

---

## スタートアップ・ロードマップ

本章では、SiteScope を起動して実行するまでの、基本的な手順ごとのロードマップを提供します。

### 1 お使いの SiteScope を登録します。

お使いの SiteScope を登録すると、HP の全製品に関するテクニカル・サポートおよび情報へアクセスできるようになります。また、更新とアップグレードも受けられます。SiteScope のユーザ登録は、HP ソフトウェア・サポート Web サイト (<http://support.openview.hp.com>) で行えます。

### 2 ヘルプの入手先について参照します。

HP サービス、HP ソフトウェア・サポート、および SiteScope ヘルプをはじめとするサポートについての情報を得ます。

### 3 SiteScope のデプロイメント計画を立てます。

SiteScope ソフトウェアをインストールする前に、完全なデプロイメントの計画を作成します。19 ページ「デプロイメントの方法と計画」を参考にしてください。詳細なデプロイメント計画のベスト・プラクティスについては、HP の営業担当者までお問い合わせください。

### 4 SiteScope をインストールします。

SiteScope アプリケーションのデプロイの基本手順を理解するには、68 ページ「インストールの概要」を参照してください。SiteScope の安全なデプロイに関する情報については、201 ページ「SiteScope プラットフォームのセキュリティ強化」を参照してください。

### 5 SiteScope にログオンし、システムの管理を開始します。

Web ブラウザを使用して、SiteScope Web インタフェースにログインします。基本的なプラットフォームおよびモニタ管理作業全体について説明している、255 ページ「インストール後の管理」のチェックリストを使用して、SiteScope を実運用に向けてデプロイする準備をします。

## 6 SiteScope をビジネス・ユーザおよびシステム・ユーザに公開します。

SiteScope のユーザが定義され、監視データの受信が可能な状態で運用が開始されたら、ビジネス・ユーザおよびシステム・ユーザに対して、SiteScope の監視機能、レポート機能および警告機能にアクセスして利用する方法を説明するプロセスを開始します。

SiteScope の使用と管理の詳細については、SiteScope のヘルプを参照してください。

# 3

---

## デプロイメントの方法と計画

### 本章の内容

- ▶ エンタープライズ・システム監視の方法 (19 ページ)
- ▶ ビジネス・システム・インフラストラクチャの評価 (21 ページ)
- ▶ SiteScope サーバのサイズ設定 (22 ページ)
- ▶ ネットワークの場所と環境 (23 ページ)
- ▶ Windows 環境の場合に考慮する事項 (24 ページ)
- ▶ UNIX 環境の場合に考慮する事項 (25 ページ)

### エンタープライズ・システム監視の方法

SiteScope をデプロイすることは、リソース計画、システム・アーキテクチャ設計、綿密に計画された高い導入戦略が必要となるプロセスです。本章では、SiteScope のデプロイメントと使用を成功させるための方法と検討する必要のある項目について説明します。

---

**注：** 次の情報を参考にして、インストールを始める前の準備を行ってください。詳細なデプロイメント計画のベスト・プラクティスについては、HP のプロフェッショナル・サービス担当者までお問い合わせください。

---

システム監視を効果的に行うには、一貫した方法が不可欠です。しかし、エンタープライズ監視ソリューションへの取り組み、開発、およびデプロイの方法は、必ずしも明白ではありません。ソリューションでは、IT インフラストラクチャの役割や、それを組織の成功に結びつける方法を検討する必要があります。システム監視は、組織の主要な目的を達成するために組織によって使用されるサービスの可用性や機能を確認するツールです。システム監視を計画するためのガイドとして次の内容を参考にしてください。

### ▶ 監視対象

エンタープライズ・システムを効果的に管理するには、多層的な監視方法を使用します。SiteScope には監視を行うツールが実装されています。あるレベルでは、インフラストラクチャ内の個々のハードウェアの要素を監視して、それらが実行され利用可能であることを確認します。監視対象に、システム上の主要なサービスやプロセスを加えます。これには、低レベルのオペレーティング・システムのプロセスや、主要なアプリケーションの動作状況やパフォーマンスを示すプロセスも含まれています。この上のレベルでは、ビジネス・プロセスのトランザクションを監視して、主要なアプリケーションやサービスが利用可能で期待どおりに機能していることを確認します。

### ▶ イベントを表すしきい値レベル

エンタープライズ・ビジネスに成功するには、情報システムの可用性とパフォーマンスが重要です。モニタに設定するしきい値は、監視するシステムまたはビジネス・プロセスの性質によって決定します。

### ▶ システム・チェックの頻度

システムをチェックする頻度はイベントしきい値の設定と同様に重要です。ミッション・クリティカルな情報システムの可用性は、アクセス可能な期間中は定期的にチェックする必要があります。多くの場合、システムは1日24時間、週7日利用できなくてはなりません。各モニタの[頻度]設定を使用して、SiteScope がシステムをチェックする**頻度**を制御します。チェックを行う時間間隔が長すぎると、問題の検出が遅れる可能性があります。頻繁にチェックしすぎると、すでにビジー状態のシステムを不要にロードする可能性があります。

### ▶ イベント検出時のアクション

監視アプリケーションとして、SiteScope には問題を検出するツールが用意されています。イベントしきい値が発行されたら、SiteScope 警告を使用して通知をタイムリーに送信できます。警告アクションとして電子メール通知が一般的に使用されます。SiteScope には、ほかのシステムと統合が可能なその他の警告タイプも用意されています。

異なる警告トリガ条件で複数の警告定義を定義することにより、警告をエスカレーションするためのスキーマを作成できます。検出されたイベントと警告アクション間の関係をカスタマイズするには、警告の [発行条件設定] を使用します。

利用できなくなったシステムに依存するシステムの監視や警告発行を無効にするイベント・アクションが存在することがあります。一連の警告のカスケディングを避けるには、SiteScope グループおよび SiteScope モニタの依存オプションを使用します。

### ▶ 実行可能な自動応答

問題が検出された場合に理想的なのは、問題に自動的に対応して解決することです。すべてのシステムに対してこれは不可能ですが、SiteScope 警告は、さまざまな状況に対応する柔軟かつ強力な自動修正アクションのためのツールを提供します。お使いの環境で発生する可能性のある問題のうち、自動応答で対処できるものを検討する必要があります。

## ビジネス・システム・インフラストラクチャの評価

- 1 アーキテクチャやデプロイメントに関する決定を行う前に、技術的な要件とビジネス要件を収集します。この段階のアクションは次のとおりです。
  - ▶ 監視するすべてのビジネス・アプリケーションのリストを作成します。このとき、注文処理、アカウントのアクセス機能、データ・クエリ、更新、およびレポートニングなど、エンド・ツー・エンドのサービスを検討する必要があります。
  - ▶ ビジネス・アプリケーションをサポートするサーバのリストを作成します。これには、フロントエンド Web インタフェース、バックエンド・データベース、およびアプリケーション・サーバをサポートするサーバを含める必要があります。
  - ▶ ビジネス・アプリケーションをサポートするネットワーク・デバイスのリストを作成します。これには、ネットワーク・アプリケーションおよび認証サービスが含まれます。

## 第3章・デプロイメントの方法と計画

- ▶ 監視するハートビート要素を特定します。ハートビート要素は、特定のビジネス・システムまたはリソースの可用性の基礎的なインジケータとして機能するサービスです。
  - ▶ 各システムのために監視するリソースを表示するモニタのテンプレートの枠組みを設定します。
- 2** 動作状況を監視するビジネス・システムの関係者と主要な成果物を特定します。成果物は次のように特定します。
- ▶ 生成するレポートは何か
  - ▶ イベント検出時に実行する警告アクションは何か
  - ▶ 警告の送信先は誰か
  - ▶ SiteScope を表示して管理を行うためにアクセスが必要なユーザは誰か
  - ▶ どのような SiteScope 要素がどの関係者にアクセス可能である必要があるか
  - ▶ サービス・レベル・アグリーメントに対するしきい値は何か（必要な場合）
- 3** システム監視機能が動作する制約を理解します。これには、使用できるプロトコル、ユーザ認証要件、ビジネスの機密データを含むシステムへのアクセス、およびネットワーク・トラフィックの制限が含まれます。

## SiteScope サーバのサイズ設定

SiteScope が稼動するサーバのサイズを正しく設定することが、監視のデプロイメントに成功する基礎となります。サーバのサイズ設定は、次のいくつかの要因によって決定します。

- ▶ SiteScope 上で実行されるモニタ・インスタンスの数
- ▶ モニタの平均実行頻度
- ▶ プロトコルの種類と監視するアプリケーションの種類
- ▶ レポートのためにサーバ上で保持する必要がある監視データの量

必要なモニタの数を見積るための出発点は、環境内のサーバ数、それぞれのオペレーティング・システム、および監視するアプリケーションを知ることです。

実行されるモニタ数の見積りに基づいた、推奨されるサーバのサイズ設定の表については、181 ページ「Windows プラットフォーム上での SiteScope のサイズ設定」または 185 ページ「Solaris および Linux プラットフォーム上での SiteScope のサイズ設定」を参照してください。

## ネットワークの場所と環境

大半の SiteScope 監視は、ネットワーク環境でサーバやアプリケーションに要求を行う、Web またはネットワーク・クライアントをエミュレートすることにより実行されます。このため、SiteScope はネットワーク全体にわたって、サーバ、システム、およびアプリケーションにアクセスできなければなりません。これは、SiteScope をインストールする場所を決定する目安となります。

システム、サーバ、およびアプリケーションを監視するために SiteScope が使用する方法は、次の 2 つのカテゴリに分類できます。

- ▶ 標準ベースのネットワーク・プロトコル HTTP, HTTPS, SMTP, FTP, および SNMP が含まれます。
- ▶ プラットフォーム固有のネットワーク・サービスおよびネットワーク・コマンド NetBIOS, telnet, rlogin, およびセキュア・シェル (SSH) が含まれます。

インフラストラクチャの監視ではプラットフォーム固有のサービスを利用します。エージェントレス・ソリューションとして監視するには、SiteScope がインフラストラクチャ内の多くのサーバに対して、頻繁にログインと認証を行う必要があります。パフォーマンスおよびセキュリティ上の理由から、SiteScope は同じドメイン内にデプロイし、できるだけ監視するシステム要素に近付けることをお勧めします。また、SiteScope を該当のネットワーク認証サービス（たとえば Active Directory, NIS, または LDAP）と同じサブネット内に置くこともお勧めします。必要に応じて、HTTP または HTTPS を使用して、SiteScope インタフェースをリモートでアクセスおよび管理できます。

---

**注：**大量の監視アクティビティが WAN (Wide Area Network) 上での通信を必要とする位置に SiteScope をデプロイしないでください。

---

**ヒント:** ファイアウォール越しにサーバを監視するには、サーバの可用性の監視に異なるプロトコルとポートが必要となります。そのため、セキュリティ上の理由から、SiteScope を使用しないことをお勧めします。SiteScope のライセンスは、ファイアウォールの両側にある別々の SiteScope をサポートします。HTTP または HTTPS を使用して、1 台のワークステーションから 2 つ以上の異なる SiteScope に同時にアクセスできます。

---

## Windows 環境の場合に考慮する事項

SiteScope のインストールには、管理者権限を持つアカウントを使用する必要があります。また、SiteScope サービスの実行にも、管理者権限を持つユーザ・アカウントを使用することをお勧めします。ローカル・システム・アカウントも使用できますが、リモート Windows サーバへの接続プロファイルの設定に影響します。

また、SiteScope はリモート・マシン上で Windows パフォーマンス・レジストリを使用し、サーバのリソースと可用性を監視します。この監視機能を有効にするには、リモート・マシン用のリモート・レジストリ・サービスをアクティブにする必要があります。



## UNIX 環境の場合に考慮する事項

SiteScope は、root ユーザで Solaris または Linux 環境にインストールする必要があります。SiteScope がインストールされた後、SiteScope を実行する権限のある非 root ユーザ・アカウントを作成できます (SiteScope Web サーバが特権ポート上で実行されない限り、root ユーザが実行する必要はありません)。SiteScope を実行する権限のある非 root ユーザの設定の詳細については、26 ページ「SiteScope を実行する権限のある非 root ユーザ・アカウントの設定」を参照してください。

SiteScope を使用したリモート UNIX サーバのエージェントレス監視のセットアップに関する追加情報を以下に示します。

- ▶ **リモート・ログイン・アカウント・シェル** : SiteScope は、アプリケーションとして、ほとんどの一般的な UNIX シェルで正常に実行できます。SiteScope は、リモート UNIX サーバと通信する場合、Bourne シェル (sh) または tsch シェルのどちらかと通信します。したがって、これらのシェルのうちの 1 つを使用するため、各リモート UNIX サーバ上の関連するログイン・アカウントにはシェル・セットが必要です。

---

**注** : シェル・プロファイルは、リモート・マシンと通信するために SiteScope が使用するログイン・アカウントにのみ設定します。リモート・マシン上のその他のアプリケーションおよびアカウントは、現在定義されているシェルを使用できます。

---

- ▶ **アカウント権限** : リモート UNIX サーバを監視する場合、コマンド権限の設定を解決しなければならないことがあります。リモート UNIX サーバからサーバ情報を取得するために SiteScope が実行するほとんどのコマンドは、リモート・サーバの `/usr/bin` ディレクトリにあります。ただし、メモリの情報を取得するコマンドなど、一部のコマンドは `/usr/sbin` にあります。`/usr/sbin` コマンドは通常、root ユーザまたはその他の高い権限を持つユーザのために予約されているため、これら 2 つは違う場所にあります。

---

**注：** SiteScope には高いアカウント権限が必要ですが、セキュリティ上の理由から、root アカウントを使用した SiteScope の実行や、リモート・サーバで root ログイン・アカウントを使用するような SiteScope の設定は行わないことをお勧めします。

---

権限に問題がある場合は、コマンドを実行する権限を持つ別のユーザとして SiteScope にログインするか、または SiteScope が使用しているユーザ・アカウント用に権限を変更する必要があります。

## SiteScope を実行する権限のある非 root ユーザ・アカウントの設定

SiteScope は、root ユーザ・アカウントから Linux または Solaris にインストールする必要があります。SiteScope がインストールされた後、SiteScope を実行する権限のある非 root ユーザ・アカウントを作成できます。

---

**注：** すべてのサーバ監視機能を使用するには SiteScope に高いアカウント権限が必要ですが、root アカウントからの SiteScope の実行や、リモート・サーバへのアクセスに root アカウントを使用するような SiteScope の設定は行わないことをお勧めします。

---

SiteScope を実行する権限のある非 root ユーザ・アカウントを作成するには、次の手順で行います。

- 1 新しいユーザを追加します。  
useradd newuser
- 2 SiteScope インストール・フォルダの権限を変更します。  
chmod 755 /opt/HP/SiteScope/ -R
- 3 SiteScope インストール・フォルダの所有権を変更します。  
chown newuser /opt/HP/SiteScope/ -R
- 4 新しいユーザとしてログインします。  
su newuser

5 インストール・フォルダに移動します。

```
cd /opt/HP/SiteScope
```

6 SiteScope を実行します。./start

---

**注 :** HP Operations Manager イベントおよび測定値の統合を有効にするには、SiteScope マシン上の HP Operations Agent は SiteScope と同じユーザ(つまり非 root ユーザ) で実行する必要があります。詳細は、『HP Operations Manager for UNIX - HTTPS Agent Concepts and Configuration Guide 9.00』の「Configure an Agent to run Under an Alternative User on UNIX」を参照してください。

---



# 4

---

## エージェントレス監視について

### 本章の内容

- ▶ SiteScope 監視機能について (29 ページ)
- ▶ エージェントレス監視環境について (31 ページ)

### SiteScope 監視機能について

本章では、SiteScope のエージェントレス監視の概念について説明します。エージェントレス監視では、監視対象のサーバ上にエージェント・ソフトウェアをデプロイすることなく監視を行うことができます。このため、SiteScope のデプロイメントと保守は、パフォーマンスや運用を監視するほかのソリューションに比べてかなり簡単です。エージェント・ベースの監視方法とは異なり、SiteScope では次の方法によって TCO (Total Cost of Ownership) が削減されます。

- ▶ インフラストラクチャの各コンポーネントの詳細なパフォーマンス・データの収集
- ▶ 実運用システムで監視エージェントを実行するための余分なメモリまたは CPU の能力が不要
- ▶ すべての監視コンポーネントを中央のサーバに集約することによる保守時間および保守費用の削減
- ▶ 監視エージェントを更新するための実運用システムのオフライン化が不要
- ▶ ほかにエージェントと共存するための監視エージェントのチューニングが不要

## 第4章・エージェントレス監視について

- ▶ 実運用中のサーバへの物理的なアクセスやソフトウェア配布操作を待つ必要がなくなることによる、インストール時間の短縮化
- ▶ 不安定なエージェントが引き起こす実運用サーバでのシステム・ダウンタイムの可能性の減少

SiteScope は、システムやサービスを多くのレベルで監視するため、多様なモニタ・タイプを備えた多機能な運用監視ソリューションです。モニタ・タイプの多くは、特殊な環境に合わせてさらにカスタマイズできます。

企業や組織は複数のソリューションを頻繁にデプロイメント、保守して、その運用や可用性をさまざまなレベルで監視しなければなりません。運用の監視は、次の表で説明するように、いくつかのレベルまたは層に分類できます。

モニタ・タイプ	説明
サーバの状態	CPU 利用率、メモリ、格納領域、主要なプロセスやサービスのステータスなど、サーバ・マシンのリソースを監視
Web プロセスとコンテンツ	主要な URL の可用性、主要な Web ベースのプロセスの機能、および主要なテキスト・コンテンツを監視
アプリケーション・パフォーマンス	Web サーバ、データベース、その他のアプリケーション・サーバなどの、ミッション・クリティカルなアプリケーションのパフォーマンス統計情報を監視
ネットワーク	サービスの接続性と可用性を監視

## エージェントレス監視環境について

大半の SiteScope 監視は、ネットワーク環境でサーバやアプリケーションに要求を行う、Web またはネットワーク・クライアントをエミュレートすることにより実行されます。このため、SiteScope はネットワーク全体にわたって、サーバ、システム、およびアプリケーションにアクセスできなければなりません。

本項の内容

- ▶ 29 ページ「SiteScope の監視の方法」
- ▶ 32 ページ「ファイアウォールと SiteScope のデプロイメント」

### SiteScope の監視の方法

システム、サーバ、およびアプリケーションを監視するために SiteScope が使用する方法は、次の 2 つのカテゴリに分類できます。

#### ▶ 標準ベースのネットワーク・プロトコル

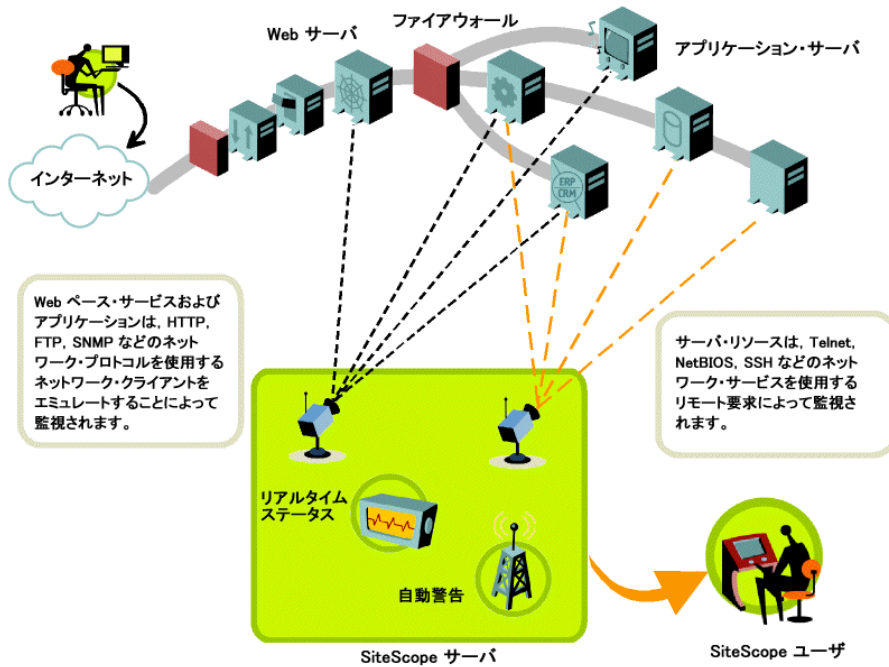
このカテゴリには、HTTP、HTTPS、FTP、SMTP、SNMP、および UDP を使用した監視が含まれます。これらの種類のモニタは、一般に SiteScope が実行されているプラットフォームまたはオペレーティング・システムに依存しません。たとえば、Linux にインストールされた SiteScope は、Windows、HP-UX、Solaris を実行しているサーバ上の Web ページ、ファイルのダウンロード、電子メールの送信、SNMP データを監視できます。

#### ▶ プラットフォーム固有のネットワーク・サービスおよびネットワーク・コマンド

このカテゴリには、クライアントとしてリモート・マシンにログインして情報を要求するモニタ・タイプが含まれます。たとえば、SiteScope は Telnet または SSH を使用してリモート・サーバにログインし、ディスク領域、メモリ、またはプロセスに関する情報を要求できます。Microsoft Windows プラットフォームでは、SiteScope は Windows パフォーマンス・カウンタ・ライブラリも利用します。プラットフォーム固有のサービスを利用するモニタ・タイプの場合、異なるオペレーティング・システム間の監視には、いくつかの制限があります。たとえば、Microsoft Exchange 2007/2010 および Microsoft Windows ダイアルアップ・モニタは、Windows 用の SiteScope には含まれていますが、Linux 用の SiteScope には含まれていません。

## 第 4 章 • エージェントレス監視について

次の図に、SiteScope を使用したエージェントレス監視の概要を示します。SiteScope モニタはリモート・マシン上でサービスの要求を行い、パフォーマンスおよび可用性に関するデータを収集します。



SiteScope サーバ・モニタ（たとえば、CPU、ディスク領域、メモリ、サービス）は、次のプラットフォーム上でサーバ・リソースを監視できます。

- ▶ Windows NT/2000/2003/2008/XP Pro/Vista/Windows 7（x86 および Alpha については、次の注を参照）
- ▶ Solaris（Sparc および x86）
- ▶ Linux
- ▶ AIX
- ▶ HP-UX（HP-UX 64 ビット）



- ▶ Digital Unix
- ▶ SGI IRIX
- ▶ SCO
- ▶ FreeBSD

---

**注 :** Solaris または Linux で実行されている SiteScope から Windows マシン上のサーバ・リソース (CPU 利用率, メモリなど) を監視するには, SSH 接続が必要です。この方法で監視する各 Windows マシンに, セキュア・シェル・クライアントをインストールする必要があります。この機能を有効にする方法の詳細については, SiteScope ヘルプ で 『SiteScope の使用』の「セキュア・シェル (SSH) を使用した SiteScope の監視」セクションを参照してください。

---

SiteScope にはアダプタ設定テンプレートがあり, これにより UNIX オペレーティング・システムのその他のバージョンを監視するように SiteScope の機能を拡張できます。詳細については, SiteScope ヘルプ の「UNIX オペレーティング・システム・アダプタ」を参照してください。

SiteScope がリモートでシステム・データにアクセスする各サーバのログイン・アカウントを有効にする必要があります。監視対象のサーバのログイン・アカウントは, SiteScope がインストールされ実行されているアカウントに合わせて設定する必要があります。たとえば, SiteScope が **sitescope** というユーザ名のアカウントで実行されている場合, この SiteScope によって監視されるサーバ上のリモート・ログイン・アカウントには, **sitescope** ユーザに対して設定されたユーザ・ログイン・アカウントが必要です。

## ファイアウォールと SiteScope のデプロイメント

ファイアウォール越しにサーバを監視するには、サーバの監視に異なるプロトコルとポートが必要となります。そのため、セキュリティ上の理由から、SiteScope を使用しないことをお勧めします。SiteScope のライセンスは、ファイアウォールの両側にある別々の SiteScope をサポートします。HTTP または HTTPS 経由で、1 台のワークステーションから 2 つ以上の SiteScope にアクセスできます。

次の表に、標準的な監視環境で SiteScope が監視および警告発行のために一般的に使用するポートの一覧を示します。

SiteScope の機能	使用される標準ポート
SiteScope Web サーバ	ポート 8080
FTP モニタ	ポート 21
メール・モニタ	ポート 25 (SMTP), 110 (POP3), 143 (IMAP)
ニュース・モニタ	ポート 119
Ping モニタ	ICMP パケット
SNMP モニタ	ポート 161 (UDP)
URL モニタ	ポート 80,443
リモート Windows 監視	ポート 139
電子メール警告	ポート 25
Post 警告	ポート 80,443
SNMP トラップ警告	ポート 162 (UDP)
リモート UNIX ssh	ポート 22
リモート UNIX Telnet	ポート 23
リモート UNIX rlogin	ポート 513

# 5

---

## SiteScope のライセンス

### 本章の内容

- ▶ SiteScope のライセンスの概要 (35 ページ)
- ▶ SiteScope ライセンスのタイプについて (36 ページ)
- ▶ モニタ・ライセンスの概要 (40 ページ)
- ▶ ライセンス・ポイント数の見積もり (59 ページ)
- ▶ ネットワークの監視 (61 ページ)

### SiteScope のライセンスの概要

SiteScope のライセンスは、同時に作成可能なモニタの数と、(場合によっては) 使用可能なモニタのタイプを制御します。サイト、シート、またはユーザの数に基づいて販売されるソフトウェアとは異なり、SiteScope のライセンスは監視の要件に基づいています。このため、SiteScope の規模を環境に合わせて効率良く柔軟に調整できます。

SiteScope ライセンスの購入と登録を行うことによって、重要な権利および権限を得ることができます。登録ユーザは、HP のすべての製品に関するテクニカル・サポートや情報を利用できるようになり、無料のアップデートやアップグレードを受ける資格を得ます。また、HP ソフトウェア・サポート Web サイトへのアクセス権も付与されます。このアクセス権を使用して、HP ソフトウェア・セルフ・ソルブ技術情報での技術情報の検索や、SiteScope ドキュメントのアップデートのダウンロードを行うことができます。

---

**注：**11.00 以前のバージョンの SiteScope のライセンス・キーは、現在のバージョンと互換性がありません。ライセンス・キーの配信を <http://webware.hp.com> (英語サイト) から自動的に実行できます。

---

## SiteScope ライセンスのタイプについて

SiteScope を使用するには、有効なライセンスが必要です。SiteScope は、一般ライセンスまたは SiteScope の新規のインストールおよびダウンロードで提供される 60 日間の評価ライセンスを使用してインストールできます。また、拡張ライセンスを購入すると、SiteScope ソリューション・テンプレートおよび任意指定のモニタの使用を有効にできます。

SiteScope のライセンスには、次のタイプがあります。

タイプ	説明	期間	表示されるポイント
一般ライセンス	ライセンスの一部として含まれているモニタ・ポイントの数に基づいて、SiteScope の標準的な機能が使用可能になります。拡張ライセンスが必要なモニタは含まれません。	このライセンス・タイプは一時 (時間ベース) または永続のいずれかです。	ライセンスで購入したポイントの総数が表示されます。

タイプ	説明	期間	表示されるポイント
評価ライセンス	<p>無料の評価期間中は、SiteScope の標準機能が使用可能になり、また、次の追加モニタを使用できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>▶ COM+ サーバ</li> <li>▶ Microsoft Exchange (ソリューション・テンプレートを使用)</li> <li>▶ SAP</li> <li>▶ Siebel</li> <li>▶ Web スクリプト</li> <li>▶ WebSphere MQ の状態</li> </ul> <p><b>注：</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>▶ 評価ライセンスに含まれているすべてのモニタが一般ライセンスのアップグレードの際に含まれるわけではありません。追加ライセンスが必要なモニタのリストについては、下の「拡張ライセンス」を参照してください。</li> <li>▶ 評価期間の期限が切れたり、ライセンスがアップグレードされたりすると、一般ライセンスに含まれないモニタおよびソリューション・テンプレートは使用できなくなります。</li> </ul>	<p>最大 60 日間の固定の試用期間。</p> <p><b>注：</b> 試用期間は永続または時間ベースのライセンスを購入すると直ちに終了します。</p>	500 ポイント
OS インスタンスのライセンス	<p>ポイントではなく、OS インスタンスでシステム・モニタのライセンスを受けることができます。ライセンスの詳細およびこのライセンスがサポートするモニタ・タイプのリストについては、42 ページ「OS インスタンス拡張ライセンス」を参照してください。</p>	このライセンス・タイプは一時（時間ベース）または永続のいずれかです。	購入した OS / ホストのライセンスの総数が表示されます。

タイプ	説明	期間	表示されるポイント
<b>フェイルオーバー・ライセンス</b>	<p><b>SiteScope Failover :</b> SiteScope インスタンスを有効にして、他の SiteScope インストールのフェイルオーバーとして機能するように、HP により発行された特別なライセンス。</p> <p><b>SiteScope Failover Manager :</b> SiteScope Failover Manager は無料ですぐに使用可能ですが、一般ライセンスがプライマリ SiteScope サーバに対してノード・ロックされる場合に備え、別途フェイルオーバー・ライセンスが必要です。このライセンスは、プライマリ SiteScope サーバがダウンした場合、SiteScope Failover Manager に適用されます。</p>	<p>このライセンス・タイプは一時（時間ベース）または永続のいずれかです。</p>	<p>プライマリ SiteScope のライセンスで購入したポイントの総数が表示されます。</p>

タイプ	説明	期間	表示されるポイント
<b>拡張ライセンス</b>	<p>個々の拡張ライセンスは、特定のソリューション・テンプレートまたは特定の拡張モニタ・タイプを使用可能にします。</p> <p><b>ソリューション・テンプレート：</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>▶ Active Directory</li> <li>▶ HP Quality Center</li> <li>▶ HP Service Manager</li> <li>▶ Microsoft Exchange</li> <li>▶ Microsoft IIS 6</li> <li>▶ Microsoft Lync サーバ</li> <li>▶ Microsoft SharePoint</li> <li>▶ Microsoft SQL Server</li> <li>▶ JBoss</li> <li>▶ .NET</li> <li>▶ Oracle データベース</li> <li>▶ OS (AIX Host, Linux Host, Solaris Host, Microsoft Windows Host)</li> <li>▶ SAP</li> <li>▶ Siebel</li> <li>▶ VMware Host</li> <li>▶ WebLogic アプリケーション・サーバ</li> <li>▶ WebSphere アプリケーション・サーバ</li> </ul> <p><b>モニタ・タイプ：</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>▶ COM+ Server Monitor</li> <li>▶ SAP</li> <li>▶ Siebel</li> <li>▶ VMware ホスト CPU/メモリ/Network/State/Storage</li> <li>▶ Web スクリプト・モニタ</li> <li>▶ WebSphere MQ の状態モニタ</li> </ul>	<p>このライセンスのタイプは一時または永続のいずれかです。</p>	<p>ポイントなし。各モニタまたはソリューション・テンプレートには、それ自体のポイント消費があります。詳細については、45 ページ「モニタに使用されるライセンス・ポイント」および 56 ページ「ソリューション・テンプレートに使用されるライセンス・ポイント」を参照してください。</p>

次の表に、一般ライセンスと拡張ライセンスの違いをまとめます。

トピック	一般ライセンス	拡張ライセンス
モニタ・ポイント	ライセンス・キーには、事前に設定された「モニタ・ポイント」の数が含まれています。モニタ・ポイントによって、作成できるモニタ・インスタンスの数と、個々の SiteScope サーバで測定できる測定値の数が決まります。	拡張ライセンス・キーは、SiteScope が使用する拡張モニタ・タイプを使用可能にします。一般ライセンス・キーによって管理されているモニタ・ポイントの総数が、拡張ライセンスによって増えることはありません。 拡張モニタ・タイプを作成するために使用されるモニタ・ポイントは、一般ライセンス・キーに含まれるモニタ・ポイントの総数から差し引かれます。
	モニタ・ポイントの使用方法的詳細については、40 ページ「モニタ・ライセンスの概要」を参照してください。	

SiteScope では、ライセンスの期限が切れる 7 日前に電子メール通知を自動的に送信し、ライセンスの期限が切れると SiteScope を開くたびにポップアップ・メッセージが表示されます。

SiteScope ライセンスをアップグレードまたは更新する必要がある場合、HP License Key Delivery Service サイト (<https://webware.hp.com/licensinghome/hppwelcome.asp>) (英語サイト) にアクセスします。

## モニタ・ライセンスの概要

SiteScope のライセンスはポイント・システムに基づいています。SiteScope が使用するポイント数は、購入したライセンス・タイプおよび使用中のモニタの数とタイプによって異なります。

本項の内容

- ▶ 41 ページ「ポイント・システム」
- ▶ 42 ページ「OS インスタンス拡張ライセンス」



- ▶ 45 ページ「モニタに使用されるライセンス・ポイント」
- ▶ 56 ページ「ソリューション・テンプレートに使用されるライセンス・ポイント」

---

**注：**

- ▶ SiteScope には、ユーザ・ベースのアクセス権のライセンスはありません。SiteScope アプリケーション・サーバにアクセスできるユーザの数には制限がありません。
- ▶ 各ライセンスは、ライセンスの混乱や悪用される可能性を避けるためノード・ロックされます。ノード・ロックとは、ライセンスが特定のマシンのみで有効になることです。

---

## ポイント・システム

モニタ・タイプのライセンスはポイント・システムに基づいています。SiteScope の永続ライセンスは、モニタ・タイプの組み合わせを作成するために使用されるポイントをいくつか提供します。

作成できる SiteScope モニタの数は、次の 2 つの要因によって決まります。

- ▶ 購入したモニタ・ポイントの総数
- ▶ 使用する SiteScope モニタのタイプ

モニタ・タイプは、その作成に必要なポイントの数によってカテゴリに分かれます。たとえば、Web ページに 1 つの URL モニタを設定する場合は、モニタ・インスタンスごとに 1 つのモニタ・ポイントが必要です。Apache サーバ・モニタを設定する場合は、監視するサーバ・パフォーマンス測定値ごとに 1 つのモニタ・ポイントが必要です。

Microsoft Windows リソース・モニタまたは UNIX リソース・モニタを設定する場合は、オブジェクト・インスタンスごとに 1 つのモニタ・ポイントが必要です。これらのモニタを設定するには、最初にオブジェクト、次にそのオブジェクトに関連するインスタンス、そして各インスタンスに関連するカウンタを選択します。次の Microsoft Windows リソース・モニタの例では、選択されたオブジェクトが **Process**、選択されたインスタンスが **explorer**、そして選択されたカウンタが **% Processor Time** と **% User Time** です。この選択では、**explorer** インスタンスに 1 ポイント必要となります。監視する別のインスタンスを選択すると、2 ポイント必要というようになります。

The screenshot shows the SiteScope configuration interface. On the left, under '使用可能なカウンタ' (Available Counters), the 'Process' object is selected. In the 'インスタンス:' (Instances) list, 'explorer' is selected. In the 'カウンタ:' (Counters) list, '% User Time' is selected. On the right, under '選択されているカウンタ' (Selected Counters), a table shows the selected configuration:

オブジェクト	インスタンス	カウンタ
Process	explorer	% Process...
Process	explorer	% User Time

Below the table, it indicates '合計カウンタ数: 2' (Total Counter Count: 2).

### OS インスタンス拡張ライセンス

使用モニタ数ではなく、OS インスタンスでシステム・モニタのライセンスを受けることができます。たとえば、同一のオペレーティング・システムまたはホスト上にある CPU、ディスク・スペース、メモリ・モニタを使用している場合、モニタの 3 ポイントではなく、OS インスタンスの 1 ポイントがライセンスから差し引かれます。サポートされているモニタのリストについては、44 ページ「OS インスタンス拡張ライセンス - サポートされているモニタ」を参照してください。

SiteScope では、利用可能な OS インスタンス拡張ライセンスを、最も監視されている (ホスト /OS を監視している対応モニタが消費するポイントが一番多い) ホスト /OS のインスタンスに適用します (これは上記で使用されている概念です)。これらの監視に使用されるポイントが解放され、OS ライセンスの対象ではないその他のモニタで使用できます。

[プリファレンス] > [一般プリファレンス] > [ライセンス] で OS インスタンス・ライセンス消費の詳細を表示できます。OS インスタンス・ライセンス使用状況テーブルには、ライセンスが対象とする OS インスタンス、必要なポイント数と使用中のライセンス・ポイントの比較、OS インスタンス拡張ライセンスを使用したことによるホストごとの節約ポイント数が含まれています。

OS インスタンス拡張ライセンスの期限が切れるか除去される場合、OS インスタンス拡張ライセンスを使用していたホストに属しているすべてのモニタが、一般ライセンス・ポイント・プールのポイントを消費し始めます。SiteScope モニタが使用するライセンス・ポイント数が使用可能なポイント数を超える状況が発生することがあります。この場合、SiteScope は 7 日以内に SiteScope がシャットダウンするというメッセージを送信します。SiteScope のシャットダウンを回避するには、より多くのライセンス・ポイントを追加するか、使用しているモニタ数を削減する必要があります。ポイントを追加するには、HP License Key Delivery Service に問い合わせて (<http://webware.hp.com>) (英語サイト)、新しいライセンスを求めます。

---

**注：**システム可用性管理ライセンスは OS インスタンス拡張ライセンスの影響を受けません。システム可用性管理ポイントは、引き続き BSM にレポートするモニタに対してカウントされます。これは、SiteScope の OS インスタンス拡張ライセンスに基づいてカウントされる場合も変わりません。この情報は OS インスタンス・ライセンス消費レポートに表示されます (使用される可能性のある総ポイント数またはシステム可用性管理ポイントの使用あるいはその両方)。

Webware で OS インスタンス拡張ライセンスを注文するときは、ライセンス名は Operations OS インスタンスに含まれる **HP SiteScope < X >ポイントまたは < Y >です**。

---

## OS インスタンス拡張ライセンス - サポートされているモニタ

次のモニタ・タイプは、ライセンスに基づく OS インスタンスを使用します。

<ul style="list-style-type: none"><li>▶ CPU</li><li>▶ ディレクトリ</li><li>▶ ディスク領域 (廃止)</li><li>▶ ダイナミック・ディスク・スペース</li><li>▶ ファイル</li><li>▶ HP NonStop イベント・ログ</li><li>▶ HP NonStop リソース</li><li>▶ メモリ</li><li>▶ Microsoft アーカイブ・サーバ</li><li>▶ 音声ビデオ会議サーバ</li><li>▶ Microsoft Director サーバ</li><li>▶ Microsoft エッジ・サーバ</li><li>▶ Microsoft フロント・エンド・サーバ</li><li>▶ Microsoft Hyper-V</li><li>▶ Microsoft 仲介サーバ</li><li>▶ Microsoft 監視および CDR サーバ</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>▶ Microsoft Registrar サーバ</li><li>▶ Microsoft Windows イベント・ログ</li><li>▶ Microsoft Windows パフォーマンス・カウンタ</li><li>▶ Microsoft Windows リソース</li><li>▶ Microsoft Windows サービス・ステート</li><li>▶ Ping</li><li>▶ ポート</li><li>▶ サービス</li><li>▶ Solaris ゾーン</li><li>▶ UNIX リソース</li><li>▶ VMware ホスト CPU</li><li>▶ VMware ホスト・メモリ</li><li>▶ VMware ホスト・ネットワーク</li><li>▶ VMware ホスト状態</li><li>▶ VMware ホスト・ストレージ</li><li>▶ VMware パフォーマンス</li></ul>
--	--

## モニタに使用されるライセンス・ポイント

次に、SiteScope モニタ・タイプのインスタンスごとに使用されるポイントの一覧を示します。

モニタ	モニタのカテゴリ	使用されるライセンス・ポイント
Amazon Web Services	仮想化およびクラウド	測定値あたり 1 ポイント
Apache サーバ	アプリケーション	測定値あたり 1 ポイント
BroadVision アプリケーション・サーバ	アプリケーション	測定値あたり 1 ポイント
Check Point	アプリケーション	測定値あたり 1 ポイント
Citrix	アプリケーション	測定値あたり 1 ポイント
ColdFusion サーバ	アプリケーション	測定値あたり 1 ポイント
COM+ サーバ	アプリケーション	測定値あたり 1 ポイント <b>注：</b> 無料評価期間終了後に SiteScope インタフェースでこのモニタ・タイプを使用可能にするには追加ライセンスが必要です。
コンポジット	汎用	含まれるモニタに基づいて計算 <b>注：</b> このモニタは、その中に含まれるメンバ・モニタのモニタ・ポイントを加算せずに設定されます。
CPU	サーバ	モニタあたり 1 ポイント <b>注：</b> OS インスタンス拡張ライセンスの対象となっているホストで実行されている場合、このモニタでポイントは消費されません。詳細については、42 ページ「OS インスタンス拡張ライセンス」を参照してください。
カスタム	カスタマイズ可能	10 測定値ごとに 1 ポイント。たとえば、41 測定値で 5 ポイント消費します。

モニタ	モニタのカテゴリ	使用されるライセンス・ポイント
カスタム・データベース	カスタマイズ可能	10 測定値ごとに 1 ポイント。たとえば, 41 測定値で 5 ポイント消費します。
カスタム・ログ・ファイル	カスタマイズ可能	10 測定値ごとに 1 ポイント。たとえば, 41 測定値で 5 ポイント消費します。
カスタム WMI	カスタマイズ可能	10 測定値ごとに 1 ポイント。たとえば, 41 測定値で 5 ポイント消費します。
データベース・カウンタ	データベース	測定値あたり 1 ポイント
データベース・クエリ	データベース	モニタあたり 1 ポイント
DB2 8.x および 9.x	データベース	測定値あたり 1 ポイント
DHCP	サーバ	モニタあたり 1 ポイント
ディレクトリ	汎用	モニタあたり 1 ポイント <b>注:</b> OS インスタンス拡張ライセンスの対象となっているホストで実行されている場合, このモニタでポイントは消費されません。詳細については, 42 ページ「OS インスタンス拡張ライセンス」を参照してください。
ディスク領域 (廃止 - ダイナミック・ディスク・スペース・モニタで代替)	サーバ	モニタあたり 1 ポイント <b>注:</b> OS インスタンス拡張ライセンスの対象となっているホストで実行されている場合, このモニタでポイントは消費されません。詳細については, 42 ページ「OS インスタンス拡張ライセンス」を参照してください。
DNS	ネットワーク	モニタあたり 1 ポイント
ダイナミック・ディスク・スペース	サーバ	ディスクあたり 1 ポイント <b>注:</b> OS インスタンス拡張ライセンスの対象となっているホストで実行されている場合, このモニタでポイントは消費されません。詳細については, 42 ページ「OS インスタンス拡張ライセンス」を参照してください。
e ビジネス・トランザクション	Web トランザクション	モニタあたり 1 ポイント
F5 Big-IP	アプリケーション	測定値あたり 1 ポイント

モニタ	モニタのカテゴリ	使用されるライセンス・ポイント
ファイル	汎用	モニタあたり 1 ポイント <b>注:</b> OS インスタンス拡張ライセンスの対象となっているホストで実行されている場合、このモニタでポイントは消費されません。詳細については、42 ページ「OS インスタンス拡張ライセンス」を参照してください。
フォーミュラ・コンポジット	ネットワーク	モニタあたり 1 ポイント
FTP	ネットワーク	モニタあたり 1 ポイント
Generic Hypervisor	仮想化およびクラウド	ホストあたり 1 ポイント、ゲストあたり 1 ポイント
HAProxy	アプリケーション	測定値あたり 1 ポイント
HP iLO (Integrated Lights-Out)	サーバ	測定値あたり 1 ポイント
HP NonStop イベント・ログ	サーバ	モニタあたり 1 ポイント <b>注:</b> OS インスタンス拡張ライセンスの対象となっているホストで実行されている場合、このモニタでポイントは消費されません。詳細については、42 ページ「OS インスタンス拡張ライセンス」を参照してください。
HP NonStop リソース	サーバ	オブジェクト・インスタンスあたり 1 ポイント <b>注:</b> OS インスタンス拡張ライセンスの対象となっているホストで実行されている場合、このモニタでポイントは消費されません。詳細については、42 ページ「OS インスタンス拡張ライセンス」を参照してください。
IPMI	サーバ	測定値あたり 1 ポイント (最大: 120) 120)
JMX	汎用	モニタあたり 1 ポイント
KVM	仮想化およびクラウド	ホストあたり 1 ポイント、ゲストあたり 1 ポイント
LDAP	汎用	モニタあたり 1 ポイント

モニタ	モニタのカテゴリ	使用されるライセンス・ポイント
リンク・チェック	Web トランザクション	モニタあたり 1 ポイント
ログ・ファイル	汎用	モニタあたり 1 ポイント
メール	ネットワーク	モニタあたり 1 ポイント
MAPI	ネットワーク	モニタあたり 1 ポイント
メモリ	サーバ	モニタあたり 1 ポイント <b>注:</b> OS インスタンス拡張ライセンスの対象となっているホストで実行されている場合、このモニタでポイントは消費されません。詳細については、42 ページ「OS インスタンス拡張ライセンス」を参照してください。
メモリキャッシュ統計	サーバ	モニタあたり 1 ポイント
Microsoft アーカイブ・サーバ	仮想化およびクラウド	測定値あたり 1 ポイント <b>注:</b> OS インスタンス拡張ライセンスの対象となっているホストで実行されている場合、このモニタでポイントは消費されません。詳細については、42 ページ「OS インスタンス拡張ライセンス」を参照してください。
音声ビデオ会議サーバ	仮想化およびクラウド	測定値あたり 1 ポイント <b>注:</b> OS インスタンス拡張ライセンスの対象となっているホストで実行されている場合、このモニタでポイントは消費されません。詳細については、42 ページ「OS インスタンス拡張ライセンス」を参照してください。
Microsoft ASP サーバ	アプリケーション	測定値あたり 1 ポイント
Microsoft Director サーバ	仮想化およびクラウド	測定値あたり 1 ポイント <b>注:</b> OS インスタンス拡張ライセンスの対象となっているホストで実行されている場合、このモニタでポイントは消費されません。詳細については、42 ページ「OS インスタンス拡張ライセンス」を参照してください。



モニタ	モニタのカテゴリ	使用されるライセンス・ポイント
Microsoft エッジ・サーバ	仮想化およびクラウド	測定値あたり 1 ポイント <b>注:</b> OS インスタンス拡張ライセンスの対象となっているホストで実行されている場合、このモニタでポイントは消費されません。詳細については、42 ページ「OS インスタンス拡張ライセンス」を参照してください。
Microsoft Exchange 2007/2010	アプリケーション	測定値あたり 1 ポイント
Microsoft Exchange 2003 のメール・ボックス	アプリケーション	モニタあたり 3 ポイント
Microsoft Exchange 2000/2003/2007 のメッセージ・トラフィック	アプリケーション	モニタあたり 5 ポイント
Microsoft Exchange 5.5 のメッセージ・トラフィック	アプリケーション	モニタあたり 5 ポイント
Microsoft Exchange 2003 のパブリック・フォルダ	アプリケーション	モニタあたり 5 ポイント
Microsoft フロント・エンド・サーバ	仮想化およびクラウド	測定値あたり 1 ポイント <b>注:</b> OS インスタンス拡張ライセンスの対象となっているホストで実行されている場合、このモニタでポイントは消費されません。詳細については、42 ページ「OS インスタンス拡張ライセンス」を参照してください。
Microsoft Hyper-V	仮想化およびクラウド	監視対象の VM または物理サーバごとに 1 ポイント。 <b>注:</b> OS インスタンス拡張ライセンスの対象となっているホストで実行されている場合、このモニタでポイントは消費されません。詳細については、42 ページ「OS インスタンス拡張ライセンス」を参照してください。

モニタ	モニタのカテゴリ	使用されるライセンス・ポイント
Microsoft IIS サーバ	アプリケーション	測定値あたり 1 ポイント
Microsoft 仲介サーバ	仮想化およびクラウド	測定値あたり 1 ポイント <b>注:</b> OS インスタンス拡張ライセンスの対象となっているホストで実行されている場合、このモニタでポイントは消費されません。詳細については、42 ページ「OS インスタンス拡張ライセンス」を参照してください。
Microsoft 監視および CDR サーバ	仮想化およびクラウド	測定値あたり 1 ポイント <b>注:</b> OS インスタンス拡張ライセンスの対象となっているホストで実行されている場合、このモニタでポイントは消費されません。詳細については、42 ページ「OS インスタンス拡張ライセンス」を参照してください。
Microsoft Registrar サーバ	仮想化およびクラウド	測定値あたり 1 ポイント <b>注:</b> OS インスタンス拡張ライセンスの対象となっているホストで実行されている場合、このモニタでポイントは消費されません。詳細については、42 ページ「OS インスタンス拡張ライセンス」を参照してください。
Microsoft SQL Server	データベース	測定値あたり 1 ポイント
Microsoft Windows ダイアルアップ	ネットワーク	モニタあたり 1 ポイント
Microsoft Windows イベント・ログ	サーバ	モニタあたり 1 ポイント <b>注:</b> OS インスタンス拡張ライセンスの対象となっているホストで実行されている場合、このモニタでポイントは消費されません。詳細については、42 ページ「OS インスタンス拡張ライセンス」を参照してください。
Microsoft Windows Media Player	Media	測定値あたり 1 ポイント
Microsoft Windows Media Server	Media	測定値あたり 1 ポイント

モニタ	モニタのカテゴリ	使用されるライセンス・ポイント
Microsoft Windows パフォーマンス・カウンタ	サーバ	モニタあたり 1 ポイント <b>注：</b> 次の場合、このモニタでポイントは消費されません。 ▶ OS インスタンス拡張ライセンスの対象となっているホストで実行されている場合。詳細については、42 ページ「OS インスタンス拡張ライセンス」を参照してください。 ▶ SiteScope が HP Operations Manager に接続されている場合。
Microsoft Windows リソース	サーバ	オブジェクト・インスタンスあたり 1 ポイント <b>注：</b> OS インスタンス拡張ライセンスの対象となっているホストで実行されている場合、このモニタでポイントは消費されません。詳細については、42 ページ「OS インスタンス拡張ライセンス」を参照してください。
Microsoft Windows サービス・ステート	サーバ	モニタあたり 1 ポイント <b>注：</b> OS インスタンス拡張ライセンスの対象となっているホストで実行されている場合、このモニタでポイントは消費されません。詳細については、42 ページ「OS インスタンス拡張ライセンス」を参照してください。
ネットワーク帯域幅	ネットワーク	測定値あたり 1 ポイント
ニュース	アプリケーション	モニタあたり 1 ポイント
Oracle 10g アプリケーション・サーバ	アプリケーション	測定値あたり 1 ポイント
Oracle 9i アプリケーション・サーバ	アプリケーション	測定値あたり 1 ポイント (最大 : 7) 7)
Oracle データベース	データベース	測定値あたり 1 ポイント

モニタ	モニタのカテゴリ	使用されるライセンス・ポイント
Ping	ネットワーク	モニタあたり 1 ポイント <b>注:</b> OS インスタンス拡張ライセンスの対象となっているホストで実行されている場合、このモニタでポイントは消費されません。詳細については、42 ページ「OS インスタンス拡張ライセンス」を参照してください。
ポート	ネットワーク	モニタあたり 1 ポイント <b>注:</b> OS インスタンス拡張ライセンスの対象となっているホストで実行されている場合、このモニタでポイントは消費されません。詳細については、42 ページ「OS インスタンス拡張ライセンス」を参照してください。
Radius	アプリケーション	測定値あたり 1 ポイント
Real Media Player	Media	測定値あたり 1 ポイント
Real Media Server	Media	測定値あたり 1 ポイント
SAP CCMS	アプリケーション	測定値あたり 1 ポイント
SAP CCMS 警告	アプリケーション	測定値あたり 1 ポイント
SAP Java Web アプリケーション・サーバ	アプリケーション	測定値あたり 1 ポイント
SAP パフォーマンス	アプリケーション	測定値あたり 1 ポイント
SAP ワーク・プロセス	アプリケーション	測定値あたり 1 ポイント
スクリプト	汎用	モニタあたり 1 ポイント、最大 4 パターン一致測定値。これ以上は、追加パターン一致測定値あたり 1 ポイント。例： #OfMatchValueMetrics-3。

モニタ	モニタのカテゴリ	使用されるライセンス・ポイント
サービス	サーバ	モニタあたり 1 ポイント <b>注</b> : OS インスタンス拡張ライセンスの対象となっているホストで実行されている場合、このモニタでポイントは消費されません。詳細については、42 ページ「OS インスタンス拡張ライセンス」を参照してください。
Siebel アプリケーション・サーバ	アプリケーション	測定値あたり 1 ポイント
Siebel ログ	アプリケーション	モニタあたり 1 ポイント
Siebel Web サーバ	アプリケーション	測定値あたり 1 ポイント
SNMP	ネットワーク	モニタあたり 1 ポイント
MIB による SNMP	ネットワーク	測定値あたり 1 ポイント
SNMP トラップ	ネットワーク	モニタあたり 1 ポイント
Solaris ゾーン	仮想化およびクラウド	監視対象のゾーン（グローバルまたはグローバル以外）または物理サーバごとに 1 ポイント。 <b>注</b> : OS インスタンス拡張ライセンスの対象となっているホストで実行されている場合、このモニタでポイントは消費されません。詳細については、42 ページ「OS インスタンス拡張ライセンス」を参照してください。
SunONE Web サーバ	アプリケーション	測定値あたり 1 ポイント
Sybase	データベース	測定値あたり 1 ポイント
システム・ログ	汎用	モニタあたり 1 ポイント
Tuxedo	アプリケーション	測定値あたり 1 ポイント
UDDI サーバ	アプリケーション	モニタあたり 1 ポイント

モニタ	モニタのカテゴリ	使用されるライセンス・ポイント
UNIX リソース	サーバ	<p>選択したオブジェクト・インスタンスあたり 1 ポイント</p> <p><b>注:</b> OS インスタンス拡張ライセンスの対象となっているホストで実行されている場合、このモニタでポイントは消費されません。詳細については、42 ページ「OS インスタンス拡張ライセンス」を参照してください。</p>
URL	Web トランザクション	モニタあたり 1 ポイント
URL 内容	Web トランザクション	モニタあたり 1 ポイント
URL リスト	Web トランザクション	URL あたり 1 ポイント
URL シーケンス	Web トランザクション	URL あたり 1 ポイント (ステップ)
VMware データストア	仮想化およびクラウド	データストアあたり 1 ポイント
VMware ホスト CPU / メモリ / ネットワーク / 状態 / ストレージ	仮想化およびクラウド	<p>監視対象の VM または物理サーバごとに 1 ポイント。</p> <p><b>注:</b> VMware Host モニタは OS インスタンス拡張ライセンスでサポートされていますが、このライセンスは ESX ホストと監視されるすべての VM をカバーしていません。1 つの ESX ホストまたは VM に適用できます (各 ESX ホストまたは VM をカバーするには別個の OS ライセンスが必要)。OS ライセンスによってカバーされる各ホストまたは VM によってポイントは使用されません。</p> <p>詳細については、42 ページ「OS インスタンス拡張ライセンス」を参照してください。</p>

モニタ	モニタのカテゴリ	使用されるライセンス・ポイント
VMware パフォーマンス	仮想化およびクラウド	監視対象の VM または物理サーバごとに 1 ポイント。 <b>注：</b> OS インスタンス拡張ライセンスの対象となっているホストで実行されている場合、このモニタでポイントは消費されません。詳細については、42 ページ「OS インスタンス拡張ライセンス」を参照してください。
Web スクリプト	Web トランザクション	モニタが実行するトランザクションあたり 4 ポイント。トランザクションには、URL を必要な数だけ含めることができます。モニタには、トランザクションごとに 12 までの測定値を含めることができます。 <b>注：</b> Web Script モニタは、モニタによって実行されるスクリプトに複数のトランザクションがある場合、4 ポイントを超えるポイントを使用できます。
Web サーバ	サーバ	モニタあたり 1 ポイント
Web サービス	汎用	モニタあたり 1 ポイント
WebLogic アプリケーション・サーバ	アプリケーション	測定値あたり 1 ポイント
WebSphere アプリケーション・サーバ	アプリケーション	測定値あたり 1 ポイント
WebSphere MQ の状態	アプリケーション	インスタンスあたり 1 ポイント
WebSphere パフォーマンス・サブレット	アプリケーション	測定値あたり 1 ポイント
XML 測定値	汎用	測定値あたり 1 ポイント

**注：**システム可用性管理 (SAM) で SiteScope を使用して監視されるテクノロジー統合 (EMS) モニタには、SiteScope ライセンスは不要で、SiteScope ライセンス・ポイントも消費しません。代わりに、EMS ポイントを使用します。これは、ライセンス管理のシステム可用性管理レポートおよび管理ライセンスにあるシステム可用性管理ポイントとともにカウントされます。ライセンス管理の詳細については、HP BSM 文書ライブラリで『プラットフォーム管理』の「ライセンス」セクションを参照してください。

### ソリューション・テンプレートに使用されるライセンス・ポイント

ソリューション・テンプレートは、拡張と標準の両方のモニタ・タイプを含む、最適化されたモニタ・テンプレートです。テンプレートとテンプレート固有のモニタ・タイプにアクセスするには、拡張ライセンスが必要です。拡張ライセンスを購入すると、特定のソリューション・テンプレート向けの『Best Practices』のドキュメントも入手できます。

ライセンス・ポイントの使用は、ソリューション・テンプレートのコストに基づいています。これはテンプレートによってデプロイされたモニタが消費するポイント数が基になります（消費するポイントはモニタごとに異なる）。

次の表に、HP テスト環境で構成されたソリューション・テンプレートのライセンス・ポイントのコストを示します。ライセンス・ポイントの消費は環境ごとに異なり、また監視対象の環境の規模や選択したカウンタ数によっても異なります。

ソリューション・テンプレート	一般的なライセンス・ポイントの使用
Active Directory (グローバル・カタログあり)	34
Active Directory (グローバル・カタログなし)	33
AIX ホスト	13
ASP.NET	20
ASP.NET アプリケーション	1



ソリューション・テンプレート	一般的なライセンス・ポイントの使用
HP Quality Center Application Server for UNIX	11
HP Quality Center Application Server for Windows	11
HP Quality Center 10.0 License Status	12
HP Quality Center 9.2 License Status	6
HP QuickTest Professional License Server	3
HP Service Manager for UNIX	48
HP Service Manager for Windows	12
JBoss Application Server 4.x	3
Linux ホスト	13
Microsoft Exchange 2000	40
Microsoft Exchange 2003	49
Microsoft Exchange 2007	83
Microsoft Exchange 2010	83
Microsoft Exchange 5.5	39
Microsoft IIS 6	98
Microsoft IIS 7.x	79
Microsoft Lync Server 2010	各 Lync Server ロールの 1 インスタンスに 106 ポイント (ロールが同一の異なるコンピュータでサブテンプレートを使用している場合、追加のポイントが使用されます)。
Microsoft SharePoint 2010	74
Microsoft SQL Server	18
Microsoft SQL Server 2008 R2	43
Microsoft Windows Host	13

ソリューション・テンプレート	一般的なライセンス・ポイントの使用
.NET CLR データ	1
Oracle データベース 9i および 10g	202
SAP NetWeaver アプリケーション・サーバ	13
SAP R/3 アプリケーション・サーバ	13
UNIX の Siebel アプリケーション・サーバ 6.x ~ 7.x	93
Windows の Siebel アプリケーション・サーバ 6.x ~ 7.x	91
UNIX の Siebel アプリケーション・サーバ 8.x	98
Windows の Siebel アプリケーション・サーバ	101
UNIX の Siebel ゲートウェイ・サーバ	6
Windows の Siebel ゲートウェイ・サーバ	6
UNIX の Siebel Web サーバ	19
Windows の Siebel Web サーバ	19
Solaris Host	13
VMware データストア	(VMware データストアの総数 + 仮想ディスクの総数) * 2。 <b>例</b> : データストア 100, VM ディスク 1000 の vCenter : $(100+1000)*2 = 2200$ ポイント
VMware Host	(ホストの合計数 + VM の合計数) × 5 (ソリューション・テンプレートのモニタ数)。 <b>例</b> : 100 ホストおよび 1600 仮想マシンの vCenter : $(1600+100)*5 = 8500$ ポイント
WebLogic 6.x, 7.x, 8.x アプリケーション・サーバ	51

ソリューション・テンプレート	一般的なライセンス・ポイントの使用
WebLogic 9.x ~ 10.x アプリケーション・サーバ	63
WebSphere 5.x アプリケーション・サーバ	20
WebSphere 6.x アプリケーション・サーバ	24

## ライセンス・ポイント数の見積もり

購入するライセンス・ポイントの数は、予定している SiteScope のデプロイの方法と、監視するシステムやサービスのレベルによって異なります。次に、必要なライセンス・ポイント数の見積もりに関するガイドラインを示します。

本項の内容

- ▶ 59 ページ「サーバの状態の監視」
- ▶ 60 ページ「Web プロセスとコンテンツの監視」
- ▶ 60 ページ「アプリケーション・パフォーマンスの監視」
- ▶ 61 ページ「ネットワークの監視」
- ▶ 62 ページ「モニタ・ポイントの購入」

### サーバの状態の監視

サーバの状態の監視に必要なポイント数は、主に監視するサーバ・マシンの数によって決まります。監視対象の各サーバで、次の各項目について 1 つのポイントが必要です。

- ▶ CPU の監視
- ▶ 個々のハード・ディスクまたは主要なディスク・パーティション
- ▶ メモリ
- ▶ 個々の主要なサーバ・プロセスまたはサービス
- ▶ 個々の主要なファイル、ログ、またはディレクトリ

## Web プロセスとコンテンツの監視

Web プロセスとコンテンツの監視に必要なポイント数は、監視する Web ベースのプロセスとページの数によって決まります。Web ベースのプロセスには、Web ページのシーケンスが含まれます。たとえば、セキュア・サーバにログインして勘定残高を確認し、ログアウトするとします。多くの場合、URL のシーケンスには異なる宛先ページを持つ同じパスが含まれます。オンライン・サービスの場合は、バックエンド・データベースをチェックして、Web インタフェースを使用して修正したデータが正しく更新されているかどうか確認することも必要です。また、ファイルのダウンロードや、自動化された電子メール・メッセージの送受信が含まれるプロセスも考えられます。

- ▶ 個々の Web ベースの URL シーケンスを監視する場合は、監視する Web ベースのプロセスごとに 1 つのシーケンス・モニタ・インスタンスと、そのシーケンス内の URL またはステップごとに 1 つのポイントが必要です。
- ▶ ほかのインターネット・ページまたはプロセスを監視する場合は、監視するファイルのダウンロード、電子メールによる確認、または個々の Web ページ・コンテンツごとに 1 つのポイントが必要です。

## アプリケーション・パフォーマンスの監視

アプリケーション・パフォーマンスの監視は、ネットワーク・ベースのサービスの可用性を確保し、パフォーマンスの問題を検出するための重要な手段です。また、アプリケーションやシステムの多くは複雑であるため、必要なモニタ・ポイント数を見積もるのは非常に困難です。SiteScope の柔軟なライセンス・モデルでは、監視容量をニーズに合わせて簡単に変更できます。

アプリケーション・パフォーマンスの監視に必要なポイント数は、次の要因によって決まります。

- ▶ デプロイされるアプリケーションの数
- ▶ アプリケーションの種類
- ▶ 監視するパフォーマンス測定値の数

一部のアプリケーション（一部の Web サーバなど）のパフォーマンス測定値は、1 つのモニタ・インスタンスと、10 測定値ポイント未満の測定値数によって使用可能となる場合があります。たとえば、Apache Web サーバは、1 つの URL について、アクセス総数、サーバ使用可能時間、および 1 秒あたりの要求数を含むパフォーマンス測定値を提供します。ほかのアプリケーションやシステムでは、複数のサーバ・アドレス、モジュール、および複数のモニタ・インスタンスを必要とする測定値が含まれる場合があります。アプリケーションによっては、監視するデータベース・アプリケーションと統合されている場合もあります。

次に、データのアクセス方法に応じて、アプリケーションの監視に必要なポイントを見積もるためのガイドラインを示します。

- ▶ アプリケーションごとに 1 つのアプリケーション・モニタ・インスタンスと、監視するパフォーマンス測定値ごとに 1 つのポイント
- ▶ アプリケーション・ステータス URL ごとに 1 つのモニタ・インスタンスと、監視するパフォーマンス測定値ごとに 1 つのポイント

## ネットワークの監視

ネットワークの監視には、ユーザがネットワークにアクセスして使用するために必要な、ネットワーク・サービスの接続と可用性の両方の確認が含まれます。これには、DNS、DHCP、LDAP、および RADIUS などのサービスの監視が含まれます。ネットワークのハードウェアや設定によっては、SiteScope の SNMP モニタ・タイプを使用して SNMP でネットワーク・インフラストラクチャにクエリすることで、ネットワークのパフォーマンス統計情報にアクセスできる場合もあります。

次に、ネットワークの監視に必要なポイント数の見積もりに関するガイドラインを示します。

- ▶ 主要なネットワークの接続先ごとに 1 つのポイント
- ▶ 主要なネットワーク・サービス（DNS や LDAP など）ごとに 1 つのポイント
- ▶ SNMP 経由で監視する測定値ごとに 1 つのポイント

## モニタ・ポイントの購入

SiteScope のモニタ・ポイントは、モニタを柔軟にデプロイできるように、50, 100, 500, および 2,000 ポイントのブロック単位で販売されています。たとえば、100 ポイントのブロックを購入すれば、次のように多くの監視オプションを設定できます。

- ▶ それぞれ 5 つのパフォーマンス測定値を監視する 10 のアプリケーション・モニタ (5 x 10 = 50 ポイント)
- ▶ それぞれ 10 のトランザクション・ステップを横断する 2 つの URL シーケンス・モニタの組み合わせ (10 x 2 = 20 ポイント)
- ▶ 1 ポイントのネットワーク・サービス・モニタまたはサーバ・モニタを 30 (1 x 30 = 30 ポイント)

同じ 100 ポイントのブロックを使用して、次のように設定することもできます。

- ▶ それぞれ 1 つの測定値を監視する 10 のアプリケーション・モニタ (1 x 10 = 10 ポイント)
- ▶ 5 つのステップを持つ URL シーケンス・モニタ (5 ポイント)
- ▶ 85 のネットワーク・サービス・モニタまたはサーバ・モニタ (85 ポイント)

SiteScope のインストールには、無料の評価ライセンスが含まれています。評価期間以後も SiteScope を使用するには、お使いの SiteScope 用の一般ライセンス・キーを要求してアクティブにする必要があります。モニタ・ポイントの購入の詳細については、HP License Key Delivery Service サイト (<https://webware.hp.com/licensinghome/hppwelcome.asp>) (英語サイト) にアクセスします。

## SiteScope ライセンスの追加

SiteScope をインストールした後は、いつでもライセンスを追加できます。新規または追加のモニタ・ライセンスを取得する方法については、HP License Key Delivery Service サイト (<https://webware.hp.com/licensinghome/hppwelcome.asp>) (英語サイト) にアクセスします。

HP からライセンス・ファイルを受け取ったら、SiteScope ユーザ・インタフェース経由で SiteScope にライセンス・キーをインポートします。

**SiteScope にライセンスを追加するには、次の手順で行います。**

- 1** Web ブラウザから、変更する SiteScope インスタンスを開きます。SiteScope サービスまたはプロセスが稼動している必要があります。
- 2** [プリファレンス] > [一般プリファレンス] を選択して、[ライセンス] 表示枠を展開します。
- 3** [ライセンス ファイル] ボックスに SiteScope ライセンス・ファイルのパスを入力するか、[選択] ボタンをクリックしてライセンス・ファイルを選択します。
- 4** [インポート] をクリックします。ライセンスのインポートが正常に完了したら、インポートされたライセンスに関する情報がライセンス表に表示されます。この情報には、ライセンス・タイプ、説明、有効期限、ライセンスで許可されたモニタ・ポイントの総計が含まれます。





# 第 II 部

---

**SiteScope** をインストールする前に



# 6

---

## SiteScope をインストールする前に

### 本章の内容

- ▶ インストールの概要 (68 ページ)
- ▶ システム要件 (69 ページ)
- ▶ 認定されている構成 (77 ページ)
- ▶ SiteScope キャパシティに関する制限事項 (78 ページ)
- ▶ SiteScope サポート・マトリックス (78 ページ)

## インストールの概要

監視環境のデプロイメントおよび管理を容易にするために、SiteScope をインストールする前に考慮する計画の手順とアクションがいくつかあります。

SiteScope アプリケーションのデプロイメントに関する手順の概要を次に示します。

### 1 SiteScope アプリケーションをインストールして実行するサーバを準備します。

---

**注：**

- ▶ 1 台のマシンに複数の SiteScope をインストールしないでください。
  - ▶ SiteScope Failover Manager を使用して、SiteScope サーバの故障時にバックアップ監視を有効にする場合は、共有リソースに SiteScope をインストールする必要があります。詳細については、  
**<SiteScope のルート・ディレクトリ>%sisdocs%\pdfs\FailoverManager.pdf**  
にある『HP SiteScope Failover Manager Guide』を参照してください。
- 

### 2 SiteScope のインストール実行ファイルを入手します。

### 3 アプリケーションをインストールするディレクトリを作成し、必要に応じてユーザ権限を設定します。

---

**注：** SiteScope 11.20 をインストールするためには、新しいディレクトリを作成する必要があります。以前のバージョンの SiteScope に使用しているディレクトリにバージョン 11.20 をインストールしないでください。

---

- 4 SiteScope のインストール実行ファイルを実行するか、または準備した場所にアプリケーションをインストールするようスクリプトに指定してインストール・スクリプトを実行します。

詳細については、105 ページ「SiteScope のインストール」を参照してください。

- 5 必要に応じて、サーバを再起動します (Windows へのインストールの場合のみ)。
- 6 互換性のある Web ブラウザを使用して SiteScope に接続し、SiteScope が実行されることを確認します。

詳細については、259 ページ「SiteScope を使った作業の開始」を参照してください。

- 7 インストール後の手順を実行し、SiteScope を実運用で使用する準備を整えます。

詳細については、255 ページ「インストール後の管理」を参照してください。

## システム要件

本項では、サポートされているオペレーティング・システム別に、SiteScope を実行するための最小システム要件と推奨事項を示します。

---

### 注：

- ▶ インストールを始める前に、SiteScope リリース・ノート・ファイルに記載されている内容をよく読み、インストール・プロセスに関する最終確認事項や制限事項がないか確認します。
- ▶ 標準のインストール・プログラム (**HPSiteScope\_11.20\_setup.exe** または **HPSiteScope\_11.20\_setup.bin**) を使用する場合、SiteScope は、32 ビットのオペレーティング・システムでは 32 ビットのアプリケーション、64 ビットのオペレーティング・システムでは 64 ビットのアプリケーションとして自動的にインストールされます。**HPSiteScope32on64\_11.20\_setup.exe** は、64 ビットの Windows オペレーティング・システムで SiteScope を 32 ビットのアプリケーションとしてインストールします。
- ▶ Solaris プラットフォームでの SiteScope の実行は現在は廃止されています。次のリリースでは Solaris インストーラを含める予定はありません。
- ▶ 異なる環境に SiteScope をインストールする場合のトラブルシューティングや制限事項については、148 ページ「トラブルシューティングおよび制限事項」を参照してください。

## 第 6 章 • SiteScope をインストールする前に

本項の内容

- ▶ 71 ページ「Windows の場合のサーバ・システム要件」
- ▶ 72 ページ「Solaris の場合のサーバ・システム要件」
- ▶ 73 ページ「Linux のサーバ・システム要件」
- ▶ 74 ページ「VMware のサーバ・システム要件」
- ▶ 76 ページ「64 ビット SiteScope でサポートされないモニタ」
- ▶ 76 ページ「クライアントのシステム要件」

**Windows の場合のサーバ・システム要件**

Windows プラットフォームに SiteScope をインストールする場合は、次のシステム要件を使用します。

コンピュータおよびプロセッサ	800 MHz 以上
オペレーティング・システム	<p>32 ビットのサポート :</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>▶ Microsoft Windows 2003 SP1, SP2 Standard/Enterprise Edition</li> <li>▶ Microsoft Windows Server 2003 R2 SP1, SP2 Enterprise Edition</li> <li>▶ Microsoft Windows Server 2008 SP2 Standard/Enterprise Edition</li> <li>▶ Windows Server 2008 R2 でホストされた Microsoft Windows Server 2008 SP2 Standard/Enterprise Edition Hyper-V ゲスト (32 または 64 ビット)</li> </ul> <p>64 ビットのサポート :</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>▶ Microsoft Windows Server 2003 SP2 Standard/Enterprise Edition</li> <li>▶ Microsoft Windows Server 2003 R2 SP2 Enterprise Edition</li> <li>▶ Microsoft Windows Server 2008 SP2 Enterprise Edition</li> <li>▶ Microsoft Windows Server 2008 R2Standard/Enterprise Edition without Hyper-V</li> <li>▶ Microsoft Windows Server 2008 R2Standard/Enterprise Edition with Hyper-V enabled</li> <li>▶ Windows Server 2008 R2 Standard/Enterprise Edition でホストされた Microsoft Windows Server 2008 R2 Hyper-V ゲスト (64 ビット)</li> <li>▶ Windows Server 2008 R2 Standard/Enterprise Edition でホストされた Microsoft Windows Server 2008 SP2 Standard/Enterprise Edition Hyper-V ゲスト (64 ビット)</li> </ul>
メモリ	1 GB 以上 (2 GB 以上を推奨)
ハード・ディスクの空き容量	2 GB 以上 (10 GB 以上を推奨)

## Solaris の場合のサーバ・システム要件

---

**注 :** Solaris プラットフォームでの SiteScope の実行は現在は廃止されています。次のリリースでは Solaris インストーラを含める予定はありません。

---

Solaris プラットフォームに SiteScope をインストールする場合は、次のシステム要件を使用します。

コンピュータおよびプロセッサ	Sun 400 MHz UltraSparc II プロセッサ以上
オペレーティング・システム	<ul style="list-style-type: none"><li>▶ Solaris 9 (32 ビット, 最新の推奨パッチ・クラスタを使用)</li><li>▶ Solaris 10 (32 または 64 ビット, 最新の推奨パッチ・クラスタを使用)</li></ul>
メモリ	1 GB 以上 (2 GB 以上を推奨)
ハード・ディスクの空き容量	2 GB 以上 (10 GB 以上を推奨)

---

**注 :** Solaris プラットフォームで SiteScope 管理レポートを表示するには, SiteScope サーバ上で X Window システムが稼動している必要があります。

---



## Linux のサーバ・システム要件

Linux プラットフォームに SiteScope をインストールする場合は、次のシステム要件を使用します。

コンピュータおよびプロセッサ	800 MHz 以上
オペレーティング・システム	<ul style="list-style-type: none"> <li>▶ Oracle Enterprise Linux 6.0, 6.1 (64 ビット) 注: 環境を手動で設定してから SiteScope をインストールする必要があります。詳細については、108 ページ「Oracle Enterprise Linux 環境への SiteScope のインストール」を参照してください。</li> <li>▶ Red Hat ES/AS Linux 5.2, 5.4 (32 ビット)</li> <li>▶ Red Hat ES/AS Linux 5.5, 5.6 (32 または 64 ビット)</li> <li>▶ Red Hat ES/AS Linux 6.0, 6.2 (64 ビット)</li> <li>▶ CentOS 6.2 (64 ビット)</li> </ul> <p>注:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>▶ Red Hat ES/AS Linux 6.0 サーバを手動で設定してから HP Operations Agent をインストールする必要があります。詳細については、111 ページ「HP Operations Agent が必要とする依存関係のインストール」を参照してください。</li> <li>▶ CentOS 6.2 サーバを手動で設定してから SiteScope をインストールする必要があります。詳細については、108 ページ「CentOS 6.2 環境への SiteScope のインストール」を参照してください。</li> <li>▶ NPTL (Native POSIX Threading Library) 搭載の Red Hat Linux 9 は、サポートされません。</li> <li>▶ Red Hat Linux 環境で実行する SiteScope サーバまたはリモート・サーバ上での CPU およびメモリの使用率を監視できるようにするには、<b>sysstat</b> パッケージを SiteScope サーバおよび監視中のすべてのリモート・サーバにインストールする必要があります (同梱されていません)。</li> <li>▶ SiteScope が Red Hat Linux にインストールされると、SiteScope サーバの状況モニタには SwapIns/sec, SwapOuts/sec, PageIns/sec および PageOuts/sec カウンタに対する <b>sar -W</b> コマンドと <b>sar -B</b> コマンドの有効な出力が必要です。これらのコマンドが動作しない場合は、表示されず、これらのカウンタが <b>n/a</b> として表示されます。これらのコマンドを実行できるようにするには、1 日に一度実行するコマンド <code>"/usr/local/lib/sa/sadc -"</code> を追加して <b>crontab</b> を編集します。</li> </ul>

メモリ	1 GB 以上 (2 GB 以上を推奨)
ハード・ディスクの空き容量	2 GB 以上 (10 GB 以上を推奨)

## VMware のサーバ・システム要件

SiteScope では、下記のテスト済みの設定に従って、次の VMware 環境がサポートされています。

サポート対象環境とテスト済み環境	<ul style="list-style-type: none"> <li>▶ VMware ESX 3.0</li> <li>▶ VMware VirtualCenter 3.0</li> <li>▶ vSphere 4.1, 5.0</li> </ul>
サポート対象環境のみ	<ul style="list-style-type: none"> <li>▶ VMware VirtualCenter 2.x</li> <li>▶ VMware ESX 2.5 via VirtualCenter 2.x</li> <li>▶ VMware ESX 3.x, 4.0, 4.1</li> <li>▶ VMware ESX 3.x via VirtualCenter 3.x</li> <li>▶ VMware ESXi 4.0, 4.1</li> <li>▶ VMware vCenter Server 4.0, 5.0</li> </ul>
テスト済みの VMware 設定	<ul style="list-style-type: none"> <li>▶ 1 つの物理サーバ上の 4 VMware 仮想マシン (VM)</li> <li>▶ 各 VM に 2 つの CPU (2.39 GHz), 8 GB のメモリ, および 40 GB のディスク空き領域</li> <li>▶ ストレージには HP EVA 8400/22G を使用</li> <li>▶ 物理サーバ: ESX ホストは, 8x Intel Xeon x5570 CPU, 72 GB RAM を搭載し, VMware ESX 4.0 U1 をインストールした HP BL490c G6</li> <li>▶ 同じ物理サーバにほかの VM は存在していない</li> <li>▶ VMTools をインストール済み</li> </ul> <p><b>注:</b> SiteScope VM に割り当てられたリソースは他の VM と共有しないでください。</p>
テスト済みの SiteScope 設定	<ul style="list-style-type: none"> <li>▶ 750 台のリモート・サーバ</li> <li>▶ 9000 個のモニタ</li> <li>▶ 900 実行モニタ数 / 分</li> </ul>

VMware 環境に SiteScope をインストールする場合は、上記の最低限のシステム要件を使用します (これらはテスト済み環境に基づく推奨事項であり、サポートに関する制限事項ではありません)。

コンピュータおよびプロセッサ	4 Intel Xeon 物理プロセッサ (各 2 GHz)
オペレーティング・システム	Microsoft Windows 2003 Standard/Enterprise SP1 (物理サーバでサポートされているすべてのオペレーティング・システムは、VM サーバでもサポートされます)。
メモリ (RAM)	4 GB
ハード・ディスクの空き容量	20 GB (ハード・ディスク速度: 7200 rpm)
ネットワーク・カード	1 物理ギガビット・ネットワーク・インタフェース・カード
その他のソフトウェア	VMTools がインストールされている必要があります。

**注:** モニタの容量と速度は、以下を始めとするさまざまな要因に大きく影響される可能性があります。SiteScope サーバ・ハードウェア、オペレーティング・システム、パッチ、サードパーティ製のソフトウェア、ネットワーク設定およびアーキテクチャ、監視対象サーバの位置に対する SiteScope サーバの位置、モニタの種類と種類ごとの分布、監視頻度、監視実行時間、Business Service Management 統合、およびデータベースのログ記録。提示されている最高値はすべての環境に当てはまるものではありません。

## 64 ビット SiteScope でサポートされないモニタ

次のモニタは 64 ビット・バージョンの SiteScope でサポートされていないため、SiteScope の 32 ビット・バージョンが必要です。64 ビット環境で SiteScope の 32 ビット・バージョンをインストールするには、

**HPSiteScope32on64\_11.20\_setup.exe** インストール・ファイルを使用します。

- ▶ Microsoft Exchange 2003 のメールボックス・モニタ
- ▶ Microsoft Exchange 2003 のパブリック・フォルダ・モニタ
- ▶ Microsoft Windows Media Player モニタ
- ▶ Real Media Player モニタ
- ▶ Sybase モニタ
- ▶ Tuxedo モニタ
- ▶ Web スクリプト・モニタ

## クライアントのシステム要件

SiteScope クライアントは、次のシステムでサポートされています。

- ▶ Microsoft Internet Explorer 7, 8, または 9.0 を使用するすべての Microsoft Windows オペレーティング・システム (Microsoft Windows 7 を含む)
- ▶ Mozilla Firefox ESR 10 (Windows 環境で稼動するクライアントでのみ認定)
- ▶ Java プラグイン (アプレット表示用) : JRE 6 以降 (JRE 6 update 31 を推奨)

## 認定されている構成

次の構成は、HP Business Service Management と統合された SiteScope のインストールのための高負荷環境で認定されています。

オペレーティング・システム	Microsoft Windows Server 2003 SP2 Enterprise Edition (32 ビット)	Microsoft Windows Server 2003 SP2 Enterprise Edition (64 ビット)
システム・タイプ	x86 ベースの PC	ACPI マルチプロセッサ x64 ベースの PC
CPU	Intel Xeon 5160 物理プロセッサ × 4 (各 3 GHz)	Intel Xeon 5160 物理プロセッサ × 4 (各 3 GHz)
合計物理メモリ (RAM)	16 GB	16 GB
Java ヒープ・メモリ	1024 MB	2048 - 3072 MB
モニタの総数	16,000	24,000
リモート・サーバの総数	1,250	2,500
1 分間のモニタ実行数	2,000	3,500

---

### 注：

- ▶ ログ内で負の値の Topaz ID エラーは無視すべきです。
  - ▶ 高負荷下で作業している場合は、初めて HP Business Service Management に接続する前にすべてのモニタを中断してください。
-

## SiteScope キャパシティに関する制限事項

SiteScope が BSM と統合されている場合に、負荷が非常に高い処理を実行すると、SiteScope に問題が発生することがあります。次のガイドラインに従ってください。

- ▶ 3,000 を超えるモニタにテンプレート変更適用ウィザードを一度に実行しないでください。
- ▶ モニタ・デプロイメント・ウィザードを実行して、3,000 を超えるモニタを一度に作成しないでください。
- ▶ 1 回の操作で 3,000 を超えるモニタのコピーおよび貼り付けを実行しないでください。
- ▶ グローバル検索と置換を実行して、2,500 を超えるモニタの Business Service Management 統合プロパティを一度に変更しないでください。

SiteScope には、システムの動作を予測し、SiteScope のキャパシティ・プランニングを実行するためのツールが備わっています。詳細については、178 ページ「SiteScope キャパシティ・カリキュレータ」を参照してください。

## SiteScope サポート・マトリックス

本リリースでサポートされる HP Business Service Management, HP Operations Manager, HP Operations Agent, HP Performance Center, LoadRunner および HP Network Node Manager i バージョンについては、SiteScope のリリース・ノートの「HP SiteScope サポート・マトリックス」の項を参照してください (SiteScope で [ヘルプ] > [新機能] を選択)。

# 7

---

## アップグレード SiteScope

### 本章の内容

- ▶ アップグレードを実行する前に (80 ページ)
- ▶ 既存の SiteScope インストールのアップグレード (81 ページ)
- ▶ SiteScope ディレクトリの命名 (82 ページ)
- ▶ SiteScope 構成データのバックアップ (82 ページ)
- ▶ 設定データのインポート (83 ページ)
- ▶ カスタム・プロパティの検索 / フィルタ・タグへの変換 (84 ページ)
- ▶ SiteScope 8.9 の SiteScope 9.5.4 へのアップグレード (86 ページ)
- ▶ SiteScope 9.5.4 の SiteScope 10.14 へのアップグレード (87 ページ)
- ▶ SiteScope 10.14 の SiteScope 11.20 へのアップグレード (91 ページ)
- ▶ SiteScope 11.x の SiteScope 11.20 へのアップグレード (95 ページ)
- ▶ トラブルシューティングおよび制限事項 (99 ページ)

## アップグレードを実行する前に

この章では、お使いのシステムと運用への支障の可能性を最小限に抑えながら、既存の HP SiteScope インストールを HP SiteScope 11.20 にアップグレードする方法について説明します。

SiteScope は、下位互換性を持つように設計されています。このため、監視環境への影響を最小限に抑えながら、新しいバージョンの SiteScope をインストールし、既存の SiteScope からモニタ設定を転送できます。

SiteScope をアップグレードする前に、次の点を考慮してください。

- ▶ アップグレードを始める前に、SiteScope リリース・ノート・ファイルに記載されている内容をよく読み、アップグレード・プロセスに関する最終確認事項や制限事項がないか確認します。リリース・ノートに記載されている手順を守らないと、予期しないデータの消失やアップグレード・プロセスの失敗につながる可能性があります。
- ▶ 設定ツールを使用して SiteScope 設定データをエクスポートすれば、SiteScope 10.x 以降のバージョンを SiteScope 11.20 に直接アップグレードできます。SiteScope 10.00 よりも前のバージョンの場合は、まず SiteScope 10.x にアップグレードしなければなりません。SiteScope 9.00 よりも前のバージョンの場合は、まず SiteScope 9.x にアップグレードしなければなりません。アップグレード方法の詳細については、次を参照してください。
  - ▶ 86 ページ「SiteScope 8.9 の SiteScope 9.5.4 へのアップグレード」
  - ▶ 87 ページ「SiteScope 9.5.4 の SiteScope 10.14 へのアップグレード」
  - ▶ 91 ページ「SiteScope 10.14 の SiteScope 11.20 へのアップグレード」
  - ▶ 95 ページ「SiteScope 11.x の SiteScope 11.20 へのアップグレード」
- ▶ SiteScope の設定に 100 以上の大規模なサブグループを含むグループがある場合、SiteScope 11.20 へのアップグレード中にメモリ・オーバフローが発生する可能性があります。アップグレードする前に、サブグループの問題のあるレベルを分割して、サブグループ数を 100 以下にしてください。



- ▶ SiteScope バージョン 10.10 以降, HTTP は, UNIX リモート・サーバへの接続方法としてサポートされなくなりました。アップグレード中に SiteScope が HTTP メソッドを使用する UNIX リモート・サーバを見つけると, アップグレード・プロセスが失敗します。これを回避するには, アップグレード対象のバージョンのメソッドのプロパティをほかの有効なオプション (ssh, telnet, または rlogin) のいずれかに変更します。影響を受ける UNIX リモート・サーバのリストについては,  
**< SiteScope ルート・ディレクトリ > %logs%upgrade.log** ファイルを参照してください。
- ▶ SiteScope モニタにカスタム・プロパティ設定を追加するカスタム・プロパティ・メカニズムは, SiteScope バージョン 10.00 では削除され, フィルタリング機能が [タグ] メカニズムに変わりました。10.00 以前の SiteScope バージョンからアップグレードする場合は, カスタム・プロパティを検索 / フィルタ・タグに変換できます。詳細については, 84 ページ「カスタム・プロパティの検索 / フィルタ・タグへの変換」を参照してください。

## 既存の SiteScope インストールのアップグレード

アップグレードでは, 次の手順を実行することを推奨します。

- 1 現在のバージョンの SiteScope の設定ツールを使用して SiteScope モニタ設定データのバックアップ・コピーを作成します。**

詳細については, 82 ページ「SiteScope 構成データのバックアップ」を参照してください。

- 2 現在のバージョンの SiteScope をアンインストールします。**

- 3 クリーンなディレクトリ構造に新しいバージョンの SiteScope をインストールします。**

ディレクトリの命名方法の詳細については, 82 ページ「SiteScope ディレクトリの命名」を参照してください。

SiteScope のインストールの詳細については, 105 ページ「SiteScope のインストール」を参照してください。

- 4 インストール後, 手順 1 からモニタ設定データをインポートします。**

詳細については, 83 ページ「設定データのインポート」を参照してください。

- 5 以前のバージョンの SiteScope からデータをインポートした後、バッチ・ファイルまたは start コマンド・シェル・スクリプトを実行して SiteScope を起動します。

モニタが実行するまでの時間が 15 分を超える場合に、アップグレード後 SiteScope 自身が再起動されないようにするには、< SiteScope ルート・ディレクトリ>¥bin ディレクトリから go.bat ファイルを実行するか (Windows プラットフォーム)、<インストール・パス> /SiteScope/start 構文を使用して start コマンド・シェル・スクリプトを実行し (Solaris または Linux プラットフォーム)、SiteScope を起動します。

- 6 SiteScope Failover を使用する場合は、対応する SiteScope Failover バージョンでフェイルオーバー・サーバをアップグレードしてください。

プライマリ・サーバをアップグレードした後、対応する SiteScope Failover バージョンでフェイルオーバー・サーバをアップグレードして、フェイルオーバー・サーバをアップグレードしたプライマリ・サーバに接続します。

## SiteScope ディレクトリの命名

SiteScope のインストール用に作成する新しいディレクトリの名前は **SiteScope** にし、別のディレクトリ・パスに置く必要があります。たとえば、元の SiteScope ディレクトリが C:¥SiteScope であれば、新しいディレクトリは C:¥11.20¥SiteScope にします。

## SiteScope 構成データのバックアップ

SiteScope のアップグレードに備える最も簡単な方法は、設定ツールを使用して現在の SiteScope のインストール・ディレクトリとそのサブディレクトリをすべてバックアップすることです。設定ツールを使用して、後で SiteScope にインポートするために、現在の SiteScope からテンプレート、ログ、モニタ設定ファイル、サーバ証明書、スクリプトなどの SiteScope データをエクスポートできます。ユーザ・データが .zip ファイルにエクスポートされます。

または、SiteScope インストールを手動でバックアップできます。詳細については、267 ページ「SiteScope を起動できない場合に SiteScope インストールのバックアップとリカバリを行う」を参照してください。

---

**注** : SiteScope データのエクスポート時に **<SiteScope> \htdocs** ディレクトリはコピーされないため、このディレクトリのバックアップを作成して、アップグレード後に **SiteScope 11.20** ディレクトリにコピーして、古いレポートを参照できるようにする必要があります。

---

設定ツールを使用して **SiteScope** データをエクスポートする方法の詳細については、155 ページ「**SiteScope 設定ツールの使用**」を参照してください。

または、インストール・プロセスの一部として **SiteScope** で **SiteScope** データをエクスポートできます。詳細については、105 ページ「**SiteScope のインストール**」を参照してください。

## 設定データのインポート

**SiteScope** のアップグレード後、設定ツールを使用して、以前のバージョンの **SiteScope** からモニタ設定データをコピーできます。詳細については、155 ページ「**SiteScope 設定ツールの使用**」を参照してください。

または、手動でバックアップを作成した場合は、新しいインストール・ディレクトリからバックアップしたすべてのフォルダとファイルを削除して、バックアップしたフォルダとファイルをインストール・ディレクトリにコピーする必要があります。詳細については、267 ページ「**SiteScope を起動できない場合に SiteScope インストールのバックアップとリカバリを行う**」を参照してください。

## カスタム・プロパティの検索 / フィルタ・タグへの変換

SiteScope ではカスタム・プロパティはサポートされなくなりました。10.00 以前の SiteScope バージョンからアップグレードする場合は、マッピング・ファイルを作成して、カスタム・プロパティ変換ツールを実行することにより、カスタム・プロパティを検索 / フィルタ・タグに変換できます。

**カスタム・プロパティを検索 / フィルタ・タグに変換するには、次の手順で行います。**

- 1 テキスト・エディタで、マッピング・ファイルを作成します。これには、次の形式でカスタム・プロパティを検索 / フィルタ・タグにマッピングします。

```
<カスタム・プロパティ名> , <カスタム・プロパティ値> - <タグ名> , <タグの値>
```

説明：

<カスタム・プロパティ名>は **master.config** ファイルで設定されているカスタム・プロパティです。

<カスタム・プロパティ値>は、前述の特定のカスタム・プロパティ名の値です。

<タグ名>は、モニタに追加するタグの名前です（このタグは検索 / フィルタ・タグとしてシステム内に存在している必要がある）。

<タグの値>は、カスタム・プロパティの値に対応する前述のタグの値です。

次に例を示します。

```
_custPropSeverity,MINOR->Severity,MINOR  
_custPropServiceGroup,Sales->Notification Group,Sales
```

---

**注：**マッピング・ファイルでは、< > - >文字間にスペースを含むことはできません。

---

- 2 ファイルを保存します。
- 3 コマンド・ラインを開き、次の情報を入力します。
  - ▶ **Windows 環境の場合 :**
    - < SiteScope ルート・ディレクトリ >
    - ¥tools¥CustomPropertyToTagTool.bat <マッピング・ファイルへのパス >
    - < SiteScope persistency フォルダへのパス >
  - ▶ **Linux または Solaris 環境の場合 :**
    - < SiteScope ルート・ディレクトリ > ¥tools¥CustomPropertyToTagTool.sh
    - <マッピング・ファイルへのパス > < SiteScope persistency フォルダへのパス >

(Windows プラットフォームでは) たとえば、次のように入力します。

```
C:¥SiteScope¥tools¥CustomPropertyToTagTool.bat C:¥Desktop¥configFile2.txt  
C:¥SiteScope¥persistency
```

## SiteScope 8.9 の SiteScope 9.5.4 へのアップグレード

SiteScope 8.9 から SiteScope 9.5.4 へのアップグレードでは、次の手順を実行することを推奨します。

**アップグレードを実行するには、次の手順で行います。**

- 1 **master.config** ファイルおよび `persistence` の「`_version`」値を確認します。それは、`8.9 17:20:04 2006-11-05 build 257` の形式になります。バージョンが「`_version=750`」のようにになっている場合、バージョンは修正されています。
- 2 全モニタを一時停止します。
- 3 SiteScope 8.9 または全 SiteScope フォルダから設定のバックアップを作成します。
- 4 SiteScope 9.5.0 をインストールします。
- 5 SiteScope 9.5.4 をインストールします。
- 6 設定をインポートします。
- 7 SiteScope を起動する前に、**< SiteScope のルート > %groups%master.config** を開いて、次の手順を実行します。
  - ▶ `_disableHostDNSResolution=true` プロパティを追加します。
  - ▶ `_sendRemoteServerDisplayNameToBAC` プロパティがファイルにないことを確認します。
- 8 SiteScope 9.5.4 を起動して待ちます。
- 9 SiteScope を再起動します。ユーザ・インタフェースを開いて BAC 統合を探します。
- 10 **topazIDs.bat** とともに設定をエクスポートします。ターゲットが SiteScope 8.9 と同じで `no -1` が表示されていることを確認します。

## SiteScope 9.5.4 の SiteScope 10.14 へのアップグレード

SiteScope 9.5.4 から SiteScope 10.14 へのアップグレードでは、次の手順を実行することを推奨します。

**アップグレードを実行するには、次の手順で行います。**

- 1 SiteScope サービスを停止します。
- 2 SiteScope 9.5.4 フォルダをバックアップします（それをシステムの一時フォルダにコピーします）。
- 3 SiteScope 9.5.4 から SiteScope 設定をエクスポートします。
  - ▶ SiteScope 設定ツールを起動して（[スタート] > [プログラム] > [HP SiteScope] > [設定ツール]）、[次へ] をクリックします。
  - ▶ [設定のインポート] / [設定のエクスポート] を選択し、[次へ] をクリックします。
  - ▶ [設定のエクスポート] を選択し、[次へ] をクリックします。
  - ▶ SiteScope 9.5.4 インストール・ディレクトリ、およびエクスポート・データを保存するターゲット・ディレクトリの場所を選択します。バックアップ・ファイル名を入力します。[ログ ファイルを含める] をオフにします。
  - ▶ エクスポートが完了した後、[次へ] / [完了] をクリックします。
  - ▶ さまざまなモニタで使用されるサードパーティ製のライブラリと jar (SAP クライアント, JDBC ドライバなど) を一時ディレクトリにコピーします。これらのファイルはエクスポートに含まれていないからです。
- 4 SiteScope 9.5.4 をアンインストールします（[スタート] > [設定] > [コントロール パネル] > [プログラムの追加と削除]）。
  - ▶ アンインストール・ウィンドウを起動します。[次へ] を 2 回クリックしてアンインストールが開始します。
  - ▶ アンインストールが完了した後、[完了] をクリックします。
  - ▶ SiteScope ディレクトリ下の残りのファイルをすべて削除します。
  - ▶ [SiteScope] サービスがアンインストールで Windows サービスから削除されたことを確認します。SiteScope サービスがまだ表示されている場合は、コマンド・プロンプトから `sc delete SiteScope` を実行して手動で削除できます。
- 5 サーバを再起動します。

**6** SiteScope 10.10 をインストールします。

- ▶ SiteScope 10.10 インストーラを実行して [次へ] をクリックします。
- ▶ 使用許諾契約に同意して [次へ] をクリックします。
- ▶ SiteScope 10.10 用のディレクトリを選択して [次へ] をクリックします (9.5.4 で使用されていたのと同じディレクトリを使用することをお勧めします)。
- ▶ [HP SiteScope] インストールタイプを選択し, [次へ] をクリックします。
- ▶ 標準設定のポートのままにして管理者の電子メールを入力し, [次へ] をクリックします。
- ▶ SiteScope 10.10 ライセンスを入力し, [次へ] をクリックします。
- ▶ [サマリ] 画面が表示されます。[次へ] をクリックします。
- ▶ インストールが完了した後, [次へ] をクリックします (インストーラ・ウィンドウが閉じます)。

**7** SiteScope サービスを停止します。

**8** 監視アカウント(ローカルまたはドメイン管理者)で実行するように SiteScope サービスを設定します。9.5.4 でどのように設定されていたかにより, この手順は省略できます。

**9** SiteScope 10.14 パッチをインストールします。

- ▶ SiteScope 10.14 インストーラを実行し, [次へ] をクリックします。
- ▶ SiteScope サービスが実行されていないことを確認して [次へ] をクリックします。
- ▶ 使用許諾契約画面で [次へ] をクリックします。
- ▶ [サマリ] 画面で [次へ] をクリックして 10.14 のインストールが開始します。
- ▶ インストールが完了した後, [次へ] をクリックして [完了] をクリックします。

**10** SiteScope 10.14 の Hotfix をインストールします。

**11** SiteScope ヘデータをインポートします。

- ▶ 設定ツールを実行して ([スタート] > [プログラム] > [HP SiteScope] > [設定ツール]), [次へ] をクリックします。
- ▶ [設定のインポート] / [設定のエクスポート] を選択し, [次へ] をクリックします。
- ▶ [設定のインポート] を選択し, [次へ] をクリックします。



- ▶ 9.5.4 の設定から以前エクスポートされた **.zip** ファイルを選択します。ターゲット・ディレクトリが正しいことを確認して **[次へ]** をクリックします。
- ▶ インポートが完了した後, **[完了]** をクリックします (設定ツールが閉じます)。
- ▶ (手順 3 で) 一時フォルダにコピーされたサードパーティ製のライブラリと jar を復元します。

## 12 master.config ファイルのデータの減少および他のパラメータを変更します。

- ▶ **< SiteScope ルート > %groups%master.config** を開きます。
- ▶ 行を変更します。  
`_topazEnforceUseDataReduction=`  
から次へ変更  
`_topazEnforceUseDataReduction=false`  
**注:** パラメータが存在しない場合は, **false** に設定されるように追加します。
- ▶ 行を変更します。  
`_suspendMonitors=`  
から次へ変更  
`_suspendMonitors=true`
- ▶ 次のパラメータを追加します。  
`_disableHostDNSResolution=true`  
**注:** すべてのパラメータはアルファベット順になるように追加する必要があります。
- ▶ **master.config** ファイルを保存して閉じます。

## 13 SiteScope をお客様の設定で起動します (最初の実行中にアップグレードされます)

- ▶ SiteScope 10.14 を起動します。
- ▶ 以前の設定にあったすべてのエンティティが新しい SiteScope に保存されていることを確認します。

- ▶ BAC 統合を確認します。

SiteScope が起動して新しいユーザ・インタフェースでログインするのを待ちます。SiteScope で **[プリファレンス] > [統合プリファレンス]** を確認して、BAC 統合設定 (BAC サーバなど) が見られることを確認します。統合情報がこの画面で見られない場合は、データが破損している可能性が高いです。BAC 統合ログを参照することで、これを確認できます (**< SiteScope のルート > %logs%\bac\_integration% bac\_integration.log**)。次のようなエントリを多く見るでしょう。

エラー - エラー : TopologyReporterSender Topology Reporter はレポートに失敗しました、メイン・ループの例外 : 元のホストを空白にできません

- ▶ ユーザ・インタフェースで設定が見られ、SiteScope が正常に動作していることを確認して、SiteScope を停止します。

#### 14 master.config ファイルを開いて、次の手順を実行します。

- ▶ 次のように変更して、モニタの一時停止を解除します。

```
_suspendMonitors=true
```

から次へ変更

```
_suspendMonitors=
```

- ▶ 次のように変更して、データの減少を有効にします。

```
_topazEnforceUseDataReduction= false
```

から次へ変更

```
_topazEnforceUseDataReduction=
```

- ▶ **master.config** ファイルを保存して閉じ、SiteScope を再起動します。ユーザ・インタフェースからログインして、正常に動作していることを確認します。

## SiteScope 10.14 の SiteScope 11.20 へのアップグレード

SiteScope 10.14 から SiteScope 11.20 へのアップグレードでは、次の手順を実行することを推奨します。

**アップグレードを実行するには、次の手順で行います。**

- 1 SiteScope サービスを停止します。
- 2 SiteScope 10.14 フォルダをバックアップします（それをシステムの一時フォルダにコピーします）。
- 3 SiteScope 10.14 から SiteScope 設定をエクスポートします。
  - ▶ SiteScope 設定ツールを起動して（[スタート] > [プログラム] > [HP SiteScope] > [設定ツール]）、[次へ] をクリックします。
  - ▶ [設定のインポート] / [設定のエクスポート] を選択し、[次へ] をクリックします。
  - ▶ [設定のエクスポート] を選択し、[次へ] をクリックします。
  - ▶ SiteScope 10.14 インストール・ディレクトリ、およびエクスポート・データを保存するターゲット・ディレクトリの場所を選択します。バックアップ・ファイル名を入力します。[ログ ファイルを含める] をオフにします。
  - ▶ エクスポートが完了した後、[次へ] / [完了] をクリックします。
  - ▶ さまざまなモニタで使用されるサードパーティ製のライブラリと jar (SAP クライアント, JDBC ドライバなど) を一時ディレクトリにコピーします。これらのファイルはエクスポートに含まれていないからです。
- 4 SiteScope 10.14 をアンインストールします（[スタート] > [設定] > [コントロール パネル] > [プログラムの追加と削除]）。
  - ▶ アンインストール・ウィンドウを起動します。[次へ] を 2 回クリックしてアンインストールが開始します。
  - ▶ アンインストールが完了した後、[完了] をクリックします。
  - ▶ SiteScope ディレクトリ下の残りのファイルをすべて削除します。
  - ▶ [SiteScope] サービスがアンインストールで Windows サービスから削除されたことを確認します。SiteScope サービスがまだ表示されている場合は、コマンド・プロンプトから `sc delete SiteScope` を実行して手動で削除できます。
- 5 サーバを再起動します。

**6** SiteScope 11.20 をインストールします。

- ▶ SiteScope 11.20 インストーラを実行して **[次へ]** をクリックします。
- ▶ 使用許諾契約に同意して **[次へ]** をクリックします。
- ▶ SiteScope 11.20 用のディレクトリを選択して **[次へ]** をクリックします (10.14 で使用されていたのと同じディレクトリを使用することをお勧めします)。
- ▶ **[HP SiteScope]** インストールタイプを選択し、**[次へ]** をクリックします。
- ▶ 標準設定のポートのままにして管理者の電子メールを入力し、**[次へ]** をクリックします。標準設定のポートが使用されている場合は、代わりに 8088 を入力します。
- ▶ ライセンスを空白のままにして **[次へ]** をクリックします。
- ▶ **[サマリ]** 画面で **[次へ]** をクリックします。
- ▶ インストールが完了した後、**[次へ]** をクリックします (インストーラ・ウィンドウが閉じます)。
- ▶ (手順 3 で) 一時フォルダにコピーされたサードパーティ製のライブラリと jar を復元します。

**7** SiteScope サービスを停止します。

**8** SiteScope 11.20 の必要な Hotfix をインストールします。

**9** 監視アカウントで実行するように SiteScope サービスを設定します。モジュール SiteScope では、この手順は省略できます。

**10** SiteScope ヘデータをインポートします。

- ▶ 設定ツールを実行して (**[スタート]** > **[プログラム]** > **[HP SiteScope]** > **[設定ツール]**)、**[次へ]** をクリックします。
- ▶ **[設定のインポート]** / **[設定のエクスポート]** を選択し、**[次へ]** をクリックします。
- ▶ **[設定のインポート]** を選択し、**[次へ]** をクリックします。
- ▶ **[次へ]** をクリックします。
- ▶ 10.14 のインストールから以前エクスポートされた .zip ファイルを選択し、ターゲット・ディレクトリが正しいことを確認して、**[次へ]** をクリックします。
- ▶ インポートが完了した後、**[完了]** をクリックします (設定ツールが閉じます)。

**注:** 設定ツールを再度実行し、**[サイズ変更]** オプションを選択します。

**11 master.config** ファイルのデータの減少および他のパラメータを変更します。

▶ < SiteScope ルート > %groups%master.config ファイルを開きます。

▶ 行を変更します。

`_topazEnforceUseDataReduction=`

から次へ変更

`_topazEnforceUseDataReduction=false`

**注**：パラメータが存在しない場合は、**false** に設定されるように追加します。

▶ 行を変更します。

`_suspendMonitors=`

から次へ変更

`_suspendMonitors=true`

▶ 次のパラメータを追加します。

`_disableHostDNSResolution=true`

**注**：すべてのパラメータはアルファベット順になるように追加する必要があります。

▶ **master.config** ファイルを保存して閉じます。

**12 BSM** への SiteScope 警告を有効にします。

▶ < SiteScope のルート > %bin フォルダに移動して、**PersistencyViewer.bat** ファイルを実行します。

▶ [永続パスの選択] ボタンをクリックして、永続フォルダで [開く] ボタンをクリックします。

▶ タイプ・ドロップダウンでのフィルタで、クラス `com.mercury.sitescope.platform.configmanager.MasterConfig` を検索します。

これは、**master.config** ファイルで表示されるプロパティと同じリストを表示できます。`_topazAlertEnabled` を探して、それが **=1** に設定されていることを確認します。ない場合は、プロパティを追加します。

▶ 変更した後、コミット・ボタンをクリックします。

**13** SiteScope サービスを開始します。SiteScope は設定をアップグレードして、自動的に再起動します。ユーザ・インタフェースを使用してログインして、**[プリファレンス]>[統合設定]**で BAC への統合が正しいことを確認します。

**14** SiteScope を停止します。

**15** **master.config** ファイルを開いて、次の手順を実行します。

- ▶ 次のように変更して、モニタの一時停止を解除します。

```
_suspendMonitors=true
```

から次へ変更

```
_suspendMonitors=
```

- ▶ 次のように変更して、データの減少を有効にします。

```
_topazEnforceUseDataReduction= false
```

から次へ変更

```
_topazEnforceUseDataReduction=
```

- ▶ パラメータを変更します。

```
_disableHostDNSResolution=false
```

- ▶ **master.config** ファイルを保存して閉じ、SiteScope を起動します。

**16** **[プリファレンス] > [一般プリファレンス] > [メインパネル]**で、**[設定ファイルを有効にする]**が選択されていることを確認します。

**注:** この設定が変更された場合、変更は SiteScope が再起動されるまで有効になりません。

## SiteScope 11.x の SiteScope 11.20 へのアップグレード

SiteScope 11.x から SiteScope 11.20 へのアップグレードでは、次の手順を実行することを推奨します。

**アップグレードを実行するには、次の手順で行います。**

- 1 SiteScope サービスを停止します。
- 2 SiteScope 11.x フォルダをバックアップします(それをシステムの一時フォルダにコピーします)。
- 3 SiteScope 11.x から SiteScope 設定をエクスポートします。
  - ▶ SiteScope 設定ツールを起動して（[スタート] > [プログラム] > [HP SiteScope] > [設定ツール]）、[次へ] をクリックします。
  - ▶ [設定のインポート] / [設定のエクスポート] を選択し、[次へ] をクリックします。
  - ▶ [設定のエクスポート] を選択し、[次へ] をクリックします。
  - ▶ SiteScope 11.x インストール・ディレクトリ、およびエクスポート・データを保存するターゲット・ディレクトリの場所を選択します。バックアップ・ファイル名を入力します。[ログ ファイルを含める] をオフにします。
  - ▶ エクスポートが完了した後、[次へ] / [完了] をクリックします。
  - ▶ さまざまなモニタで使用されるサードパーティ製のライブラリと jar (SAP クライアント, JDBC ドライバなど) を一時ディレクトリにコピーします。これらのファイルはエクスポートに含まれていないからです。
- 4 SiteScope 11.x をアンインストールします（[スタート] > [設定] > [コントロール パネル] > [プログラムの追加と削除]）。
  - ▶ アンインストール・ウィンドウを起動します。[次へ] を 2 回クリックしてアンインストールが開始します。
  - ▶ アンインストールが完了した後、[完了] をクリックします。
  - ▶ SiteScope ディレクトリ下の残りのファイルをすべて削除します。
  - ▶ [SiteScope] サービスがアンインストールで Windows サービスから削除されたことを確認します。SiteScope サービスがまだ表示されている場合は、コマンド・プロンプトから `sc delete SiteScope` を実行して手動で削除できます。
- 5 サーバを再起動します。

**6** SiteScope 11.20 をインストールします。

- ▶ SiteScope 11.20 インストーラを実行して [次へ] をクリックします。
- ▶ 使用許諾契約に同意して [次へ] をクリックします。
- ▶ SiteScope 11.20 用のディレクトリを選択して [次へ] をクリックします (11.x で使用されていたのと同じディレクトリを使用することをお勧めします)。
- ▶ [HP SiteScope] インストール タイプを選択し、[次へ] をクリックします。
- ▶ 標準設定のポートのままにして管理者の電子メールを入力し、[次へ] をクリックします。標準設定のポートが使用されている場合は、代わりに 8088 を入力します。
- ▶ ライセンスを空白のままにして [次へ] をクリックします。
- ▶ [サマリ] 画面で [次へ] をクリックします。
- ▶ インストールが完了した後、[次へ] をクリックします (インストーラ・ウィンドウが閉じます)。
- ▶ (手順 3 で) 一時フォルダにコピーされたサードパーティ製のライブラリと jar を復元します。

**7** SiteScope サービスを停止します。

**8** SiteScope 11.20 の必要な Hotfix をインストールします。

**9** 監視アカウントで実行するように SiteScope サービスを設定します。モジュール SiteScope では、この手順は省略できます。

**10** SiteScope へデータをインポートします。

- ▶ 設定ツールを実行して ([スタート] > [プログラム] > [HP SiteScope] > [設定ツール]), [次へ] をクリックします。
- ▶ [設定のインポート] / [設定のエクスポート] を選択し、[次へ] をクリックします。
- ▶ [設定のインポート] を選択し、[次へ] をクリックします。
- ▶ [次へ] をクリックします。
- ▶ 11.x のインストールから以前エクスポートされた zip ファイルを選択し、ターゲット・ディレクトリが正しいことを確認して、[次へ] をクリックします。
- ▶ インポートが完了した後、[完了] をクリックします (設定ツールが閉じます)。

**注:** 設定ツールを再度実行し、[サイズ変更] オプションを選択します。



**11 master.config** ファイルのデータの減少および他のパラメータを変更します。

▶ **< SiteScope ルート > %groups%master.config** ファイルを開きます。

▶ 行を変更します。

**\_topazEnforceUseDataReduction=**

から次へ変更

**\_topazEnforceUseDataReduction=false**

**注**：パラメータが存在しない場合は、**false** に設定されるように追加します。

▶ 行を変更します。

**\_suspendMonitors=**

から次へ変更

**\_suspendMonitors=true**

▶ 次のパラメータを追加します。

**\_disableHostDNSResolution=true**

**注**：すべてのパラメータはアルファベット順になるように追加する必要があります。

▶ **master.config** ファイルを保存して閉じます。

**12 BSM** への SiteScope 警告を有効にします。

▶ **< SiteScope のルート > %bin** フォルダに移動して、**PersistencyViewer.bat** ファイルを実行します。

▶ **[永続パスの選択]** ボタンをクリックして、永続フォルダで **[開く]** ボタンをクリックします。

▶ タイプ・ドロップダウンでのフィルタで、クラス **com.mercury.sitescope.platform.configmanager.MasterConfig** を検索します。

これは、**master.config** ファイルで表示されるプロパティと同じリストを表示できます。**\_topazAlertEnabled** を探して、それが **=1** に設定されていることを確認します。ない場合は、プロパティを追加します。

▶ 変更した後、**コミット** ボタンをクリックします。

**13 SiteScope** サービスを開始します。SiteScope は設定をアップグレードして、自動的に再起動します。ユーザ・インタフェースを使用してログインして、**[プリファレンス]** > **[統合設定]** で BSM への統合が正しいことを確認します。

**14** SiteScope を停止します。

**15** `master.config` ファイルを開いて、次の手順を実行します。

- ▶ 次のように変更して、モニタの一時停止を解除します。

```
_suspendMonitors=true
```

から次へ変更

```
_suspendMonitors=
```

- ▶ 次のように変更して、データの減少を有効にします。

```
_topazEnforceUseDataReduction= false
```

から次へ変更

```
_topazEnforceUseDataReduction=
```

- ▶ パラメータを変更します。

```
_disableHostDNSResolution=false
```

- ▶ `master.config` ファイルを保存して閉じ、SiteScope を起動します。

**16** [プリファレンス] > [一般プリファレンス] > [メイン パネル] で、[設定ファイルを有効にする] が選択されていることを確認します。

**注：**この設定が変更された場合、変更は SiteScope が再起動されるまで有効になりません。

## トラブルシューティングおよび制限事項

このセクションでは、SiteScope のアップグレードのトラブルシューティングおよび制限事項について説明します。

本項の内容

- ▶ 100 ページ「アップグレード後の最初の SiteScope の起動に時間がかかる場合がある」
- ▶ 100 ページ「SiteScope がカスタマ ID を取得できない」
- ▶ 101 ページ「アクション・タイプに応じて標準設定警告アクションの名前が指定される」
- ▶ 101 ページ「Business Service Management/ServiceCenter または Service Manager の統合」
- ▶ 102 ページ「Business Service Management との統合を行う場合の SiteScope のほかのサーバへの移動」
- ▶ 102 ページ「SiteScope のアップグレードの失敗」

---

**注：** SiteScope のアップグレードに関するその他の情報については、HP ソフトウェア・セルフ・ソルブ技術情報

(<http://support.openview.hp.com/selfsolve/documents>) も参照してください。技術情報を利用するには、HP パスポート ID を使ってログオンする必要があります。

---

## アップグレード後の最初の SiteScope の起動に時間がかかる場合がある

**問題：**アップグレード後の最初の SiteScope の再起動に時間がかかる（15 分を超える）場合があります。15 分後モニタが実行を開始しなかった場合、SiteScope は自分自身で再起動します。

### 考えられる解決策：

- ▶ モニタが実行するまでの時間が 15 分を超える場合に、SiteScope 自身が再起動されないようにするには、**< SiteScope ルート・ディレクトリ > %bin** ディレクトリから **go.bat** ファイルを実行するか（Windows プラットフォーム）、**< インストール・パス > /SiteScope/start** 構文を使用して **start** コマンド・シェル・スクリプトを実行して（Solaris または Linux プラットフォーム）、SiteScope を起動します。
- ▶ 稼働していないターゲット環境のすべてのモニタを無効にします。この操作により、システムが応答するまでの待機時間が短縮されます。

## SiteScope がカスタマ ID を取得できない

**問題：**9.0 より前のバージョンの SiteScope で、SiteScope が Business Service Management に接続されると、SiteScope は **< SiteScope ルート・ディレクトリ > %cache%persistent%TopazConfiguration** にある設定ファイルにカスタマ ID を保存します。

9.x へのアップグレード後に初めて SiteScope をロードすると、SiteScope は設定ファイルを読み取り、HP Business Service Management の接続の詳細を取得しようと試みます。このファイルが壊れている場合（エクスポート設定が正しく実行されないことにより発生する場合など）、SiteScope はカスタマ ID を取得することができないため、HP Business Service Management から取得しようとします。再起動中に Business Service Management がダウンすると、SiteScope はカスタマ ID を取得できず、SiteScope が再度自分自身を再起動します。

**考えられる解決策：**アップグレード後に SiteScope を起動する前に、SiteScope に接続されているすべての HP Business Service Management が稼働していることを確認します。

## アクション・タイプに応じて標準設定警告アクションの名前が指定される

**問題:** 警告アクションは SiteScope 9.0 で追加されました。SiteScope 9.0 以降のバージョンにアップグレードすると、標準設定警告アクションが作成され、アクション・タイプに応じて名前が指定されます（電子メール、ページャ、SMS など）。これは、標準設定の名前をアクションを保持する警告と連結する必要がある場合、問題となる可能性があります。

**考えられる解決策:** アップグレードの前に、<SiteScope ルート・ディレクトリ>¥groups にある master.config ファイルを開き、連結で使用する区切り文字を含むように \_AlertActionCompositeNameDelimiter キーを変更します。

## Business Service Management/ServiceCenter または Service Manager の統合

この項目は、10.00 より前のバージョンから SiteScope をアップグレードして、Business Service Management/ServiceCenter または Service Manager 統合を操作する場合に該当します。SiteScope で ServiceCenter モニタを設定するときに、peregrine.jar というファイルが作成され、SiteScope マシン上の WEB-INF¥lib ディレクトリに配置されます。このファイルは、SiteScope のアップグレード中に削除されるため、アップグレード前にバックアップする必要があります。アップグレードが完了したら、バックアップした peregrine.jar ファイルを WEB-INF¥lib ディレクトリに戻します。

## Business Service Management との統合を行う場合の SiteScope のほかのサーバへの移動

このプロセスは、SiteScope サーバを（新しいホスト名と IP アドレスを持つ）新しいハードウェアに移動して、Business Service Management 統合を行う場合に該当します。次の手順で行って統合への影響を最小限に抑えます。

- 1 現在の SiteScope インストールのバックアップを作成します。詳細については、82 ページ「SiteScope 構成データのバックアップ」を参照してください。
- 2 新しいハードウェアに SiteScope をインストールして、SiteScope 設定データを SiteScope インストール・ディレクトリにインポートします。詳細については、83 ページ「設定データのインポート」を参照してください。
- 3 以前のハードウェアで使用したポート番号を使用して SiteScope サーバを設定します。
- 4 10.10 より前のバージョンの SiteScope を使用している場合は、Business Service Management で次の手順で行います。
  - ▶ 新しい SiteScope ページの SiteScope プロファイルで関連するフィールドを更新します。
  - ▶ HOSTS テーブルの SiteScope マシンに関する情報を更新します。

## SiteScope のアップグレードの失敗

アップグレード・プロセスが失敗した場合は、< SiteScope ルート・ディレクトリ > %logs ディレクトリにある **upgrade.log** ファイルでアップグレードが失敗した理由を確認してください。

Windows 環境への SiteScope のインストール時にアップグレード・プロセスが失敗した場合は、SiteScope は何度でも再起動の実行を試みます。

**考えられる解決策** : SiteScope のインストールを再度実行します。

# 第 III 部

---

## SiteScope のインストール





# 8

---

## SiteScope のインストール

### 本章の内容

- ▶ インストールの流れ (105 ページ)
- ▶ Solaris または Linux にインストールする場合の準備 (107 ページ)
- ▶ Oracle Enterprise Linux 環境への SiteScope のインストール (108 ページ)
- ▶ CentOS 6.2 環境への SiteScope のインストール (108 ページ)
- ▶ CentOS 6.2 で実行する HP Cloud Services インスタンスへの SiteScope のインストール (109 ページ)
- ▶ HP Operations Agent が必要とする依存関係のインストール (111 ページ)
- ▶ 64 ビット SiteScope のインストール準備 (113 ページ)
- ▶ インストール・ウィザードを使用してインストール (114 ページ)
- ▶ コンソール・モードを使用した Solaris または Linux へのインストール (139 ページ)
- ▶ トラブルシューティングおよび制限事項 (148 ページ)

### インストールの流れ

SiteScope は、自己解凍型実行ファイルおよびパッケージ・フォルダとして提供され、HP の Web サイトからダウンロードできるほか、DVD で入手することもできます。SiteScope は、1 つのサーバにインストールされ、Windows プラットフォームでは 1 つのアプリケーションとして、Solaris または Linux プラットフォーム上では 1 つのアプリケーションまたはさまざまなプロセスとして稼働します。

## 1 SiteScope 11.20 のインストール準備を行います (Solaris または Linux に SiteScope をインストールする場合のみ)。

詳細については、107 ページ「Solaris または Linux にインストールする場合の準備」を参照してください。

## 2 SiteScope 11.20 をインストールします。

- ▶ Windows へのインストールの詳細については、114 ページ「インストール・ウィザードを使用してインストール」を参照してください。
- ▶ Solaris 用の SiteScope および Linux 用の SiteScope には、次に示すインストール・オプションが用意されています。
  - ▶ 実行可能なユーザ・インタフェース (インストール・ウィザード)。詳細については、114 ページ「インストール・ウィザードを使用してインストール」を参照してください。
  - ▶ コマンド・ライン入力によるコンソール・モード・インストール・スクリプト。詳細については、139 ページ「コンソール・モードを使用した Solaris または Linux へのインストール」を参照してください。
- ▶ サイレント・インストールを使用して SiteScope をインストールすることもできます。詳細については、153 ページ「サイレント・モードでの SiteScope のインストール」を参照してください。

---

### 注：

- ▶ 既存バージョンの SiteScope がインストールされている場合は、アンインストールしてから SiteScope 11.20 をインストールする必要があります。
- ▶ 以前に設定ツールを使用して SiteScope データをエクスポートした場合は (詳細については、155 ページ「SiteScope 設定ツールの使用」を参照)、ユーザ・データの .zip ファイルをインポートできます。
- ▶ サードパーティ製の中立ウェアおよびドライバがある場合、それらは手作業でコピーまたはインストールする必要があります。

---

## 3 SiteScope に接続します。

詳細については、262 ページ「SiteScope への接続」を参照してください。

## Solaris または Linux にインストールする場合の準備

お使いの環境によっては、Solaris または Linux に SiteScope をインストールするための準備に、適切なインストール先の場所の選択、アカウント権限の設定が必要になります。

---

**注：** Solaris プラットフォームでの SiteScope の実行は現在は廃止されています。次のリリースでは Solaris インストーラを含める予定はありません。

---

**UNIX または Linux に SiteScope をインストールするための準備は、次の手順で行います。**

- 1 SiteScope アプリケーションをインストールする場所 (`/opt/HP/SiteScope`) で、SiteScope のインストールと運用を行うために十分なディスク領域が使用できることを確認します。
- 2 SiteScope アプリケーションを実行する非 root ユーザ・アカウントを作成して、`/opt/HP/SiteScope` へのアカウント権限をこのユーザに設定します。そのアカウントの標準のシェルを設定します。詳細については、26 ページ「SiteScope を実行する権限のある非 root ユーザ・アカウントの設定」を参照してください。

---

**注：**

- ▶ インストール中は Solaris および Linux のインストール・ディレクトリを変更できません。インストール完了後に変更することもお勧めしません。
  - ▶ すべてのサーバ監視機能を使用するには SiteScope に高いアカウント権限が必要ですが、root アカウントからの SiteScope の実行や、リモート・サーバへのアクセスに root アカウントを使用するような SiteScope の設定は行わないことをお勧めします。
  - ▶ サイレント・インストールを使用して SiteScope をインストールすることもできます。詳細については、153 ページ「サイレント・モードでの SiteScope のインストール」を参照してください。
-

## Oracle Enterprise Linux 環境への SiteScope のインストール

SiteScope を Oracle Enterprise Linux 6.0 または 6.1 (64 ビット) にインストールするには、事前に次の依存関係を環境にインストールする必要があります。

- ▶ glibc-2.12-1.25.el6.i686.rpm
- ▶ glibc-common-2.12-1.25.el6.i686.rpm
- ▶ nss-softokn-freebl-3.12.9-3.el6.i686.rpm
- ▶ libXau-1.0.5-1.el6.i686.rpm
- ▶ libxcb-1.5-1.el6.i686.rpm
- ▶ libX11-1.3-2.el6.i686.rpm

Oracle Enterprise Linux で提供される yum パッケージ・マネージャを使用して、次のコマンドを実行して依存関係をインストールできます。

```
yum install -y glibc glibc-common nss-softokn-freebl libXau libxcb libX11 libXext
```

これらの依存関係は、すべての Red Hat ベースのシステムの標準のリポジトリ (/etc/yum.repos.d) にあります。

## CentOS 6.2 環境への SiteScope のインストール

CentOS 6.2 (64 ビット) 環境に SiteScope をインストールする前に、次の追加ライブラリのいずれかが Linux 環境にインストールされていることを確認します (最初のオプションの使用が推奨されます)。

- ▶ 次のコマンドを実行して、glibc.i686 ライブラリをインストールします。

```
[root@centos ~]# yum install glibc.i686
```

- ▶ JRE がインストールされ、パスが正しく書き込まれていることを確認します。

```
[root@centos ~]# java -version
```

```
java version "1.6.0_22"
```

```
OpenJDK Runtime Environment (IcedTea6 1.10.6) (rhel-1.43.1.10.6.el6_2-x86_64)
```

```
OpenJDK 64-Bit Server VM (build 20.0-b11, mixed mode)
```

「コマンドが見つかりません」というエラーが表示された場合、JRE をインストールする必要があります。これを行うには、次のコマンドを使用します。

```
root@centos ~]# yum install java-1.6.0-openjdk
```

## CentOS 6.2 で実行する HP Cloud Services インスタンスへの SiteScope のインストール

SiteScope は、CentOS 6.2 オペレーティング・システムで実行する HP Cloud Services (HPCS) インスタンスでサポートされています。

### HPCS に SiteScope をインストールするためのヒント

- ▶ HP Cloud Services サーバのホスト名を確認して、ホストが解決されていることを確認してください。
  - a hostname コマンドを実行して、ホスト名を取得します。
  - b ping <ホスト名> を実行します。ping 要求が成功すると、ホストはすでに解決可能です。
  - c 失敗した場合、ifconfig を使用して IP を検索します。
  - d echo "<IP> <ホスト名>" >> /etc/hosts を実行して、ホスト名に対応する IP を含む文字列を hosts ファイルに追加します。
  - e ping <ホスト名> を再度実行して、ホストが解決されていることを確認します。
- ▶ スワップ サイズを確認します。
  - a free コマンドを実行して、スワップが作成されていることを確認します。
  - b スワップが作成されていない場合：

```
[root@centos ~]# free | grep Swap  
Swap: 0 0 0
```

次のコマンドを実行します。  
2 GB ファイルを作成します。

```
[root@centos ~]# dd if=/dev/zero of=/swapfile bs=1M count=2048
```

スワップとして初期化します。

```
[root@centos ~]# mkswap /swapfile
```

有効化します。

```
[root@centos ~]# swapon /swapfile
```

- c スワップを再度確認します。

```
[root@centos ~]# free | grep Swap
Swap: 2097144 0 2097144
```

- ▶ 追加のライブラリを 108 ページ「CentOS 6.2 環境への SiteScope のインストール」で説明されているようにインストールします。

### セキュリティ・グループ設定

IP プロトコル	開始ポート	終了ポート	タイプ	CIDR IPS
tcp	8080	8080	IP	0.0.0.0/0
tcp	22	22	IP	0.0.0.0/0
tcp	8888	8888	IP	0.0.0.0/0
icmp	-1	-1	IP	0.0.0.0/0

### HPCS への SiteScope のインストール方法

- 1 現在のディレクトリを SiteScope インストーラがある場所に変更して、SiteScope インストーラを実行します。

```
[root@centos ~]# sh ./HPSiteScope_11.20_setup.bin -i console
```

- 2 コンソール・モードを使用して、SiteScope をインストールします。詳細については、139 ページ「コンソール・モードを使用した Solaris または Linux へのインストール」を参照してください。

- 3 インストールが終了したら、SiteScope を実行します。

```
[root@centos ~]# /opt/HP/SiteScope/start
```

- 4 SiteScope サービスが起動されるまで数分待機してから、必要なプロセスが実行中であることを確認してください。

```
[root@centos ~]# ps -ef | grep SiteScope | grep -v grep | awk '{print $3}'84758477
```

最後のコマンドには、SiteScope プロセスのプロセス ID が表示されます。プロセスが 2 つあれば、SiteScope サーバは正常に起動しています。

## 注意事項および制限事項

Operations Manager 統合は現在、CentOS 6.2 サーバにインストールされた SiteScope 11.20 ではサポートされていません。

## HP Operations Agent が必要とする依存関係のインストール

HP Operations Agent を SiteScope サーバにインストールするとき、次を実行する必要があります。

- 1 HP Operations Agent をインストールするには、事前に次の依存関係を環境にインストールする必要があります。

### Red Hat ES Linux 6.0 (64 ビット) の場合 :

- ▶ Red Hat Enterprise Linux 6 x64 ノードに **compat-libstdc++-33-3.2.3-69.el6.i686.rpm** をインストールします。
- ▶ Red Hat Enterprise Linux 6 PPC ノードに **compat-libstdc++-33-3.2.3-69.el6.ppc64.rpm** をインストールします。

Red Hat Enterprise Linux で提供される yum パッケージ・マネージャを使用して、次のコマンドを実行して依存関係をインストールできます。

```
yum install compat-libstdc++-33-3.2.3-69.el6.i686.rpm または  
yum install compat-libstdc++-33-3.2.3-69.el6.ppc64.rpm
```

### SunOS の場合 :

- ▶ SunOS パッチ **119254-43** または **119255-43** をインストールします。
- ▶ システムの IP アドレスがシステムのホスト名にマップされていることを確認します。

---

**注** : HP Operations Agent のインストールおよび使用の追加要件については、HP ソフトウェア・サポート Web サイト (<http://support.openview.hp.com/selfsolve/manuals>) の『Operations Agent インストール・ガイド』を参照してください。

---

**2** HP Operations Agent をインストールした後、ログ・ファイルでインストール・ステータスを確認してください。

▶ **SiteScope ログ**。これはインストールが正常に完了したかどうかを表示するだけです。

ログ・ファイル名 : **HPSiteScope\_config\_tool.log**

ログ・ファイルの場所 :

▶ **win- %temp%** (Windows プラットフォームの場合)

▶ **/temp** または **/var/temp**

(「installOATask」の結果を検索) (UNIX/Linux プラットフォームの場合)

▶ **HP Operations Agent ログ・ファイル** :

ログ・ファイル名 : **oainstall.log**, **oapatch.log**

ログ・ファイルの場所 :

▶ **%ovdatadir%\log** (Windows プラットフォームの場合)

▶ **/var/opt/OV/log/** (UNIX/Linux プラットフォームの場合)



## 64 ビット SiteScope のインストール準備

SiteScope は 32 ビットまたは 64 ビットのアプリケーションとして実行できます。以下のシナリオでは、SiteScope は 64 ビットのアプリケーションとしてインストールおよび実行されます。

- ▶ 64 ビットの Windows システムでの **HPSiteScope\_11.20\_setup.exe** の実行
- ▶ 64 ビットの Linux または Solaris システムでの **HPSiteScope\_11.20\_setup.bin** の実行

---

**注 : HPSiteScope32on64\_11.20\_setup.exe** インストーラは、64 ビットの Windows システムで SiteScope を 32 ビットのアプリケーションとしてインストールします。このバージョンは、64 ビットの SiteScope の制限を解決するために使用できます。

---

SiteScope のインストールの前に、次の点に注意してください。

- ▶ 一部のモニタは SiteScope の 64 ビット・バージョンでの動作をサポートしないので、これらのモニタのいずれかで作業する予定の場合は、SiteScope の 32 ビット・バージョンをインストールしてください。
- ▶ 32 ビットのプロセスでは 4 GB の仮想メモリのアクセスに制限されますが、64 ビットのプロセスでは、8 TB の仮想メモリのアドレス領域にアクセス可能で、SiteScope の監視容量を増やすことができます。
- ▶ SiteScope 64 ビット・バージョンは、SiteScope 32 ビット・バージョンの最大 3 倍のメモリを消費します。したがって、SiteScope 64 ビット・バージョンを使用している場合、155 ページ「SiteScope 設定ツールの使用」で説明するように、サーバの JVM ヒープ・サイズを手動で増やす必要があります。

## インストール・ウィザードを使用してインストール

インストール・ウィザードを使用してサポート対象の Windows, Solaris, または Linux 環境に SiteScope をインストールするには、次の手順を実行します。サポート対象環境のリストについては、69 ページ「システム要件」を参照してください。

X11 ライブラリがすでにサーバにインストールされている場合は、インストール・ウィザードが自動的に実行されます。これらのライブラリがインストールされていない場合は、次のいずれかを実行してください。

- ▶ X11 サーバがインストールされていないマシンに、グラフィック・モードで SiteScope をインストールします。詳細については、138 ページ「X11 サーバがインストールされていないマシンへのインストール・ウィザードを使用した SiteScope のインストール」を参照してください。
- ▶ コンソール・モードで、Solaris または Linux プラットフォームに SiteScope をインストールします。詳細については、139 ページ「コンソール・モードを使用した Solaris または Linux へのインストール」を参照してください。

---

**注：**サイレント・インストールを使用して SiteScope をインストールすることもできます。詳細については、153 ページ「サイレント・モードでの SiteScope のインストール」を参照してください。

---

**SiteScope をインストールするには、次の手順で行います。**

- 1 SiteScope のインストール・プログラムを入手します。SiteScope のインストール・プログラム・ファイルには、次のいずれかの場所からアクセスできます。
  - ▶ SiteScope リリース・メディア
  - ▶ HP ソフトウェア・サポート・オンライン Web サイト (<http://support.openview.hp.com>) : [ソフトウェア サポート オンライン] > [ダウンロード] > [ソフトウェア パッチ] に移動し、製品として [Application Performance Management] を選択します。各バージョンで、サブ・プロダクトの SiteScope を確認します。

---

**注：**SiteScope の最新バージョンが表示されます。

---

- ▶ HP BSM プラットフォーム管理のダウンロード・ページ

**2 OS の指示に従って SiteScope のインストールを実行します。****Windows の場合 :**

- a**
- 使用する実行ファイルを決定します。

**▶ HPSiteScope\_11.20\_setup.exe**

このインストーラは、インストールする SiteScope のバージョンを自動的に決定します。32 ビットのオペレーティング・システムでは、SiteScope は 32 ビットのアプリケーションとしてインストールされます。64 ビットのオペレーティング・システムでは、SiteScope は 64 ビットのアプリケーションとしてインストールされます。

**▶ HPSiteScope32on64\_11.20\_setup.exe**

このインストーラは、64 ビットの Windows オペレーティング・システム専用です。SiteScope は 32 ビットのアプリケーションとしてインストールされます。このインストールにより、64 ビットの Windows オペレーティング・システムではサポートされていないモニタがサポートされます。76 ページ「64 ビット SiteScope でサポートされないモニタ」を参照してください。

- b**
- OS およびアーキテクチャに基づき、実行ファイルの名前の前に SiteScope のインストール元の場所を入力します。

次に例を示します。

```
< DVD のルート > %Windows_Setup%SiteScope%  
HPSiteScope_11.20_setup.exe
```

または

```
< DVD のルート > %Windows_Setup%SiteScope%  
HPSiteScope32on64_11.20_setup.exe
```

**Linux または Solaris の場合 :**

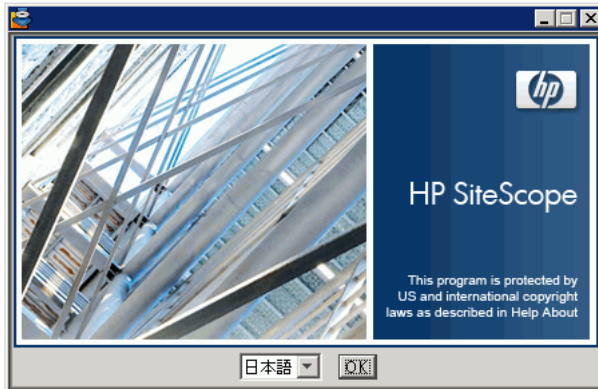
- a**
- ルート・ユーザとしてサーバにログインします。
- 
- b**
- ./HPSiteScope\_11.20\_setup.bin を入力して、インストーラを実行します。

---

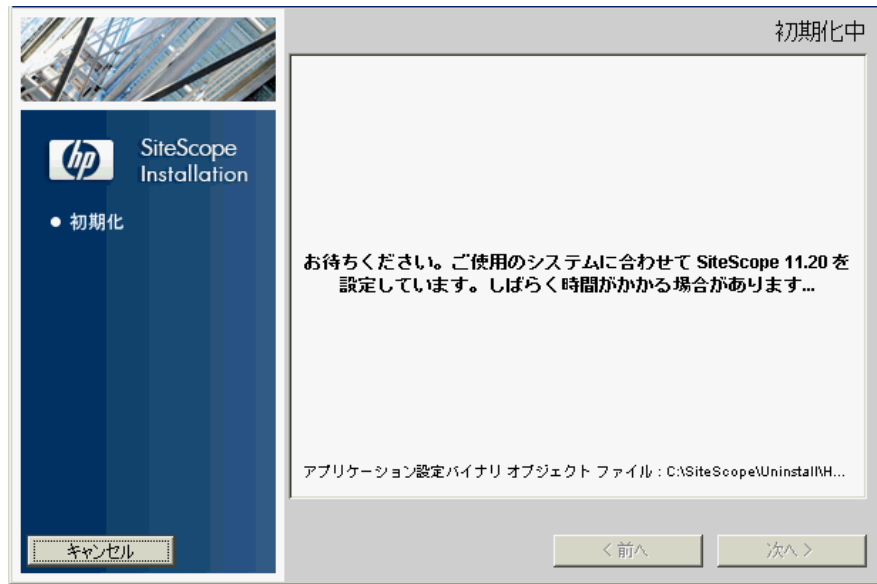
**注：**サーバで Microsoft ターミナル・サーバ・サービスが動作している場合、SiteScope のインストール時に、このサービスが**インストール・モード**である必要があります。サービスが正しいモードでない場合、ウィザードはエラー・メッセージを表示してインストールを完了します。**change user** コマンドを使用して、インストール・モードに切り替えます。詳細については、Microsoft サポート・サイト (<http://support.microsoft.com/kb/320185>) を参照してください。

---

- 3 ロケールの選択画面が表示されます。



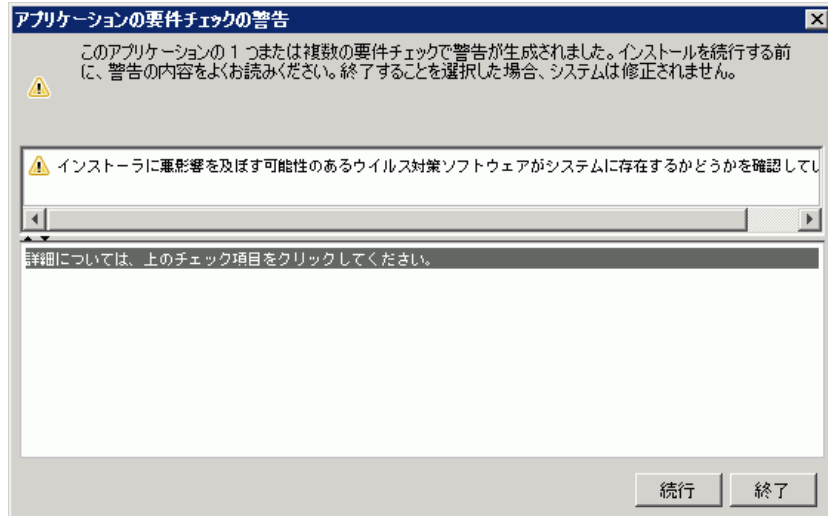
[OK] をクリックして、インストールを続けます。[初期化] 画面が表示されます。



システム上で稼動しているアンチウィルス・プログラムが検出されると、警告内容を調べてからインストールを続行するように求められます。

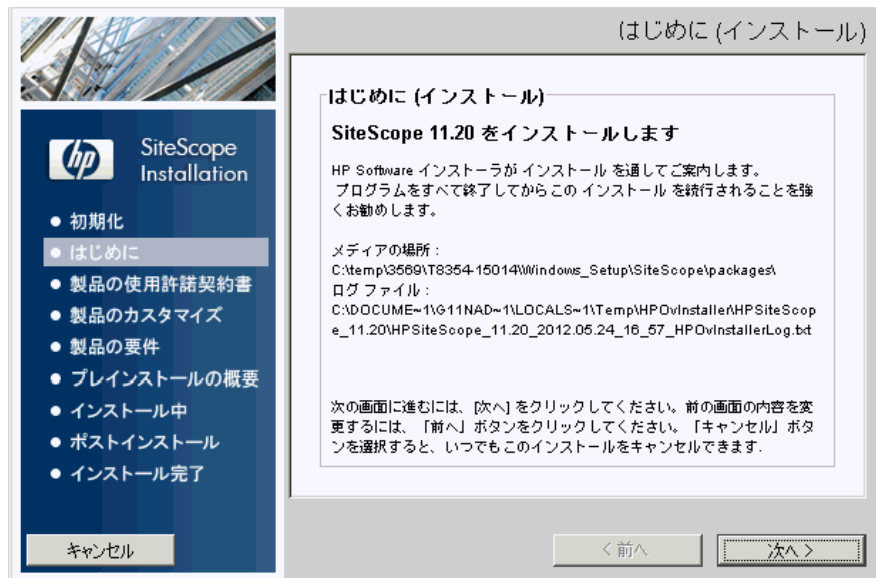
- 4 [アプリケーションの要件チェックの警告] 画面に警告が表示される場合は、内容を読み、画面の指示に従ってください。

ウイルス対策プログラムが検出された場合、ウイルス対策プログラムを無効化せずに SiteScope をインストールできるか試してください。

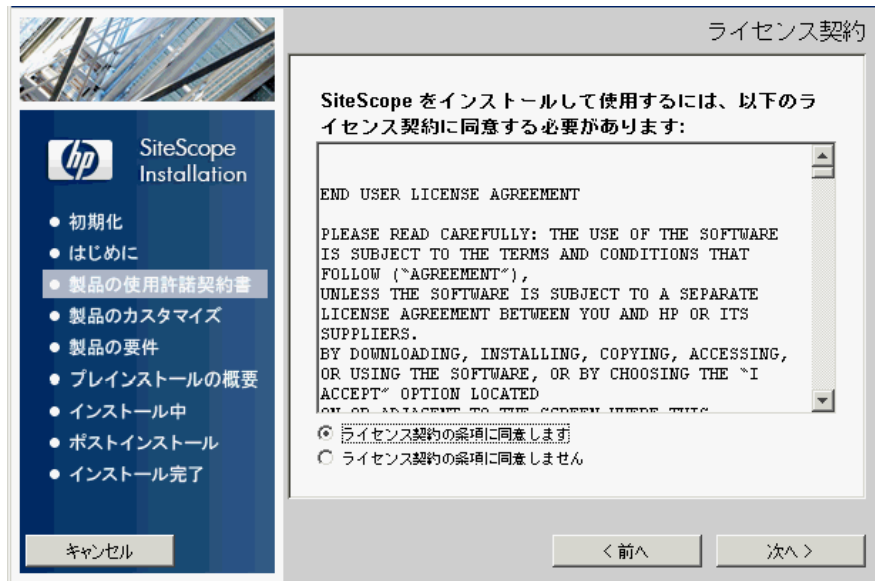


[**続行**] をクリックして、インストールを続けます。

- 5 表示される [**はじめに (インストール)**] 画面で、[**次へ**] をクリックします。



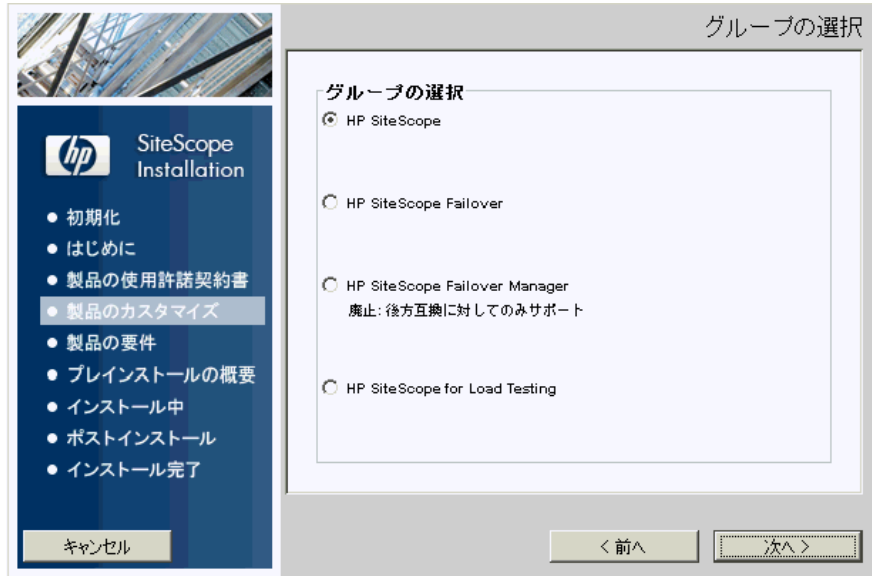
## 6 使用許諾契約画面が開きます。



SiteScope の使用許諾契約を確認します。

SiteScope をインストールするには、[ライセンス契約の条項に同意します] を選択して、[次へ] をクリックします。

- 7 [製品のカスタマイズ] 画面で、SiteScope セットアップの種類を選択します。



- ▶ **HP SiteScope** : 標準の SiteScope です。
- ▶ **HPHP SiteScope Failover** : このインストールでは、プライマリ SiteScope サーバに障害が発生した場合、インフラストラクチャの可用性の監視のバックアップを提供します。これは、SiteScope Failover Manager の代替として再開した、クラシック SiteScope フェイルオーバー（自動ミラーリング）ソリューションです。
- ▶ **HP SiteScope Failover Manager** : このインストールでは、プライマリ SiteScope サーバに障害が発生した場合、インフラストラクチャの可用性の監視のバックアップとして SiteScope Failover Manager（共有ドライブ・アーキテクチャ）ソリューションを使用できます。

---

**注** : このオプションは廃止されていて、下位互換性のみで使用できます。SiteScope Failover Manager はまだサポートされていますが、将来サポートを終了する予定で、代わりに SiteScope フェイルオーバー・ソリューションへの移行を検討することを推奨します。

---



- ▶ **HP SiteScope for Load Testing** : HP LoadRunner または HP Performance Center をインストールする場合のみ使用できます。このオプションを選択した場合、ユーザは LoadRunner または Performance Center アプリケーションで SiteScope モニタを定義し、使用できます。SiteScope は、ネイティブの LoadRunner および Performance Center モニタを補足する追加の監視機能を提供します。詳細については、該当する LoadRunner または Performance Center のドキュメントを参照してください。

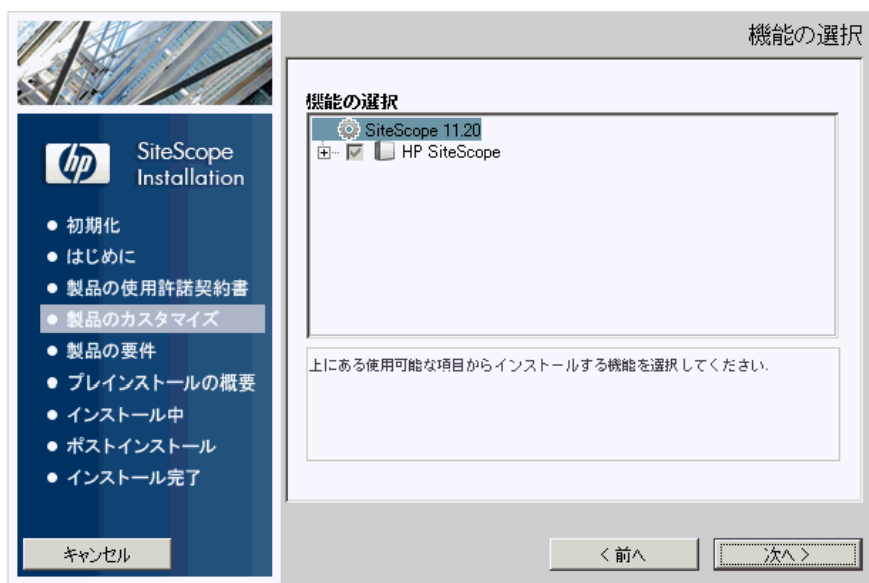
---

**注** : Solaris または Linux プラットフォームにインストールする場合は、このインストール・オプションを使用できません。

---

[次へ] をクリックして次に進みます。

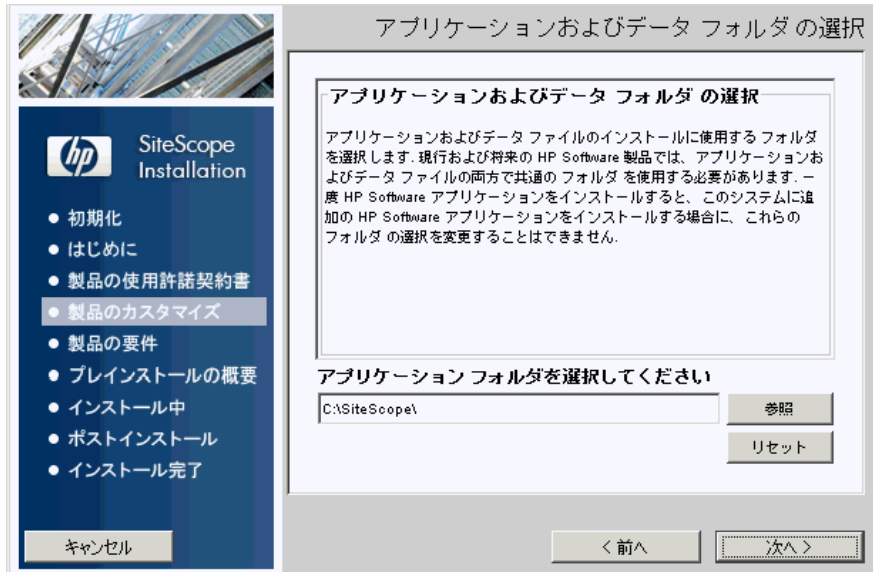
- 8 [機能の選択] 画面が開き、HP SiteScope フォルダが表示されます。



[次へ] をクリックして次に進みます。

- 9 Solaris または Linux プラットフォームにインストールする場合、SiteScope は /opt/HP/SiteScope/ フォルダに自動的にインストールされます。124 ページ「手順 10」に進みます。

[アプリケーションおよびデータ フォルダの選択] 画面が開きます。



標準設定のディレクトリを受け入れるか、[参照] をクリックして別のディレクトリを選択します。別のディレクトリを選択した場合、インストール・パスの名前にスペースやラテン文字以外の文字を含めないでください。また、パス名は **SiteScope** というフォルダ名（大文字と小文字が区別されます）で終了していなければなりません。標準設定のインストール・パスを復元するには、[リセット] をクリックします。

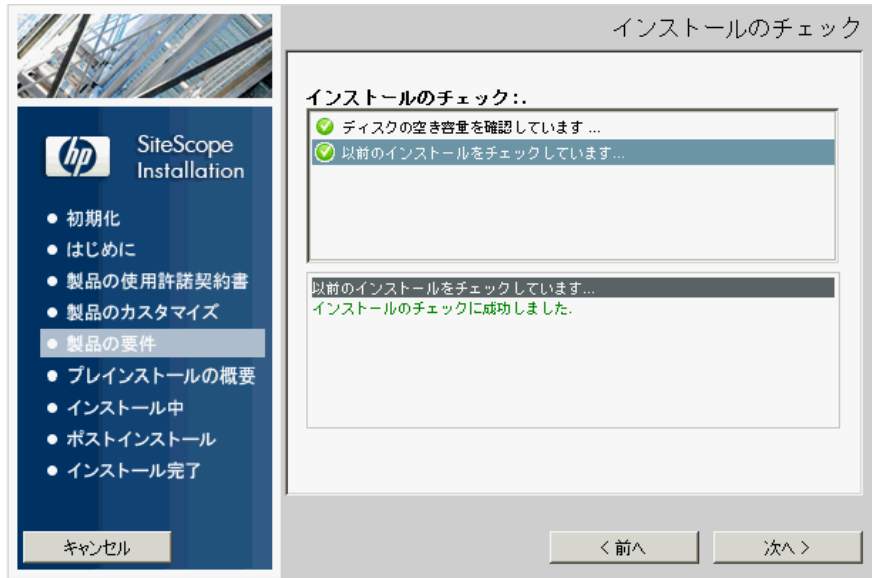
**SiteScope Failover Manager を使って作業する場合の注意事項** : SiteScope Failover Manager のオプションは廃止されていて、下位互換性のみで使用できます。

SiteScope Failover Manager を使用して、バックアップ監視を有効にする場合は、共有リソースに SiteScope をインストールする必要があります。

- ▶ Windows の場合は、SiteScope installation フォルダの UNC パスを使用して SiteScope をインストールする必要があります。たとえば、`\\lab1\users\SiteScopes\Version_11.20\Build_2000\SiteScope` を使用します。
  - ▶ Linux または Solaris の場合は、`/opt/HP/SiteScope` フォルダに共有リソースをマウントする必要があります。
- 

[次へ] をクリックして次に進みます。

- 10 [インストールのチェック] 画面が開いて、検証が実行されます。

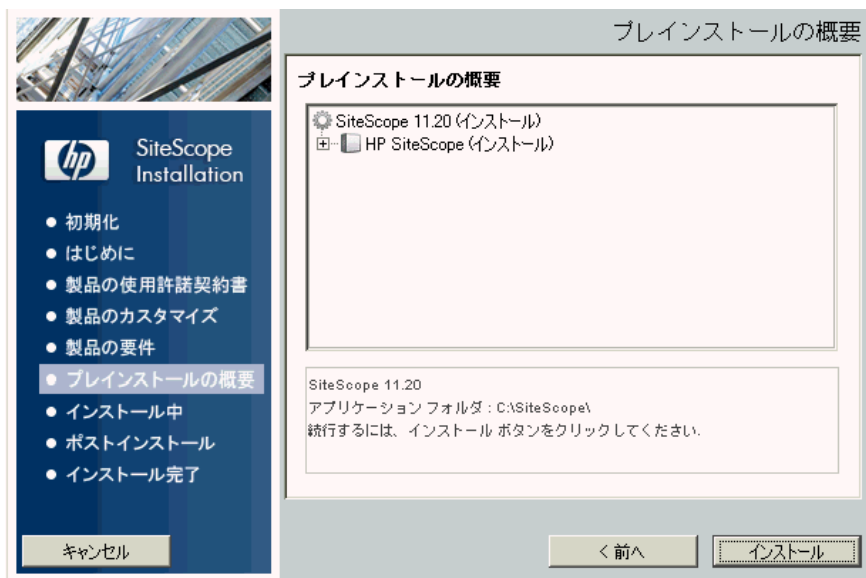


空きディスク容量の検証が正常に完了したら、[次へ] をクリックします。

空きディスク容量の検証に失敗した場合は、次の手順で行います。

- ▶ Windows のディスクのクリーンアップ・ユーティリティなどを使用して、ディスク領域を開放します。
- ▶ 手順 9 および 10 を繰り返します。

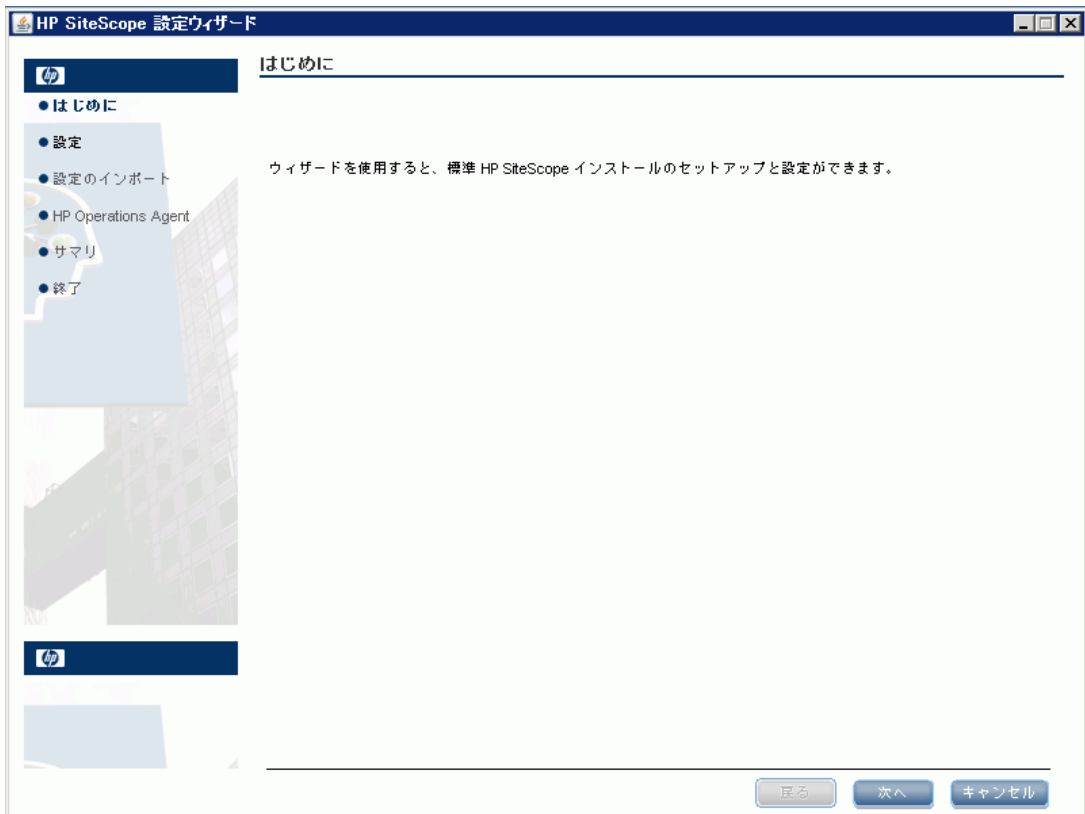
11 [プレインストールの概要] 画面で、[インストール] をクリックします。



- 12** インストール画面が開き、必要な SiteScope ソフトウェア・コンポーネントが選択されて、インストールされます。インストール中は、各ソフトウェア・コンポーネントおよびインストールの進行状況が画面に表示されます。



- 13 SiteScope コンポーネントのインストールが終了すると、SiteScope 設定ウィザードの [はじめに] 画面が開きます。



[次へ] をクリックします。

14 SiteScope 設定ウィザードの [設定] 画面が開きます。





必要な設定情報を入力し、[次へ] をクリックします。

- ▶ **ポート** : SiteScope のポート番号。指定したポート番号が使用中の場合 (エラー・メッセージが表示される場合) は、別のポートを入力します。必要に応じて、後で設定ツールを使用してポートを変更できます。標準設定では、ポート 8080 です。

---

**注** : 単一のフェイルオーバー・マシンから SiteScope Failover Manager を使用して複数のプライマリ SiteScope を監視する予定の場合は、各プライマリ SiteScope インストールを一意のポート番号で応答するように設定する必要があります。SiteScope サーバで使用されるポートを確認するには、SiteScope 設定ウィザードを使用します。詳細については、155 ページ「Windows プラットフォームでの設定ツールの実行」を参照してください。

---

- ▶ **ライセンス・ファイル** : ライセンス・ファイルのパスを入力するか、[選択] をクリックして SiteScope ライセンス・キー・ファイルを選択します。60 日間のトライアル期間以降も SiteScope を使用する場合は、ライセンスを購入する必要があります。試用期間中に SiteScope を使用する場合は、この時点でライセンス情報を入力する必要はありません。

---

**注** : 11.00 以前のバージョンの SiteScope のライセンス・キーは、現在のバージョンと互換性がありません。ライセンス・キーの配信を <http://webware.hp.com> (英語サイト) から自動的に実行できます。

---

- ▶ **ローカル・システム・アカウントを使用** (Solaris または Linux インストールでは無効) : インストール時の標準設定では、SiteScope は **Local System account** として実行されるように設定されています。このアカウントはローカル・コンピュータに対する広範な権限を保持していて、ほとんどのシステム・オブジェクトにアクセスできます。SiteScope をローカル・システム・アカウントで実行している場合、SiteScope の設定に従って、サーバの資格情報を使用してリモート・サーバへの接続が試みられます。

- ▶ **このアカウントを使用** (Solaris または Linux インストールでは無効) : SiteScope サービスのユーザ・アカウントを変更する場合に選択します。SiteScope サービスを、ドメイン管理権限を持つユーザとしてログオンするように設定できます。これにより、SiteScope にドメイン内のサーバ・データを監視するためのアクセス権限が付与されます。リモート・サーバにアクセスできるアカウントおよびパスワードを入力し、確認のためにパスワードを再入力します。

---

**注** : SiteScope がインストールされ、カスタム・ユーザ・アカウントとして実行するように設定されている場合、使用するアカウントには**サービスとしてログオン**権限が必要です。ユーザにログオン・サービスへのアクセス権を付与するには、次の手順で行います。

1. Windows の [コントロール パネル] で、[管理ツール] をダブルクリックします。
2. [ローカル セキュリティ ポリシー] をダブルクリックし、[ローカル ポリシー] > [ユーザ権利の割り当て] > [サービスとしてログオン] を選択します。
3. [ユーザまたはグループの追加] をクリックして、ログオン・サービス・アクセス権を付与するユーザを選択して、[OK] をクリックします。
4. [OK] をクリックして、更新されたポリシーを保存します。

- 
- ▶ **サービス名** (Solaris または Linux インストールでは無効) : SiteScope サービスの名前。マシンに以前のバージョンの SiteScope がインストールされている場合は、SiteScope サービスに別の名前を入力します。標準のサービス名は SiteScope です。
  - ▶ **インストール後に SiteScope サービスを開始する** (Solaris または Linux インストールでは無効) : インストールが完了すると、SiteScope サービスは自動的に起動します。

- 15 [設定のインポート] 画面が開き、既存の SiteScope 設定データを新しい SiteScope にインポートできるようになります。



次のいずれかのオプションを選択し、**[次へ]** をクリックします。

- ▶ **設定をインポートしない**
- ▶ **エクスポートされた既存の設定ファイルを使用する** : エクスポートされた既存の設定ファイルにある、テンプレート、ログ、モニタ設定ファイルなどの SiteScope データを使用できます。SiteScope データは設定ツールを使用してエクスポートされ、**.zip** 形式で保存されます。**[選択]** ボタンをクリックし、インポートするユーザ・データ・ファイルに移動します。

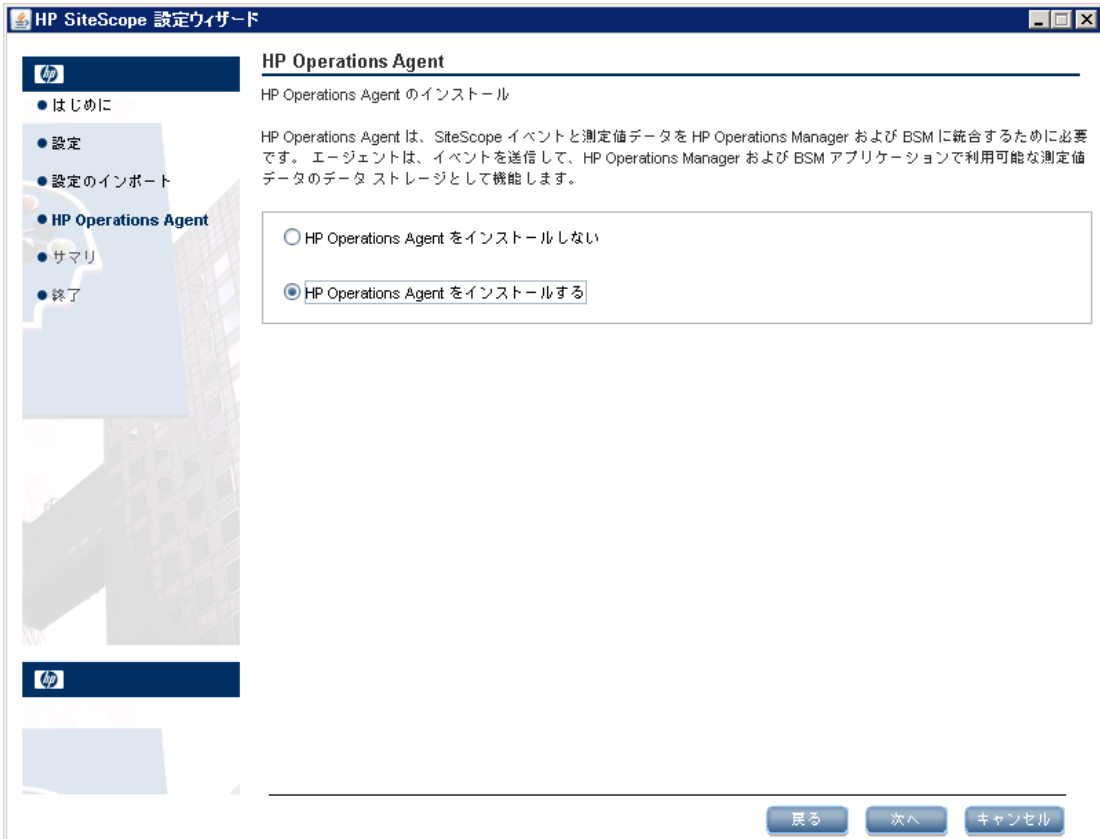
- ▶ 次の SiteScope インストールからインポート：[選択] ボタンをクリックして、設定データのインポート元の SiteScope インストール・フォルダに移動します。
- ▶ ログ ファイルを含める：選択した SiteScope インストール・フォルダからログ・ファイルをインポートできるようになります。

---

**注：** SiteScope 間で設定データを移動する場合は、設定データの取得元の SiteScope サーバが、データ・インポート先の SiteScope サーバと同じタイム・ゾーン内にあることを確認してください。

---

- 16 [HP Operations Agent] 画面が開きます。イベントおよび測定値を HP Operations Manager または BSM ゲートウェイ・サーバに送信するように SiteScope が統合されている場合は、HP Operations Agent が必要です。



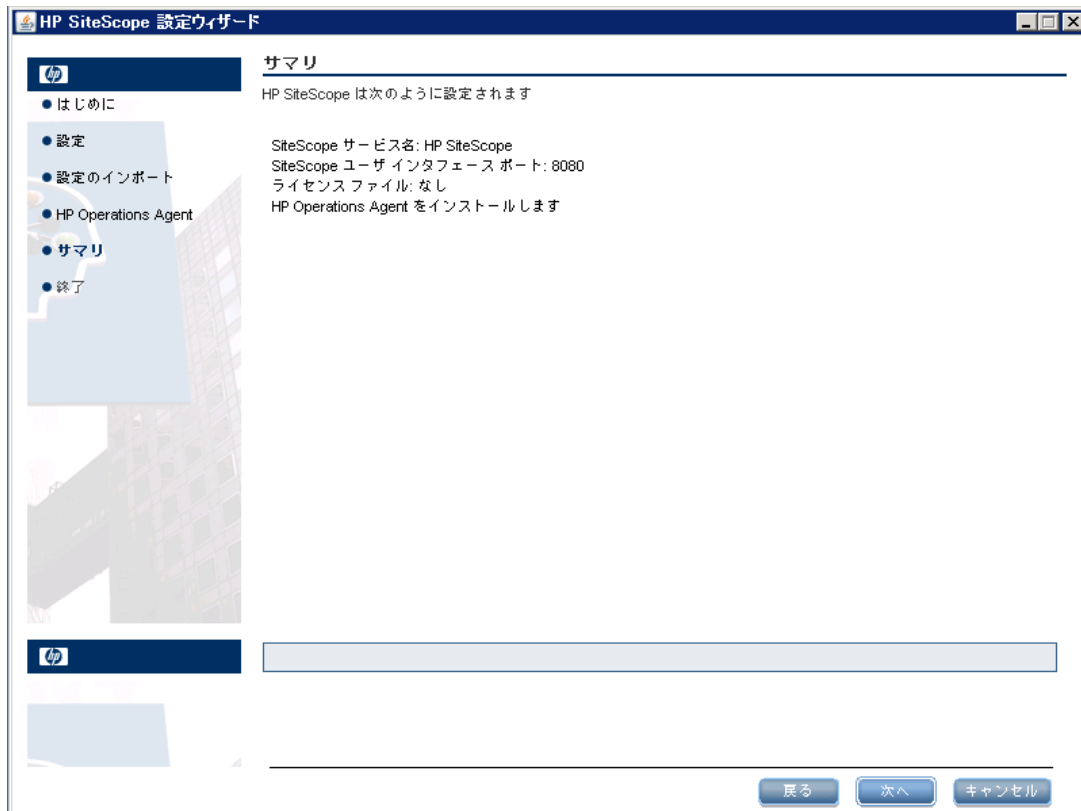
次のいずれかのオプションを選択し、[次へ] をクリックします。

- ▶ **HP Operations Agent をインストールしない** : HP Operations Agent はインストールされません。
- ▶ **HP Operations Agent をインストールする** : SiteScope サーバに HP Operations Agent をインストールする場合に選択します。HP Operations Agent を使用すると、SiteScope が HP Operations Manager または BSM ゲートウェイ・サーバと統合されている場合に、イベントを送信し、測定値データのデータ・ストレージとして機能するように SiteScope を設定できます。

**注：**

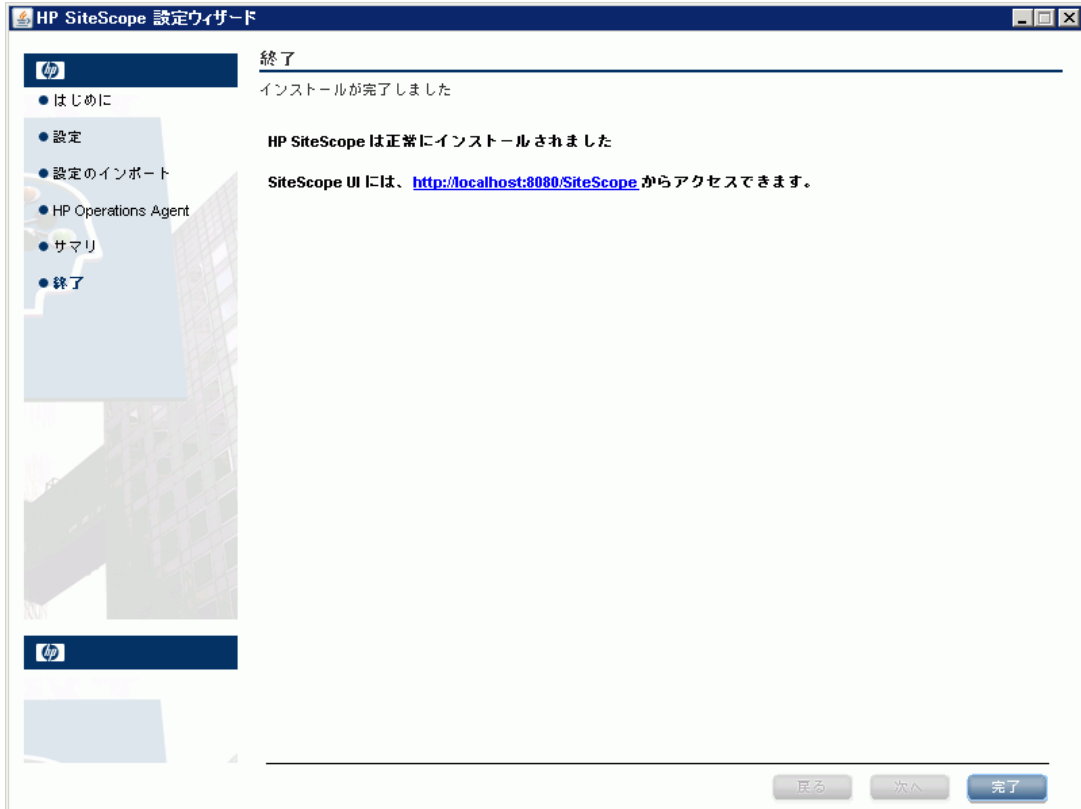
- ▶ HP Operations Agent がすでにインストールされているマシンに SiteScope およびこのエージェントをインストールすると、SiteScope は現在のエージェントをアップグレードして上書きします。
  - ▶ HP Operations Agent は、リリース・ノート of HP SiteScope Support Matrices セクション (SiteScope で、**[ヘルプ]** > **[新機能]** を選択) にリストされている環境で動作する SiteScope でサポートされます。したがって、SiteScope と HP Operations Agent や BSM との統合は、これらの環境でのみサポートされています。
  - ▶ 32 ビット Windows マシンに HP Operations Agent をインストールする際に問題が発生する場合は、148 ページ「トラブルシューティングおよび制限事項」を参照してください。
-

## 17 [サマリ] 画面が開きます。



情報が正しいことを確認し、**[次へ]** をクリックして次に進みます。選択内容を変更するには、**[戻る]** をクリックして前の画面に戻ります。

18 [終了] 画面が開きます。



SiteScope ユーザ インタフェース にアクセスするには、現在の SiteScope の接続アドレスをクリックします。

---

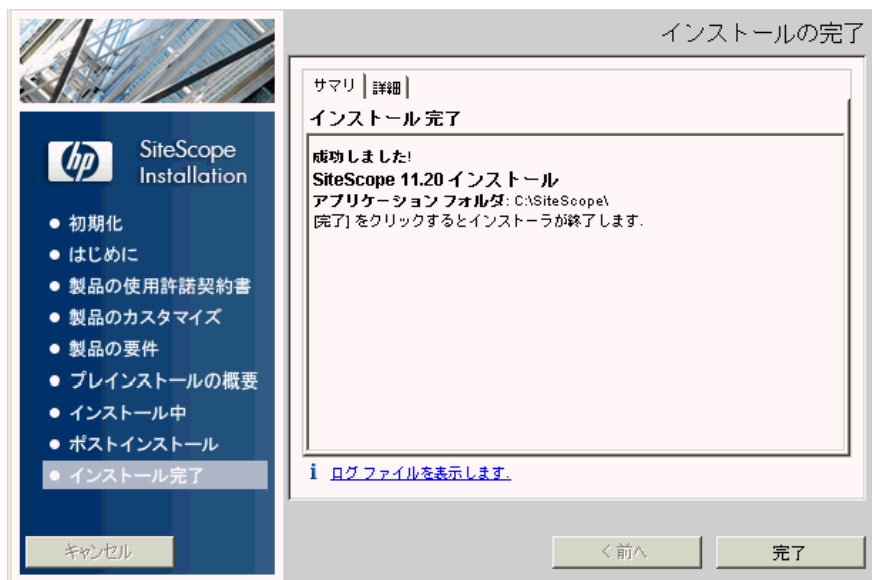
**注：**構成設定画面で「インストール後に SiteScope サービスを開始する」を選択しなかった場合は、SiteScope サービスを起動してから、SiteScope に接続する必要があります。詳細については、259 ページ「SiteScope を使った作業の開始」を参照してください。

---

[完了] をクリックして、SiteScope 設定ウィザードを閉じます。



- 19 インストールが終了したら、[インストールの完了] ウィンドウが開き、使用したインストール・パスおよびインストール・ステータスのサマリが表示されます。



インストールに失敗した場合は、[インストールの完了] ウィンドウの [**ログファイルを表示します**] リンクをクリックして Web ブラウザでログ・ファイルを表示し、インストール・ログ・ファイルにエラーがないか確認します。

インストールされたパッケージの詳細については、[**詳細**] タブをクリックしてください。

インストール・プログラムを閉じる場合は、[**完了**] をクリックします。

インストール・プログラムがサーバを再起動する必要があると判断した場合は、サーバを再起動するように求められます。

- 20 利用可能な最新機能については、インストールした SiteScope と同じ場所から、最新の SiteScope サービス・パックをダウンロードしてインストールしてください。SiteScope インタフェースへのアクセスの詳細については、262 ページ「SiteScope への接続」を参照してください。

- 21** Linux または Solaris 環境に SiteScope をインストールした場合は、SiteScope インストール・ディレクトリに権限を設定して、SiteScope アプリケーションを実行するために使用されるユーザ・アカウントに対して、読み込み、書き込み、および実行の権限を付与します。これらの権限は、SiteScope インストール・ディレクトリに含まれるすべてのサブディレクトリに対して設定する必要があります。

## **X11 サーバがインストールされていないマシンへのインストール・ウィザードを使用した SiteScope のインストール**

以下のいずれかで、X11 サーバがインストールされていないマシンにインストール・ウィザードを使用して SiteScope をインストールできます。

- ▶ VNC サーバを使用する (多くの Linux および Solaris システムで、VNC サーバは標準設定でインストールされている)
- ▶ DISPLAY 環境変数を編集して、別のマシンの X サーバを使用するようにプログラムを設定する

**VNC サーバを使用して、X11 がインストールされていないマシンに SiteScope をインストールするには、次の手順で行います。**

- 1** コマンド・ラインで `vncserver` を実行します。プログラムが起動したら、パスワードを選択し、VNC サーバで使用するディスプレイ (通常は :1) を選択します。
- 2** 以下のフォーマットを使用し、VNC クライアントから SiteScope マシンに接続します。その際は、`hostname:display` の形式を使用します。たとえば、`sitescope.company.name:1` と入力します。
- 3** 表示されるコンソールで SiteScope インストール・ディレクトリに移動して、通常どおりにインストールを実行します。

**X をリダイレクトして、X11 がインストールされていないマシンに SiteScope をインストールするには、次の手順で行います。**

- 1** X サーバがインストールされた Linux または Solaris システムを実行するか、Windows に X サーバをインストールします (`xming` など)。
- 2** X アクセス制御によって、SiteScope が接続できることを確認します。Linux または Solaris プラットフォームの場合は、`man xhost` を実行してマニュアルを参照してください。Windows プラットフォームの場合は、X サーバの実装に関するドキュメントを参照してください。
- 3** SiteScope マシンで `export DISPLAY=x-server.machine.name:display` を実行します (`display` は通常 0)。
- 4** 同じシェル内の SiteScope インストール・ディレクトリに移動して、通常どおりインストールを実行します。

## コンソール・モードを使用した **Solaris** または **Linux** へのインストール

SiteScope は、コマンド・ラインまたはコンソール・モードを使用してインストールできます。SiteScope をリモート・サーバにインストールする場合、または、ユーザ・インタフェースを使用してインストール・オプションを使用できない何らかの理由がある場合は、このオプションを使用します。

---

**注：**Solaris プラットフォームでの SiteScope の実行は現在は廃止されています。次のリリースでは Solaris インストーラを含める予定はありません。

---

**コンソール・モードを使用して Solaris または Linux に SiteScope をインストールするには、次の手順で行います。**

- 1 SiteScope をインストールするマシンに SiteScope セットアップ・ファイルをダウンロードします。

または、SiteScope のインストールに使用するユーザ・アカウントがアクセス可能なディスクまたはネットワーク上の場所に SiteScope セットアップ・ファイルをコピーします。

- 2 次のコマンドを実行します。

```
HPSiteScope_11.20_setup.bin -i console
```

インストール・スクリプトによって、Java 仮想マシンが初期化されて、インストールが開始されます。

- 3 ロケールの選択画面が表示されます。

```
Preparing to install...
Extracting the JRE from the installer archive...
Unpacking the JRE...
Extracting the installation resources from the installer archive...
Configuring the installer for this system's environment...
Preparing CONSOLE Mode Installation...

-----

Choose Locale...
-----

    1- English
    ->2- 日本語

CHOOSE LOCALE BY NUMBER: █
```

数字を入力して目的のロケールを選択し、ENTER キーを押して続行します。

- 4 確認画面が表示されます。

ENTER キーを押して続行します。

- 5 [はじめに] 画面が表示されます。

```
はじめに
-----
次のソフトウェアのインストールへようこそ :HP SiteScope 11.20
HP Software インストーラがインストールの案内をします。このインストールを続ける
前に、すべてのプログラムを終了することを強くお勧めします。

アプリケーション メディアの場所 : /doc/HPSiteScope_v11.20_linux/packages/
インストール ログ ファイル : /tmp/HPOvInstaller/HPSiteScope_11.20/HPSiteScope_11
.20_2012.05
.09_04_02_HPOvInstallerLog.txt
それぞれの指示に従いながら、インストールの次のステップに進みます。
If you want to change something on a previous step, type 'back'.
You may cancel this installation at any time by typing 'quit'.

Enter キーを押すと 続行: █
```

ENTER キーを押して、インストールを続行します。

- 6 使用許諾契約のテキストが表示されます。SiteScope 使用許諾契約は、数ページにわたって表示されます。表示される各ページを確認してください。次のページに進むには、ENTER キーを押します。使用許諾契約のすべてのページを確認したら、使用許諾契約に同意するか同意しないかを指定します。

```
ライセンス契約の条項に同意します。 (Y/N): Y
```

SiteScope をインストールするには、使用許諾契約に同意する必要があります。標準設定の選択は、使用許諾契約に同意しないになっています。使用許諾契約に同意して、インストールを続行する場合は、Y を入力します。

---

**注：** SiteScope 使用許諾契約を読んだ後にインストールをキャンセルする場合は、N を入力します。

---

- 7 SiteScope のセットアップの種類を選択する画面が開きます。

```
->1- HP SiteScope: ()
    2- HP SiteScope Failover Manager: ()
以下のいずれかのグループを選択してください...: 1
```

## 第 8 章 • SiteScope のインストール

使用に適した種類を選択します。セットアップの種類番号を入力し、ENTER キーを押して続行します。

- 8 [機能の選択] 画面が開きます。

```
機能の 選択
-----

インストール機能は、機能のグループを表します。
If you want to change something on a previous step, type 'back'.
You may cancel this installation at any time by typing 'quit'.

->1- HP SiteScope (Required)

機能を選択してください（コンマで選択肢を仕切る）： █
```

1（必須）を入力して、SiteScope をインストールします。

ENTER キーを押して、インストールを続行します。

- 9 [インストール要件のチェック] 画面が開きます。

```
インストール要件のチェック
-----

確認中：ディスクの空き容量を確認しています... [完了]

チェックを実行しています...
詳細：チェックを実行しています... お待ちください
チェック要件のインストールが正常に完了しました。
If you want to change something on a previous step, type 'back'.
You may cancel this installation at any time by typing 'quit'.

続行するには Enter キーを押してください。： █
```

ENTER キーを押して、インストールを続行します。

- 10 [プレインストールの概要] 画面が開きます。

```
プレインストールの概要
-----

続ける前に、以下の内容をご確認ください。

アプリケーション名
  HP SiteScope

アプリケーションの簡略名
  HPSiteScope

アプリケーション リビジョン
  11.20

アプリケーション ディレクトリ
  /opt/HP/SiteScope/

データ ディレクトリ
  /var/opt/HP/SiteScope/

If you want to change something on a previous step, type 'back'.
You may cancel this installation at any time by typing 'quit'.

Enter キーを押すと 続行: █
```

ENTER キーを押して、インストールを続行します。

- 11 [インストール機能] 画面が開き、インストール・プロセスが開始されます。

```
インストール機能
-----

パッケージの状態をチェックしています。

選択されたパッケージのインストールの状態をチェックしています。

Processing of 6 packages (Using Native rpm) scheduled.
Completed checking the installation status of all packages.
この処理にはしばらく時間がかかる場合があります。処理を中断しないでください...
```

インストール・プロセスが完了すると、インストール後の設定画面が表示されます。

- 12 ポートに関するプロンプトが表示されます。

```
Installing...
-----
[=====|=====|=====|=====]
[-----|-----|-----|-----]
: =====
==
-----
HP SiteScope ポート番号を入力してください
ポート [8080]
PRESS <1> to accept the value [8080], or <2> to change the value
█
```

1 を入力して、標準設定のポート 8080 を受け入れるか、または 2 を入力してポートを変更し、ポート変更を求めるプロンプトで別の番号を入力します。

---

**注：**単一のフェイルオーバー・マシンから SiteScope Failover Manager を使用して複数のプライマリ SiteScope を監視する予定の場合は、各プライマリ SiteScope インストールを一意のポート番号で応答するように設定する必要があります。SiteScope サーバで使用されるポートを確認するには、SiteScope 設定ウィザードを使用します。詳細については、163 ページ「Solaris または Linux プラットフォームでの設定ツールの実行」を参照してください。

---

ENTER キーを押して、インストールを続行します。



- 13 ライセンス・ファイル・パスを求めるプロンプトが表示されます。

```

ライセンス ファイルのパスを入力してください
ファイル名 []
PRESS <1> to accept the value [], or <2> to change the value
1
: -----

```

1 を入力して、ライセンス・ファイル・パスを空のまま残すか（この時点でライセンス情報を入力しなくても、無料の評価期間中は SiteScope を使用できる）、または 2 を入力して、次のテキスト・ボックスにライセンス・ファイルのパスを入力します。

---

**注:** 以前のバージョンの SiteScope のライセンス・キーは、現在のバージョンと互換性がありません。ライセンス・キーの配信を <http://webware.hp.com> (英語サイト) から自動的に実行できます。

---

ENTER キーを押して、インストールを続行します。

- 14 設定データのインポート画面が開きます。

```

: : -----
既存の設定ファイルまたは SiteScope インストールから設定データをインポートします
->1 - インポートしません: ()
   2 - ファイルからインポートします: ()
   3 - フォルダからインポートします: ()
1

```

データをインポートしない場合は、1 を入力します。

エクスポートされた既存の設定ファイルから、テンプレート、ログ、モニタ設定ファイルなどの SiteScope データを使用する場合は、2 を入力します。このオプションを選択した場合は、次のテキスト・ボックスに設定ファイルのパスを入力します。

SiteScope インストール・ディレクトリから設定データをインポートする場合は、3 を入力します。このオプションを選択した場合は、設定データのインポート元の SiteScope インストール・フォルダのパスを入力します。

ENTER キーを押して、インストールを続行します。

---

**注：** SiteScope 間で設定データを移動する場合は、設定データの取得元の SiteScope サーバが、データ・インポート先の SiteScope サーバと同じタイム・ゾーン内にあることを確認してください。

---

**15** [HP Operations Agent のインストール] 画面が開きます。

```
Install HP Operations Agent
->1 - Do not install: ()
  2 - Install: ()
```

HP Operations Agent をインストールしない場合は、1 を入力します。

SiteScope サーバに HP Operations Agent をインストールする場合は、2 を入力します。SiteScope が HP Operations Manager または BSM ゲートウェイ・サーバと統合されている場合に、イベントを送信し、測定値データのデータ・ストレージとして機能するように SiteScope を設定するには、このエージェントが必要になります。

---

**注：**

- ▶ HP Operations Agent がすでにインストールされているマシンに SiteScope およびこのエージェントをインストールすると、SiteScope は現在のエージェントをアップグレードして上書きします。
- ▶ HP Operations Agent は、リリース・ノートの HP SiteScope Support Matrices セクション (SiteScope で、[ヘルプ] > [新機能] を選択) にリストされている環境で動作する SiteScope でサポートされます。したがって、SiteScope と HP Operations Agent や BSM との統合は、これらの環境でのみサポートされています。

---

ENTER キーを押して、インストールを続行します。

**16** 確認のためのインストール・パラメータがコンソールに表示されます。

```
インストール 完了
```

```
-----
```

```
成功しました！
```

```
HP SiteScope 11.20
```

```
インストール が正常に完了しました。
```

```
アプリケーションディレクトリ： /opt/HP/SiteScope/
```

指定したパラメータを使用してインストールを続ける場合は **1** を入力し、前のダイアログに戻って変更する場合は **2** を入力して、ENTER キーを押します。

インストール・プロセスが完了します。インストールのステータス・メッセージが表示されます。

```
=====
```

```
Installation Complete
```

```
-----
```

```
Congratulations!
```

```
HP SiteScope 11.20
```

```
The installation has been successfully completed.
```

```
Application Directory: /opt/HP/SiteScope/
```

```
View log file./tmp/HPOvInstaller/HPSiteScope_11.20/HPSiteScope_11.20_2012.03.16_18_58_HPOvInstallerLog.txt
```

```
[root@VMAMQA297 /]# █
```

**17** SiteScope のインストール後、SiteScope インストール・ディレクトリに権限を設定して、SiteScope アプリケーションを実行するために使用されるユーザ・アカウントに対して、読み込み、書き込み、および実行の権限を付与します。これらの権限は、SiteScope インストール・ディレクトリに含まれるすべてのサブディレクトリに対して設定する必要があります。

SiteScope アプリケーションを実行する非 root ユーザの作成、およびアカウント権限の設定の詳細については、26 ページ「SiteScope を実行する権限のある非 root ユーザ・アカウントの設定」を参照してください。

**18** SiteScope へ接続するには、261 ページ「Solaris および Linux プラットフォームでの SiteScope プロセスの開始と停止」の手順に従います。

## トラブルシューティングおよび制限事項

本項では、SiteScope のインストールに関するトラブルシューティングおよび制限事項について説明します。

- ▶ 148 ページ「コンソール・モードで Linux Red Hat 64 に SiteScope をインストールできないことがある」
- ▶ 148 ページ「グラフィック・モードで 64 ビット Linux に SiteScope がインストールされない」
- ▶ 149 ページ「SiteScope が 64 ビットの Microsoft Windows Server 2003 にインストールされている場合は、SiteScope サービスはインストールされません。」
- ▶ 149 ページ「%TEMP% および %TMP% が空き領域を含むディレクトリをポイントする場合、SiteScope は Windows にインストールできない場合があります。」
- ▶ 150 ページ「HP Operations Agent が 32 ビット Windows にインストールされない」
- ▶ 150 ページ「HP Operations Agent のインストール・エラー - ログ・ファイルを確認してください」
- ▶ 151 ページ「SiteScope のアンインストール後に SiteScope をインストールできない」

### コンソール・モードで Linux Red Hat 64 に SiteScope をインストールできないことがある

開いている X セッション数が多すぎる場合、コンソール・モードを使用して Linux Red Hat 64 ビット環境に SiteScope をインストールできないことがあります。

**回避策**：一部の X セッションを閉じるか、DISPLAY 変数の設定を解除します。

### グラフィック・モードで 64 ビット Linux に SiteScope がインストールされない

インストール・ウィザードを使用している場合、Linux Red Hat 64 ビット環境で SiteScope インストーラが機能しないことがあります。

**回避策**：代わりにコンソール・モードを使用して、SiteScope をインストールします。

**SiteScope が 64 ビットの Microsoft Windows Server 2003 にインストールされている場合は、SiteScope サービスはインストールされません。**

McAfee Antivirus が実行中の 64 ビットの Microsoft Windows Server 2003 には SiteScope サービスをインストールできません。

**回避策 :** McAfee Antivirus ソフトウェアをシャットダウンして、SiteScope を再インストールします。

**%TEMP% および %TMP% が空き領域を含むディレクトリをポイントする場合、SiteScope は Windows にインストールできない場合があります。**

環境変数 %TEMP% および %TMP% が空き領域を含むディレクトリをポイントする場合、Microsoft Windows のマシンへの SiteScope のインストールは失敗します。例 : C:¥Documents and Settings¥Default User¥Local Settings¥Temp。

**回避策 :** 環境変数 %TEMP% および %TMP% を、空き領域を含まないディレクトリ・パスにポイントするように変更します。例 : C:¥Temp。

## HP Operations Agent が 32 ビット Windows にインストールされない

HP Operations Agent を 32 ビット Windows マシンにインストールできない場合は、< SiteScope のルート・ディレクトリ > \install\components\oa\win32 内のすべての .msi ファイルを元の名前に戻して（次に示すリストを参照）、HP Operations Agent を再インストールします。

たとえば、HPOvAgtEx-06.20.105-WinNT4.0-release.msi の名前を HPOvAgtEx.msi に変更します。

▶ HPOvAgtEx.msi	▶ HPOvLcja.msi
▶ HPOvBbc.msi	▶ HPOvLcko.msi
▶ HPOvConf.msi	▶ HPOvLczC.msi
▶ HPOvCtrl.msi	▶ HPOvPacc.msi
▶ HPOvDepl.msi	▶ HPOvPCO.msi
▶ HPOvEaAes.ms	▶ HPOvPerlA.msi
▶ HPOvEaAgt.msi	▶ HPOvSecCC.msi
▶ HPOvEaAja.msi	▶ HPOvSecCo.msi
▶ HPOvEaAko.msi	▶ HPOvXalanA.msi
▶ HPOvEaAzC.msi	▶ HPOvXercesA.msi
▶ HPOvLces.msi	▶ HPOvXpl.msi

## HP Operations Agent のインストール・エラー - ログ・ファイルを確認してください

HP Operations Agent のインストール中にエラーが発生した場合、またはインストール・ステータスを確認する場合は、111 ページ「HP Operations Agent が必要とする依存関係のインストール」で説明されているように、ログ・ファイルを確認できます。

## SiteScope のアンインストール後に SiteScope をインストールできない

SiteScope のアンインストール後にインストールを実行しても、完了しないで、「Windows Scripting Host を有効にしてください」というメッセージが表示されます。この原因は、Windows が PATH 環境変数内の %SystemRoot% 変数を解決できないことです (%SystemRoot% がパスに含まれていない場合も同様)。

**回避策** : PATH 環境変数内の %SystemRoot% 変数を、**C:¥Windows¥system32** の実際のパスで置き換えます。





# 9

## サイレント・モードでの SiteScope のインストール

### 本章の内容

- ▶ サイレント・モードでの SiteScope のインストールについて (153 ページ)
- ▶ サイレント・インストールの実行 (154 ページ)

### サイレント・モードでの SiteScope のインストールについて

サイレント・インストールを使用して SiteScope をインストールできます。サイレント・インストールでは、セットアップ画面を移動して選択値を入力することなく、バックグラウンドですべてのセットアップ・プロセスを実行します。入力する代わりに、すべての設定パラメータには、応答ファイルで定義する値が割り当てられます。複数の異なる設定にサイレント・インストールを実行するには、複数の応答ファイルを作成します。

### 注意事項および制限事項

サイレント・インストールを実行する前に、次の点を考慮してください。

- ▶ サイレント・モードでインストールを実行する場合、メッセージはまったく表示されません。代わりに、インストールが正常に完了したかどうかなどのインストール情報が記録されたログ・ファイルを表示できます。インストール・ログ・ファイルは次の場所にあります。
  - ▶ Windows プラットフォームの場合：  
`%tmp%\HPOvInstaller\HPSiteScope_11.20`
  - ▶ Solaris または Linux プラットフォームの場合：  
`/tmp/HPOvInstaller/HPSiteScope_11.20`
- ▶ SiteScope インストール・パス (`prodInstallDir= <Installation_path >`) は、その名前の部分にスペースや非ラテン文字を含めずに入力し、最後に **SiteScope** という名前のフォルダで終わらせるように指定します (フォルダ名は大文字と小文字を区別して指定する必要があります)。

## サイレント・インストールの実行

サイレント・インストールは、**ovinstallparams.ini** ファイルを使用して実行します。このファイルの形式は非常に特殊であるため、サンプル・ファイル **ovinstallparams.ini** を使用してサイレント・インストール・ファイルを作成します。

---

**注：** サンプル・ファイル **ovinstallparams.ini** は、**< SiteScope インストール・ディレクトリ > %examples%silent\_installation** フォルダから SiteScope をインストールした後にのみ使用できます。

---

SiteScope 11.20 のサイレント・インストールを実行するには、次の手順で行います。

- 1 **< SiteScope インストール・ディレクトリ > %examples%silent\_installation** フォルダにある **ovinstallparams.ini** ファイルに移動します。
- 2 このファイルのコピーを作成し、作成したコピーをインストールの必要性に応じて変更します。
- 3 このファイルを、SiteScope のインストール・ファイル (**HPSiteScope\_11.20\_setup.exe**, **HPSiteScope32on64\_11.20\_setup.exe**, または **HPSiteScope\_11.20\_setup.bin**) が存在するセットアップ・フォルダにコピーします。
- 4 コマンド・ラインから、**-i silent** フラグを指定してインストーラを実行します。Windows では待機モードを指定します。たとえば、

```
start /wait HPSiteScope_11.20_setup.exe -i silent (Windows)
または
.HPSiteScope_11.20_setup.bin -i silent (Linux または Solaris)
```

**サイレント・モードでの SiteScope のアンインストール：**

Linux または Solaris :

```
/opt/HP/SiteScope/installation/bin/uninstall.sh -i silent
```

Windows :

```
%SITESCOPE_HOME%\%installation%\bin\%uninstall.bat -i silent
```

# 10

---

## SiteScope 設定ツールの使用

### 本章の内容

- ▶ Windows プラットフォームでの設定ツールの実行 (155 ページ)
- ▶ Solaris または Linux プラットフォームでの設定ツールの実行 (163 ページ)
- ▶ コンソール・モードでの Solaris または Linux での設定ツールの実行 (170 ページ)

### Windows プラットフォームでの設定ツールの実行

設定ツールは、ある SiteScope から別の SiteScope に設定データを移動するのに便利なユーティリティです。後で SiteScope にインポートするために、現在の SiteScope からテンプレート、ログ、モニタ設定ファイル、スクリプト、サーバ証明書などの SiteScope データをエクスポートできます。このウィザードを使用すると、Windows レジストリ・キーのサイズ変更による SiteScope のパフォーマンス最適化、SiteScope に割り当てられているポートの変更、および HP Operations Agent のインストールやアンインストールも実行できます。

インストール・プロセス中に SiteScope データをエクスポートした場合、設定ツールを使用してそのデータをインポートできます。または、設定ツールを使用して、インストール・プロセスの一部としてではなく独立して現在の SiteScope からデータをエクスポートすることもできます。以前のバージョンの SiteScope でモニタ設定ファイルを作成または変更した場合は、それらを現在の SiteScope ディレクトリにインポートする必要があります。

**注：**

- ▶ データをエクスポートまたはインポートする前に **SiteScope** サービスを停止し、データのエクスポートまたはインポートの後にサービスを再起動する必要があります。詳細については、260 ページ「Windows プラットフォームでの **SiteScope** サービスの開始と停止」を参照してください。
  - ▶ **SiteScope** 間で設定データを移動する場合は、設定データの取得元の **SiteScope** サーバが、データ・インポート先の **SiteScope** サーバと同じタイム・ゾーン内にあることを確認してください。
  - ▶ 同じバージョンの **SiteScope** に設定をインポートする場合、新しいテンプレート例をインポートするには、すべてのテンプレート例コンテナの名前を変更するか、コンテナを削除する必要があります。
  - ▶ 設定ツールで、データのエクスポート時にサーバ証明書とスクリプトを含めることがサポートされます。以前のバージョンの **SiteScope** からデータをエクスポートするときにサーバ証明書とスクリプトを含める方法については、81 ページ「既存の **SiteScope** インストールのアップグレード」を参照してください。
-

SiteScope 設定ツールを実行するには、次の手順で行います。

- 1 SiteScope サーバで、[スタート]>[すべてのプログラム]>[HP SiteScope]> [設定ツール] を選択します。SiteScope 設定ウィザードが開きます。
- 2 実行するアクションを選択してから、[次へ] をクリックします。

#### はじめに

このウィザードを使用すると、SiteScope サーバへのサイズ変更、SiteScope へ割り当てられたポートの変更、ある SiteScope から別の SiteScope への設定データの移動、HP Operations エージェントのインストール/アンインストールが可能となります。

実行するアクションを選択してください。

- サイズ変更
- ポートの変更
- 設定のインポート
- 設定のエクスポート
- HP Operation Agent

- ▶ **サイズ変更** : Windows レジストリ・キーの JVM ヒープ・サイズ、デスクトップ・ヒープ・サイズ、およびファイル・ハンドル数を増やして、SiteScope のパフォーマンスを最適化できます。詳細については、158 ページ「手順 3」を参照してください。

---

**注** : <SiteScope のインストール・ディレクトリ >%bin ディレクトリの go.bat ファイルを実行して SiteScope を起動する場合、go.bat ファイルを開き、Xmx512m パラメータを Xmx1024m (1GB の場合) 以上に、必要に応じて最大 Xmx8192m (8GB の場合) に増やします。

---

- ▶ **ポートの変更** : SiteScope サーバで使用されるポートを変更できるようにします。詳細については、159 ページ「手順 4」を参照してください。
- ▶ **設定のインポート** : エクスポートされた設定データ (.zip) ファイル、または既存の SiteScope インストールから設定データをインポートできるようにします。詳細については、160 ページ「手順 5」を参照してください。

- ▶ **設定のエクスポート** : 後で SiteScope にインポートするために、現在の SiteScope からテンプレート、ログ、モニタ設定ファイルなどの SiteScope データをエクスポートできるようにします。詳細については、161 ページ「手順 6」を参照してください。
  - ▶ **HP Operations Agent** : HP Operations Agent のインストールおよびアンインストールを有効にします。このエージェントを使用すると、SiteScope が HP Operations Manager または BSM ゲートウェイ・サーバと統合されている場合に、SiteScope または SiteScope Failover はイベントを送信し、測定値データのデータ・ストレージとして機能できます。詳細については、162 ページ「手順 7」を参照してください。
- 3 [サイズ変更]** オプションを選択した場合は、Windows レジストリのパラメータを一覧表示する [サイズ変更] 画面が開きます (次の例は 32 ビットのインストールの場合)。

#### サイズ変更

---

[次へ] ボタンをクリックすると、レジストリ内の次のパラメータが変更されます:

1. JVM ヒープ サイズを 4096 MB へ増やす
2. デスクトップ ヒープ サイズを 8192 KB へ増やす
3. ファイル処理数を 18,000 へ増やす

Windows レジストリ・キーに次の変更を加えることで、SiteScope のパフォーマンスを最適化できます。

- ▶ **JVM ヒープ・サイズ** : 32 ビットのインストールの場合、値を 512 MB から 1024 MB に変更します。64 ビットのインストールの場合、4096 MB に変更します。JVM ヒープ・サイズの詳細については、<http://java.sun.com/j2se/1.5.0/docs/guide/vm/gc-ergonomics.html> (英語サイト) を参照してください。
- ▶ **デスクトップ・ヒープ・サイズ** : 32 ビットのインストールの場合、値を 512 KB から 2048 KB に変更します。64 ビットのインストールの場合、8192 KB に変更します。デスクトップ・ヒープ・サイズの詳細については、<http://support.microsoft.com/kb/126962> を参照してください。

[次へ] をクリックして、サイズ設定操作を完了します。

#### 4 [ポートの変更] オプションを選択した場合は、[ポートの変更] 画面が開きます。

##### ポートの変更

SiteScope サーバ別に使用する任意のポートを変更できます。

他の Business Service Management 製品で使用されているポートと干渉しないよう、28000 ~ 28100 の範囲のポートの使用をお勧めします。

SiteScope ユーザ インタフェース	<input type="text" value="8080"/>
Tomcat シャットダウン	<input type="text" value="28005"/>
Tomcat AJP コネクタ	<input type="text" value="28009"/>
SSL	<input type="text" value="8443"/>
JMX コンソール	<input type="text" value="28006"/>
従来のユーザ インタフェース	<input type="text" value="8888"/>
従来のユーザ インタフェース (安...	<input type="text"/>

必要に応じて、SiteScope サーバで使用されるポートを変更します。ポート番号には、1 ~ 65534 の数字を指定する必要があります。従来のユーザ・インタフェースを除くすべてのコンポーネントで、ポートは必須です。

**注：**ほかの Business Service Management 製品で使用されるポートの妨げとならないように、28000 ~ 28100 のポートを使用することをお勧めします。

[次へ] をクリックして、ポートの変更操作を完了します。

**注：**ポート変更操作を完了した後、[スタート] > [すべてのプログラム] > [HP SiteScope] > [HP SiteScope を開く] でポートが更新されます。

- 5 [設定のインポート] オプションを選択した場合は、[設定のインポート] 画面が開きます。

#### 設定のインポート

既存の設定ファイルまたは SiteScope インストールから設定データをインポートします。

対象の SiteScope を停止することをお勧めします。

エクスポートされた既存の設定ファイルを使用する  
ファイル

次の SiteScope インストールからインポート  
フォルダ

ログ ファイルを含める

**注：**データをインポートする前に SiteScope サービスを停止し、データのインポート後にサービスを再起動する必要があります。詳細については、260 ページ「Windows プラットフォームでの SiteScope サービスの開始と停止」を参照してください。

- ▶ [エクスポートされた既存の設定ファイルを使用する] を選択した場合は、インポートするユーザ・データの名前を入力します。
- ▶ [次の SiteScope インストールからインポート] を選択した場合は、ユーザ・データ・ファイルをインポートする SiteScope インストール・ディレクトリを入力します。ログ・ファイルもインポートする場合は、[ログ ファイルを含める] を選択します。

[次へ] をクリックして、インポート操作を完了します。



## 6 [設定のエクスポート] オプションを選択した場合は、[設定のエクスポート] 画面が開きます。

### 設定のエクスポート

既存の SiteScope から設定データをエクスポートします。

処理を行う前に SiteScope を停止することをお勧めします。

The screenshot shows a dialog box with the following elements:

- SiteScope フォルダ: C:\SiteScope (with a '選択...' button)
- ファイル名: (empty text box)
- ログ ファイルを含める

- ▶ **[SiteScope フォルダから]** ボックスに表示されている標準設定のディレクトリを受け入れるか、SiteScope インストール・ディレクトリの完全パスを入力します。たとえば、表示されたディレクトリ・パスを受け入れたくなく、インストール・ディレクトリのパスが D:\SiteScope11\_0\SiteScope である場合は、D:\SiteScope11\_0\SiteScope と入力します。
- ▶ **[ファイル名]** に、ユーザ・データ・ファイルをエクスポートする既存のディレクトリ、およびエクスポートしたユーザ・データ・ファイルの名前を入力します。この名前は **.zip** で終わる必要があります。ログ・ファイルもエクスポートする場合は、**[ログ ファイルを含める]** を選択します。

### 注：

- ▶ データをエクスポートする前に SiteScope サービスを停止し、データのエクスポート後にサービスを再起動する必要があります。詳細については、260 ページ「Windows プラットフォームでの SiteScope サービスの開始と停止」を参照してください。
- ▶ SiteScope データのエクスポート時に **%htdocs** ディレクトリはコピーされないため、このディレクトリのバックアップを作成し、アップグレード後に SiteScope 11.20 ディレクトリにコピーして、古いレポートを参照できるようにする必要があります。

[次へ] をクリックして、エクスポート操作を完了します。

- 7 [HP Operations Agent] オプションを選択した場合は、[HP Operations Agent のインストール] または [HP Operations Agent のアンインストール] 画面が開きます。

#### HP Operations Agent

HP Operations Agent のインストール/アンインストール

HP Operations Agent は、SiteScope イベントと測定値データを HP Operations Manager および BSM に統合する必要があります。エージェントは、イベントを送信して、HP Operations Manager および BSM アプリケーションで利用可能な測定値データのデータ ストレージとして機能します。

HP Operations Agent のインストール

HP Operations Agent のアンインストール

- ▶ **HP Operations Agent をインストールする** : SiteScope サーバに HP OperationsAgent をインストールする場合に選択します。SiteScope が HP Operations Manager または BSM ゲートウェイ・サーバと統合されている場合に、イベントを送信し、測定値データのデータ・ストレージとして機能するように SiteScope を設定するには、このエージェントが必要になります。
- ▶ **HP Operations Agent のアンインストール** : SiteScope サーバから HP Operations Agent をアンインストールする場合に選択します。

[次へ] をクリックして、インストールおよびアンインストール操作を完了します。

---

**注** : HP Operations Agent がすでにインストールされているマシンにこのエージェントをインストールすると、SiteScope は現在のエージェントをアップグレードして上書きします。

---

8 [サマリ] 画面が開いて、設定ステータスが表示されます。

#### サマリ

設定が完了しました

設定が完了しました

[完了] をクリックして、ウィザードを閉じます。

---

**ヒント：** アップグレード後に SiteScope を起動するには、< **SiteScope のルート・ディレクトリ** > %bin ディレクトリの **go.bat** ファイルを実行します。このようにすると、監視を実行するまで 15 分以上かかった場合に、SiteScope が自動起動しなくなります。

---

## Solaris または Linux プラットフォームでの設定ツールの実行

設定ツールは、ある SiteScope から別の SiteScope に設定データを移動するのに便利なユーティリティです。後で SiteScope にインポートするために、現在の SiteScope からテンプレート、ログ、モニタ設定ファイル、スクリプト、サーバ証明書などの SiteScope データをエクスポートできます。このウィザードを使用すると、SiteScope サーバで使用されるポートの変更や、HP Operations Agent のインストールやアンインストールも実行できます。

インストール・プロセス中に SiteScope データをエクスポートした場合、設定ツールを使用してそのデータをインポートできます。または、設定ツールを使用して、インストール・プロセスの一部としてではなく独立して現在の SiteScope からデータをエクスポートすることもできます。以前のバージョンの SiteScope でモニタ設定ファイルを作成または変更した場合は、それらを現在の SiteScope ディレクトリにインポートする必要があります。

**注：**

- ▶ また、設定ツールを Solaris プラットフォームまたは Linux プラットフォームでコンソール・モードで実行することもできます。詳細については、170 ページ「コンソール・モードでの Solaris または Linux での設定ツールの実行」を参照してください。
  - ▶ SiteScope 間で設定データを移動する場合は、設定データの取得元の SiteScope サーバが、データ・インポート先の SiteScope サーバと同じタイム・ゾーン内にあることを確認してください。
  - ▶ SiteScope 設定ツールで、データのエクスポート時にサーバ証明書とスクリプトを含めることがサポートされます。以前のバージョンの SiteScope からデータをエクスポートするときにサーバ証明書とスクリプトを含める方法については、81 ページ「既存の SiteScope インストールのアップグレード」を参照してください。
  - ▶ SiteScope 64 ビット・バージョンは SiteScope 32 ビット・バージョンの最大 3 倍メモリを消費します。したがって、SiteScope 64 ビット・バージョンを使用している場合には、サーバで JVM ヒープ・サイズを手動で増やす必要があります。
    - 1). 編集用に **SiteScope/bin/start-service** ファイルを開きます。
    - 2). 最後の行で、パラメータ **-Xmx512m** を必要に応じて **-Xmx2048m** 以上の値 (2GB の場合) に、最大 **-Xmx8192m** (8GB の場合) に増やします。
- 

**SiteScope 設定ツールを実行するには、次の手順で行います。**

- 1 SiteScope サーバで次のどちらかを実行します。
  - a グラフィックス・モードで、< SiteScope インストール・ディレクトリ > /bin/config\_tool.sh を実行します。
  - b コンソール・モードで、< SiteScope インストール・ディレクトリ > /bin/config\_tool.sh -i console を実行します。

SiteScope 設定ウィザードが開きます。

[次へ] をクリックします。

- 2 [はじめに] 画面で実行するアクションを選択してから、[次へ] をクリックします。

### はじめに

このウィザードを使用すると、SiteScope へ割り当てられたポートの変更、ある SiteScope から別の SiteScope への設定データの移動、HP Operations エージェントのインストール/アンインストールが可能となります。

実行するアクションを選択してください。

- ポートの変更
- 設定のインポート
- 設定のエクスポート
- HP Operation Agent

- ▶ **ポートの変更** : SiteScope サーバで使用されるポートを変更できるようにします。詳細については、166 ページ「手順 3」を参照してください。
- ▶ **設定のインポート** : エクスポートされた設定データ (.zip) ファイル、または既存の SiteScope インストールから設定データをインポートできるようにします。詳細については、168 ページ「手順 5」を参照してください。
- ▶ **設定のエクスポート** : 後で SiteScope にインポートするために、現在の SiteScope からテンプレート、ログ、モニタ設定ファイルなどの SiteScope データをエクスポートできるようにします。詳細については、167 ページ「手順 4」を参照してください。
- ▶ **HP Operations Agent** : HP Operations Agent のインストールおよびアンインストールを有効にします。このエージェントを使用すると、SiteScope が HP Operations Manager または BSM ゲートウェイ・サーバと統合されている場合に、SiteScope または SiteScope Failover はイベントを送信し、測定値データのデータ・ストレージとして機能できます。詳細については、169 ページ「手順 6」を参照してください。

- 3 **[ポートの変更]** オプションを選択した場合は、[ポートの変更] 画面が開きます。

#### ポートの変更

---

SiteScope サーバ別に使用する任意のポートを変更できます。

他の Business Service Management 製品で使用されているポートと干渉しないよう、28000～28100 の範囲のポートの使用をお勧めします。

SiteScope ユーザ インタフェース	<input type="text" value="8080"/>
Tomcat シャットダウン	<input type="text" value="28005"/>
Tomcat AJP コネクタ	<input type="text" value="28009"/>
SSL	<input type="text" value="8443"/>
JMX コンソール	<input type="text" value="28006"/>
従来のユーザ インタフェース	<input type="text" value="8888"/>
従来のユーザ インタフェース (安...	<input type="text"/>

必要に応じて、SiteScope サーバで使用されるポートを変更します。ポート番号には、1～65534 の数字を指定する必要があります。従来のユーザ・インタフェースを除くすべてのコンポーネントで、ポートは必須です。

---

**注：**ほかの Business Service Management 製品で使用されるポートの妨げとならないように、28000～28100 のポートを使用することをお勧めします。

---

[次へ] をクリックして、ポートの変更操作を完了します。

- 4 [設定のエクスポート] オプションを選択した場合は、[設定のエクスポート] 画面が開きます。

#### 設定のエクスポート

既存の SiteScope から設定データをエクスポートします。

処理を行う前に SiteScope を停止することをお勧めします。

**注:** データをエクスポートする前に SiteScope サービスを停止し、データのエクスポート後にサービスを再起動する必要があります。詳細については、261 ページ「Solaris および Linux プラットフォームでの SiteScope プロセスの開始と停止」を参照してください。

- ▶ [SiteScope フォルダから] ボックスに表示されている標準設定のディレクトリを受け入れるか、SiteScope インストール・ディレクトリの完全パスを入力します。例えば、表示されたディレクトリ・パスを受け入れたくなく、インストール・ディレクトリのパスが /opt/9\_0/SiteScope である場合は、/opt/9\_0/SiteScope と入力します。
- ▶ [ファイル名] に、ユーザ・データ・ファイルをエクスポートする既存のディレクトリ、およびエクスポートしたユーザ・データ・ファイルの名前を入力します。この名前は .zip で終わる必要があります。
- ▶ ログ・ファイルもエクスポートする場合は、[ログ ファイルを含める] を選択します。

[次へ] をクリックして、エクスポート操作を完了します。

- 5 [設定のインポート] オプションを選択した場合は、[設定のインポート] 画面が開きます。

#### 設定のインポート

既存の設定ファイルまたは SiteScope インストールから設定データをインポートします。

対象の SiteScope を停止することをお勧めします。

エクスポートされた既存の設定ファイルを使用する  
ファイル

次の SiteScope インストールからインポート  
フォルダ

ログ ファイルを含める

**注：**データをインポートする前に SiteScope サービスを停止し、データのインポート後にサービスを再起動する必要があります。詳細については、261 ページ「Solaris および Linux プラットフォームでの SiteScope プロセスの開始と停止」を参照してください。

- ▶ [エクスポートされた既存の設定ファイルを使用する] を選択した場合は、インポートするユーザ・データの名前を入力します。
- ▶ [次の SiteScope インストールからインポート] を選択した場合は、ユーザ・データ・ファイルをインポートする SiteScope インストール・ディレクトリを入力します。
- ▶ ログ・ファイルもインポートする場合は、[ログ ファイルを含める] を選択します。

[次へ] をクリックして、インポート操作を完了します。



- 6 [HP Operations Agent] オプションを選択した場合は、[HP Operations Agent] 画面が開きます。

### HP Operations Agent

HP Operations Agent のインストール/アンインストール

HP Operations Agent は、SiteScope イベントと測定値データを HP Operations Manager および BSM に統合する必要があります。エージェントは、イベントを送信して、HP Operations Manager および BSM アプリケーションで利用可能な測定値データのデータ ストレージとして機能します。

HP Operations Agent のインストール

HP Operations Agent のアンインストール

- ▶ **HP Operations Agent をインストールする** : SiteScope サーバに HP Operations Agent をインストールする場合に選択します。SiteScope が HP Operations Manager または BSM サーバと統合されている場合に、イベントを送信し、測定値データのデータ・ストレージとして機能するように SiteScope を設定するには、このエージェントが必要になります。
- ▶ **HP Operations Agent のアンインストール** : SiteScope サーバから HP Operations Agent をアンインストールする場合に選択します。

[次へ] をクリックして、インストールおよびアンインストール操作を完了します。

---

**注** : HP Operations Agent がすでにインストールされているマシンにこのエージェントをインストールすると、SiteScope は現在のエージェントをアップグレードして上書きします。

---

- 7 [サマリ] 画面が開きます。

### サマリ

設定が完了しました

設定が完了しました

[完了] をクリックして、ウィザードを閉じます。

## コンソール・モードでの Solaris または Linux での設定ツールの実行

設定ツールは、コマンド・ラインまたはコンソール・モードを使用して実行できます。SiteScope をリモート・サーバに設定する場合、または、ユーザ・インタフェースを使用できない何らかの理由がある場合は、このオプションを使用します。

**コンソール・モードでの Solaris または Linux での設定ツールを実行するには、次の手順で行います。**

- 1 次のコマンドを実行します。

```
/bin/config_tool.sh -i console
```

- 2 設定選択画面が表示されます。

```
sh-3.2# ./config_tool.sh -i console
このウィザードを使用すると、SiteScope へ割り当てられたポートの変更、
ある SiteScope から別の SiteScope への設定データの移動、HP Operations エージェント/アンインストールが可能となります。

実行するアクションを選択してください。
-----
次のオプションのいずれかを選択してください

->1 - エクスポート: ()
   2 - インポート: ()
   3 - ポートの変更: ()
   4 - HP Operations Agent: ()

: █
```

実行する設定アクションを選択します。

- ▶ SiteScope データをエクスポートするには、1 を入力します。
- ▶ エクスポートされた設定データ (.zip) ファイル、または既存の SiteScope インストールから設定データをインポートするには、2 を入力します。
- ▶ SiteScope サーバで使用するポートを変更するには、3 を入力します。
- ▶ HP Operations Agent をインストールまたはアンインストールするには、4 を入力します。

ENTER キーを押して続行します。

- 3 [エクスポート] オプションを選択した場合は、設定のエクスポート画面が開きます。

```

次のオプションのいずれかを選択してください

->1 - エクスポート : ()
   2 - インポート : ()
   3 - ポートの変更 : ()
   4 - HP Operations Agent : ()

: 1
-----
SiteScope ソース フォルダ
フォルダ名 []
PRESS <1> to accept the value [], or <2> to change the value
2
フォルダ名:
/opt/HP/SiteScope
フォルダ名 [/opt/HP/SiteScope]:
PRESS <1> to accept the value [/opt/HP/SiteScope], or <2> to change the value
1
-----
エクスポートされた設定対象ファイル名
ファイル名 [SiteScope.zip]
PRESS <1> to accept the value [SiteScope.zip], or <2> to change the value
1
設定が完了しました

```

- ▶ **SiteScope ソース・フォルダ** では、次の操作を実行します。
  - ▶ [] で指定されたデフォルト・ディレクトリを受け入れるには、1 を入力します。
  - ▶ デフォルトの値を変更するには、2 を入力し、SiteScope インストール・ディレクトリのフル・パスを入力します。たとえば、表示されたディレクトリ・パスを受け入れず、インストール・ディレクトリのパスが /opt/HP/SiteScope である場合は、/opt/HP/SiteScope と入力します。

ENTER キーを押して、インストールを続行します。

- ▶ **エクスポートされた設定対象ファイル名** では、次の操作を実行します。
  - ▶ **SiteScope.zip** というファイルにデータをエクスポートするには、1 を入力します。
  - ▶ エクスポートされるユーザ・データ・ファイルの名前を変更するには、2 を入力します。この名前は .zip で終わる必要があります。

ENTER キーを押して、エクスポート操作を完了します。

4 [インポート] オプションを選択した場合は、設定のインポート画面が開きます。

```
-----
次のオプションのいずれかを選択してください
->1 - エクスポート : ( )
   2 - インポート : ( )
   3 - ポートの変更 : ( )
   4 - HP Operations Agent : ( )

: 2
-----
既存の設定ファイルまたは SiteScope インストールから設定データをインポートします
->1 - インポートしません : ( )
   2 - ファイルからインポートします : ( )
   3 - フォルダからインポートします : ( )

: 2
-----
インポートされた設定ファイルの名前を入力してください
ファイル名 [ ]
PRESS <1> to accept the value [ ], or <2> to change the value
2
ファイル名:
SiteScope.zip
ファイル名 [SiteScope.zip]:
PRESS <1> to accept the value [SiteScope.zip], or <2> to change the value

1
設定が完了しました
```

次のように設定データ・オプションを選択します。

- ▶ 設定データをインポートしない場合は、1 を入力します。
- ▶ ファイルから設定データをインポートするには、2 を入力します。このオプションを選択した場合は、次の操作を実行します。
  - ▶ [ ] で指定されたデフォルトのファイル名を受け入れるには、1 を入力します。
  - ▶ この値を変更するには、2 を入力し、設定データをインポートするファイルの名前を入力します。この名前を受け入れるには、1 を入力します。

- ▶ SiteScope インストール・ディレクトリから設定データをインポートするには、**3** を入力します。このオプションを選択した場合は、次の操作を実行します。
- ▶ [] で指定されたデフォルト・ディレクトリを受け入れるには、**1** を入力します。
- ▶ この値を変更するには、**2** を入力し、ユーザ・データ・ファイルをインポートする SiteScope インストール・ディレクトリを入力します。この名前を受け入れるには、**1** を入力します。

ENTER キーを押して、インポート操作を完了します。

5 [ポートの変更] オプションを選択した場合は、ポートの変更画面が開きます。

```
: 3
-----
SiteScope ユーザ インタフェース ポート
ポート [8080]
PRESS <1> to accept the value [8080], or <2> to change the value
1
-----
Tomcat シャットダウン ポート
ポート [28005]
PRESS <1> to accept the value [28005], or <2> to change the value
1
-----
Tomcat AJP コネクタ ポート
ポート [28009]
PRESS <1> to accept the value [28009], or <2> to change the value
1
-----
SSL ポート
ポート [8443]
PRESS <1> to accept the value [8443], or <2> to change the value
1
-----
JMX コンソール ポート
ポート [28006]
PRESS <1> to accept the value [28006], or <2> to change the value
1
-----
従来のユーザ インタフェース ポート
ポート [8888]
PRESS <1> to accept the value [8888], or <2> to change the value
1
-----
従来のユーザ インタフェース (安全) ポート
ポート []
PRESS <1> to accept the value [], or <2> to change the value
1
設定が完了しました
```

必要に応じて、SiteScope サーバで使用されるポートを変更します。ポート番号には、1 ~ 65534 の数字を指定する必要があります。従来のユーザ・インタフェースを除くすべてのコンポーネントで、ポートは必須です。

---

**注：**ほかの Business Service Management 製品で使用されるポートの妨げとならないように、28000 ~ 28100 のポートを使用することをお勧めします。

---

ENTER キーを押して、ポート変更操作を完了します。

- 6 [HP Operations Agent]** オプションを選択した場合は、HP Operations Agent 画面が開きます。

```
次のオプションのいずれかを選択してください
->1 - エクスポート: ()
   2 - インポート: ()
   3 - ポートの変更: ()
   4 - HP Operations Agent: ()
: 4
-----
次のオプションのいずれかを選択してください
->1 - HP Operation Agent のインストール: ()
   2 - HP Operation Agent のアンインストール: ()
: 1
-----
HP Operations Agent のインストール
->1 - インストールしないでください: ()
   2 - インストール: ()
: 2
設定が完了しました
```

次のオプションのいずれかを使用します。

- ▶ SiteScope サーバに HP Operations Agent をインストールする場合には、1 を入力します。SiteScope が HP Operations Manager または BSM ゲートウェイ・サーバと統合されている場合に、イベントを送信し、測定値データのデータ・ストレージとして機能するように SiteScope を設定するには、このエージェントが必要になります。
- ▶ SiteScope サーバから HP Operations Agent をアンインストールするには、2 を入力します。

---

**注 :** HP Operations Agent がすでにインストールされているマシンにこのエージェントをインストールすると、SiteScope は現在のエージェントをアップグレードして上書きします。

---

ENTER キーを押して、HP Operations Agent のインストールまたはアンインストール操作を完了します。

---

**注 :** SiteScope 64 ビット・バージョンは SiteScope 32 ビット・バージョンの最大 3 倍メモリを消費します。したがって、SiteScope 64 ビット・バージョンを使用している場合には、サーバで JVM ヒープ・サイズを手動で増やす必要があります。

- 1). 編集用に **SiteScope/bin/start-service** ファイルを開きます。
  - 2). 最後の行で、パラメータ **-Xmx512m** を必要に応じて **-Xmx2048m** 以上の値 (2GB の場合) に、最大 **-Xmx8192m** (8GB の場合) に増やします。
-



# 11

---

## SiteScope のサイズ設定

### 本章の内容

- ▶ SiteScope のサイズ設定について (177 ページ)
- ▶ SiteScope キャパシティ・カリキュレータ (178 ページ)
- ▶ Windows プラットフォーム上での SiteScope のサイズ設定 (181 ページ)
- ▶ Solaris および Linux プラットフォーム上での SiteScope のサイズ設定 (185 ページ)
- ▶ トラブルシューティングおよび制限事項 (190 ページ)

### SiteScope のサイズ設定について

標準の SiteScope 設定では何千ものモニタを実行できますが、最適なパフォーマンスを得るには SiteScope がインストールされているサーバのサイズ設定が必要となる場合があります。設定はそれぞれ異なるため、SiteScope キャパシティ・カリキュレータを使用し、運用している SiteScope の設定がサイズ設定を必要としているかどうかを検証する必要があります。

SiteScope が稼動するサーバのサイズを正しく設定することが、監視のデプロイメントに成功する基礎となります。最適なサイズ設定を行うために、HP は次の SiteScope サーバ環境を強くお勧めします。

- ▶ SiteScope をスタンドアロン・サーバとして実行する。最良の結果を得るには、サーバ上で実行するプログラムを SiteScope のみにします。Business Service Management, BMC, LoadRunner, データベース, Web サーバなどは、SiteScope サーバにインストールしないようにしてください。
- ▶ SiteScope の 1 つのインスタンスのみを 1 つのサーバ上で実行します。1 つのサーバ上で SiteScope の複数のインスタンスを実行すると、サーバ・リソースの問題が発生する可能性があります。これには、System Health で使用される SiteScope のインスタンスが含まれます。

- ▶ SiteScope Failover には、プライマリ SiteScope サーバと同様のサイズ設定が必要です。

## SiteScope キャパシティ・カリキュレータ

SiteScope には、システムの動作を予測し、SiteScope のキャパシティ・プランニングを実行するためのツールが備わっています。SiteScope を実行しているシステムの CPU とメモリの詳細、タイプ別のモニタ数、モニタの実行頻度を入力します。この入力が終わると、モニタ タイプごとの予測される CPU 使用率とメモリ使用率、特定の作業負荷に推奨されるシステム要件などがカリキュレータによって表示されます。この情報から、設定にチューニングが必要かどうかを判断できます。

---

**注：** SiteScope キャパシティ・カリキュレータは Windows 版で実行されている SiteScope のみでサポートされ、180 ページ「サポートされるモニタとソリューション・テンプレート」にリストされるモニタおよびソリューション・テンプレートに対応します。

---

**SiteScope キャパシティ・カリキュレータを使用するには、次の手順で行います。**

- 1 カリキュレータを使用する前に、SiteScope サーバでの負荷を見積もり、ハードウェア要件を判断するために本書のシステム要件と推奨事項を使用します。  
詳細については、69 ページ「システム要件」および 77 ページ「認定されている構成」を参照してください。
- 2 次から利用可能な SiteScope キャパシティ・カリキュレータを開きます。  
SiteScope インストール・フォルダ：< SiteScope ルート・ディレクトリ > %tools%\SiteScopeCapacityCalculator.xls
  - ▶ HP ソフトウェア・サポート サイトの製品マニュアル・ページ（製品 SiteScope, 製品バージョン 11.20）。
- 3 SiteScope がインストールされているオペレーティング・システム (32 または 64 ビット) に対応する [Monitor Usage] タブを選択します。
- 4 [Requirements] セクションで、次の情報を入力します。

- ▶ 平均 CPU 使用率
  - ▶ CPU タイプ
  - ▶ メモリ・ヒープ・サイズ (メガバイト単位)
  - ▶ 64 ビットのインストールの場合, SiteScope が BSM と統合されている場合は TRUE を選択し, スタンドアロン SiteScope 場合は FALSE を選択します。
- 5** [Monitors] セクションで, 各タイプのモニタの数と, 各モニタの更新頻度を入力します。
- 6** 結果と推奨事項が [Results and Recommendations] セクションに表示されます。予期された結果と実際の結果の 30 ~ 40% の相違は許容範囲とみなします。

## サポートされるモニタとソリューション・テンプレート

SiteScope キャパシティ・カリキュレータでは、次のモニタとソリューション・テンプレートがサポートされます。

<p><b>モニタ</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>▶ CPU</li> <li>▶ データベース・カウンタ</li> <li>▶ データベース・クエリ (64 ビットのみ)</li> <li>▶ ディレクトリ・モニタ (64 ビットのみ)</li> <li>▶ ディスク領域</li> <li>▶ DNS モニタ</li> <li>▶ ファイル・モニタ (64 ビットのみ)</li> <li>▶ JMX モニタ (64 ビットのみ)</li> <li>▶ ログ・ファイル・モニタ (32 ビットのみ)</li> <li>▶ メモリ・モニタ</li> <li>▶ Microsoft IIS サーバ・モニタ</li> <li>▶ Microsoft SQL Server モニタ (32 ビットのみ)</li> <li>▶ Microsoft Windows イベント・ログ・モニタ (32 ビットのみ)</li> <li>▶ Microsoft Windows リソース モニタ</li> <li>▶ Ping モニタ</li> <li>▶ SAP CCMS モニタ (32 ビットのみ)</li> <li>▶ サービス・モニタ</li> <li>▶ Siebel アプリケーション・サーバ・モニタ (32 ビットのみ)</li> <li>▶ MIB による SNMP モニタ</li> <li>▶ UNIX リソース・モニタ (64 ビットのみ)</li> <li>▶ URL モニタ</li> <li>▶ URL リスト・モニタ (64 ビットのみ)</li> <li>▶ WebLogic アプリケーション・サーバ・モニタ (32 ビットのみ)</li> <li>▶ Web サービス・モニタ (64 ビットのみ)</li> <li>▶ WebSphere アプリケーション・サーバ・モニタ (32 ビットのみ)</li> </ul>
<p><b>ソリューション・テンプレート</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>▶ Microsoft Exchange 2003 ソリューション・テンプレート (32 ビットのみ)</li> <li>▶ Siebel ソリューション・テンプレート (32 ビットのみ)</li> </ul>

## Windows プラットフォーム上での SiteScope のサイズ設定

Windows プラットフォームにインストールされている SiteScope のサイズ設定を行う場合は、SiteScope と Windows オペレーティング・システムで次のサイズ設定手順を実行する必要があります。

### 1 SiteScope をサイズ設定します。

最初に SiteScope をサイズ設定し、次の手順に進む前に少なくとも 24 時間 SiteScope を実行することをお勧めします。詳細については、182 ページ「SiteScope のサイズ設定」の手順を参照してください。

### 2 Windows オペレーティング・システムのチューニング

SiteScope をサイズ設定して少なくとも 24 時間待機したら、Windows オペレーティング・システムのチューニングを行い、その後、サイズ設定パラメータの変更を有効にするために SiteScope サーバを再起動する必要があります。詳細については、183 ページ「Microsoft Windows オペレーティング・システムのチューニング」の手順を参照してください。

### 3 一般的な保守の推奨事項

また、いくつかの一般的な保守の推奨事項に従って、最適なチューニングを行ってください。詳細については、184 ページ「一般的な保守の推奨事項」を参照してください。

---

#### 注意：

- ▶ 変更するすべてのファイルまたはパラメータのバックアップを行い、必要に応じてバックアップから復元できるようにしておくことをお勧めします。
  - ▶ 設定に効果がない場合、ファイルやパラメータをむやみに増やしたり減らしたりしないでください。詳細やトラブルシューティングについては、HP ソフトウェア・サポートにお問い合わせください。
-

## SiteScope のサイズ設定

SiteScope のサイズ設定では、本当に必要な場合にだけ、モニタが **[エラーを検証]** オプションを使用することを確認する必要があります。このオプションはごくわずかのモニタに使用されなければならない、それらは、監視対象のリモート・マシンのネットワーク問題やサーバ負荷の問題によって、誤った「**データなし**」警告を受けた履歴を持つモニタなどです。

この機能を有効にすると、失敗したモニタは、警告条件がチェックされる前にスケジューラをバイパスしてすぐに再実行されます。このような特別な実行が多数発生すると、スケジューラが大きく混乱し、SiteScope のパフォーマンスを低下させる可能性があります。接続の問題によるモニタの失敗では、そのモニタが終了する前、エラーの検証には **[接続タイムアウト]** に設定されている時間がかかる場合があります。この間、標準設定では、モニタ・スレッドと接続が 2 分間ロックされます。この遅延により、ほかのモニタの待機や、失敗したモニタのスキップが発生することがあります。

**SiteScope をサイズ設定するには、次の手順を実行します。**

- 1 モニタごとに、**[プロパティ]** タブを選択して **[モニタの実行設定]** パネルを開き、**[エラーを検証]** が選択されているかどうかを調べます。このオプションが必要でないモニタでは、チェック・ボックスをクリアします。

---

**ヒント:** 複数のモニタの場合、**[グローバル検索と置換]** を使用してこのタスクを実行することをお勧めします。

---

- 2 Windows オペレーティング・システムのチューニングを行う前に、少なくとも 24 時間 SiteScope を実行します。

## Microsoft Windows オペレーティング・システムのチューニング

Microsoft Windows オペレーティング・システムのチューニングでは、設定ツールを使用していくつかのパラメータを変更する必要があります。また、いくつかの一般的な保守の推奨事項に従って、最適なチューニングを行ってください。

**Microsoft Windows オペレーティング・システムのチューニングは、次の手順で行います。**

- 1 必要に応じて、次の Hotfix が SiteScope サーバにインストールされていることを確認します。
  - ▶ Windows XP の場合、Hotfix 327699 がインストールされている必要があります。Windows XP でのファイル・ハンドルの増加と Hotfix のダウンロードに関する詳細については、<http://support.microsoft.com/kb/327699/en-us> (英語サイト) を参照してください。
- 2 設定ツールを実行し、**[サイズ変更]** オプションを選択します。

このツールにより、JVM ヒープ・サイズを 1024 MB、デスクトップ・ヒープ・サイズを 2048 KB、ファイル・ハンドルの数を 18,000 に増やします。また、SiteScope の実行可能ファイルに対する警告ポップアップを無効にします。詳細については、155 ページ「Windows プラットフォームでの設定ツールの実行」を参照してください。

---

**注：**設定ツールでサポートされるのは、標準設定の SiteScope サービス名だけです。サービス名を変更した場合は、設定ツールを実行せず、HP ソフトウェア・サポートにお問い合わせください。

---

- 3 パラメータの変更を反映させるために、SiteScope サーバを再起動します。

## 一般的な保守の推奨事項

次に、Windows 上の SiteScope をサイズ設定するための一般的な保守の推奨事項について説明します。

### ▶ 適切なモニタ頻度を決定する。

モニタの実行頻度を確認し、モニタが適切な間隔で実行されていることを確認します。たとえば、ほとんどのディスク・モニタは 5 分間隔で実行する必要はありません。通常は、おそらく /var、/tmp、および swap 以外のすべてのボリュームについては、15 分、30 分、または 60 分間隔が適切です。モニタ頻度を小さくすることで 1 分間に稼動するモニタの数が少なくなり、パフォーマンスと処理能力が改善されます。

### ▶ グループ構造を最適化する。

グループ構造には、SiteScope の使いやすさと SiteScope のパフォーマンスの最適化を考慮してください。構造の深さを最小限に抑えるように、トップレベルのグループの数も最小限に抑えるのが理想的です。

グループ構造に 50 を超えるトップレベルのグループがある場合、またはグループ構造が 5 階層より深い場合、パフォーマンスが低下する可能性があります。

### ▶ SiteScope 設定エラーを解決する。

状況モニタを使用して、モニタ設定のエラーを解決します。エラーが少数でも、パフォーマンスや安定性の低下につながる可能性があります。これらのエラーを解決する方法については、HP ソフトウェア・サポートにお問い合わせください。

### ▶ SiteScope サーバの物理的な位置を計画する。

SiteScope サーバは、ローカル・ネットワーク上でその監視対象マシンにできるだけ近い場所に設置することをお勧めします。十分な容量があり遅延の低い接続環境では許容可能な場合がありますが、WAN 接続を経由して監視することはお勧めしません。



## Solaris および Linux プラットフォーム上での SiteScope のサイズ設定

Solaris および Linux オペレーティング・システム上で SiteScope のサイズ設定を行うと、いくつかのパラメータが変更されます。また、いくつかの一般的な保守の推奨事項に従って、最適なチューニングを行ってください。

### 1 オペレーティング・システムのチューニング

SiteScope インスタンス用の適切な数のスレッドを設定し、Solaris または Linux オペレーティング・システム・パラメータを設定します。詳細については、185 ページ「オペレーティング・システムのチューニング」の手順を参照してください。

### 2 Java 仮想マシンのチューニング

JVM ヒープ・サイズとスレッド・スタック・サイズを設定し、パラレル・ガベージ・コレクションを実装します。詳細については、187 ページ「Java Virtual Machine のチューニング」の手順を参照してください。

### 3 一般的な保守の推奨事項

また、いくつかの一般的な保守の推奨事項に従って、最適なチューニングを行ってください。詳細については、188 ページ「一般的な保守の推奨事項」を参照してください。

## オペレーティング・システムのチューニング

オペレーティング・システムのチューニングでは、SiteScope インスタンス用の適切な数のモニタと、Solaris または Linux オペレーティング・システムのパラメータを設定する必要があります。

### 実行中モニタの最大数の設定

[**実行中モニタの最大数**] 設定は、[**プリファレンス**] > [**インフラストラクチャプリファレンス**] > [**サーバ設定**] で行えます。詳細については、SiteScope ヘルプで『SiteScope の使用』の「プリファレンス」セクションを参照してください。

### Solaris または Linux オペレーティング・システム・パラメータの設定

Solaris または Linux オペレーティング・システムは大量のスレッドをサポートできます。この機能を有効にするには、SiteScope サーバで次の手順で行います。

Solaris または Linux オペレーティング・システム・パラメータを設定するには、次の手順で行います。

**1 カーネル・ファイル記述子の制限を変更します。**

- a** /etc/system ファイルを編集して次の行を追加します。

```
set rlim_fd_max=8192
```

---

**注：**標準設定は 1024 です (この制限はユーザのルートには適用されません)。値「8192」は、SiteScope の最大のインスタンスにも対応します。小さな値を試すより、この大きな値を使用してください。これにより、小さな値で不十分だった場合に、マシンを再起動する必要がなくなります。

---

- b** サーバを再起動します。

**2 ユーザのランタイムの制限を変更します。**

- a** < SiteScope のルート・ディレクトリ > %bin ディレクトリで、SiteScope スタートアップ・スクリプト、start-monitor および start-service に次の行を追加します。

```
ulimit -n 8192
```

- b** 次のパラメータが次の最小値であることを確認します。詳細については、UNIX システム管理者にお問い合わせください。

パラメータ	最小値
コア・ファイル・サイズ (ブロック)	制限なし
データ・セグメント・サイズ (キロバイト)	制限なし
ファイル・サイズ (ブロック)	制限なし
開くファイル数	8192
パイプ・サイズ (512 バイト)	10
スタック・サイズ (キロバイト)	8192
CPU 時間 (秒)	制限なし
最大ユーザ・プロセス数	8192
仮想メモリ (キロバイト)	制限なし

ランタイムの制限の変更後に、SiteScope アプリケーションまたはサーバを再起動する必要はありません。

## Java Virtual Machine のチューニング

最適なパフォーマンスを得るために JVM を設定する必要があります。

JVM を設定するには、次の手順で行います。

### 1 ヒープ領域を増やします。

標準設定では、SiteScope の Java のヒープ領域は 512 MB に設定されています。これは大量インスタンスの通常運用には不十分です。

Java ヒープ領域は、**< SiteScope のルート・ディレクトリ > %bin** ディレクトリで **start-service** スクリプトと **start-monitor** スクリプトを変更することで、1024 MB（これは負荷が大きい場合に推奨されるヒープ・サイズ）まで増やせます。

### 2 スレッド・スタック・サイズ (-Xss) を減らします。

SiteScope によって作成された各スレッドは、-Xss で割り当てられているメモリ量を使用してスタックをインスタンス化します。標準設定の UNIX JRE の最大スレッド・スタック・サイズ、-Xss は、スレッドごとに 512 KB メモリです。

**< SiteScope のルート・ディレクトリ > %bin%start-monitor** の Java コマンド・ラインに指定されていない場合、標準設定の最大スレッド・スタック・サイズが使用されます。標準設定のサイズは、使用できるメモリを超過することによって、スレッドの数を制限できます。

4000 以上のモニタから成るインスタンスは、128 KB の -Xss を利用できます。

## 一般的な保守の推奨事項

Linux プラットフォームで SiteScope のサイズ設定を行うには、一般的な保守の推奨事項があります。

### ▶ 状況モニタを使用する。

可能な限り、特にリモート UNIX 接続を使用するすべてのモニタで、**[依存対象]** で状況モニタを利用します。状況モニタにより、複数のマシンが使用不能になった場合や SSH 接続スレッドがロックされた場合に、それを検出することでサーバのパフォーマンスの低下を防ぐことができます。

### ▶ エラーを検証する機能の使用を最小限に抑える。

**[モニタの実行設定]** パネルで **[エラーを検証]** オプションを有効にすると、停止したモニタは、警告条件がチェックされる前にスケジューラをバイパスしてすぐに再実行されます。このような特別な実行が多数発生すると、スケジューラが大きく混乱し、SiteScope のパフォーマンスを低下させる可能性があります。接続の問題によるモニタの失敗では、そのモニタが終了する前、エラーの検証には **[接続タイムアウト]** に設定されている時間がかかる場合があります。この間、標準設定では、モニタ・スレッドと接続が 2 分間ロックされます。この遅延により、ほかのモニタの待機や、失敗したモニタのスキップが発生することがあります。

### ▶ SSH および内部 Java ライブラリを使用する。

SSH 接続方法を使用してリモート・プリファレンスを定義する場合、可能な限り、SSH および内部 Java ライブラリ・オプションを使用します。内部 Java ライブラリは、サードパーティ製の Java ベースの SSH クライアントです。このクライアントにより、Telnet およびホストのオペレーティング・システムの SSH クライアント経由のパフォーマンスやスケーラビリティが大幅に改善されます。このクライアントは、SSH1、SSH2、公開鍵認証などをサポートします。

SSH で、**接続キャッシュの有効化**を設定します。**[最大接続数]**を調整して、特定のサーバに対して稼動するすべてのモニタをタイムリーに実行できるようにする必要があります。

▶ **適切なモニタ頻度を決定する。**

モニタの実行頻度を確認し、モニタが適切な間隔で実行されていることを確認します。たとえば、ほとんどのディスク・モニタは 5 分間隔で実行する必要はありません。通常は、おそらく `/var`、`/tmp`、および `swap` 以外のすべてのボリュームについては、15 分、30 分、または 60 分間隔が適切です。モニタ頻度を小さくすることで 1 分間に稼動するモニタの数が少なくなり、パフォーマンスと処理能力が改善されます。

▶ **グループ構造を最適化する。**

グループ構造には、SiteScope の使いやすさと SiteScope のパフォーマンスの最適化を考慮してください。構造の深さを最小限に抑えるように、トップレベルのグループの数も最小限に抑えるのが理想的です。

グループ構造に 50 を超えるトップレベルのグループがある場合、またはグループ構造が 5 階層より深い場合、パフォーマンスが低下する可能性があります。

▶ **SiteScope 設定エラーを解決する。**

状況モニタを使用して、モニタ設定のエラーを解決します。エラーが少数でも、パフォーマンスや安定性の低下につながる可能性があります。これらのエラーを解決する方法については、HP ソフトウェア・サポートにお問い合わせください。

▶ **SiteScope サーバの物理的な位置を計画する。**

SiteScope サーバは、ローカル・ネットワーク上でその監視対象マシンにできるだけ近い場所に設置することをお勧めします。WAN や低速ネットワーク・リンクを監視する場合は、通常、ネットワークがボトルネックになります。このため、監視の実行に時間がかかる場合があります。十分な容量があり遅延の低い接続環境では許容可能な場合がありますが、WAN 接続を経由して監視することはお勧めしません。

▶ ローカル・ユーザ・アカウントを使用する。

ローカル・ユーザ・アカウントは、UNIX Remote Authentication の Directory サービス・アカウントに適しています。ローカル・ユーザ・アカウントにより、認証に対する Directory サービス・サーバへの依存を回避します。これによって、認証が迅速に行われ、Directory サービス・サーバがダウンしても接続の失敗を避けることができます。

SiteScope のインスタンスが非常に大量な場合、Directory サービス・サーバのパフォーマンスに悪影響を及ぼす可能性があります。Directory サービス・サーバは監視対象サーバに近い場所に設置することをお勧めします。

## トラブルシューティングおよび制限事項

**問題:** JVM が「スワップ領域不足」エラーでクラッシュする。

以下の方法でスワップ領域不足エラーを検出できます。

- 1 ターゲットの SiteScope サーバで仮想バイト・カウンタを監視するために Microsoft Windows リソース・モニタを作成します。
- 2 次のしきい値に設定します。

32 ビット OS	64 ビット OS
[エラー条件] $\geq 1.9$ GB [警告条件] $\geq 1.8$ GB (このプロセスは値が 2 GB に達するとクラッシュします)	[エラー条件] $\geq 7.9$ GB [警告条件] $\geq 7.8$ GB (このプロセスは値が 8 GB に達するとクラッシュします)

### 解決方法

- 1 JVM ヒープ・サイズを小さくします。JVM ヒープ・サイズの変更についての詳細は、155 ページ「Windows プラットフォームでの設定ツールの実行」を参照してください。
- 2 動作している現在のモニタ数を削減して（[プリファレンス] > [インフラストラクチャ プリファレンス] > [サーバ設定] > [モニタ プロセスの最大数] で）、SiteScope が使用するスレッド数を減らします。

# 12

---

## SiteScope アンインストール

### 本章の内容

- ▶ Windows プラットフォームの SiteScope のアンインストール (191 ページ)
- ▶ Solaris または Linux プラットフォームの SiteScope のアンインストール (196 ページ)

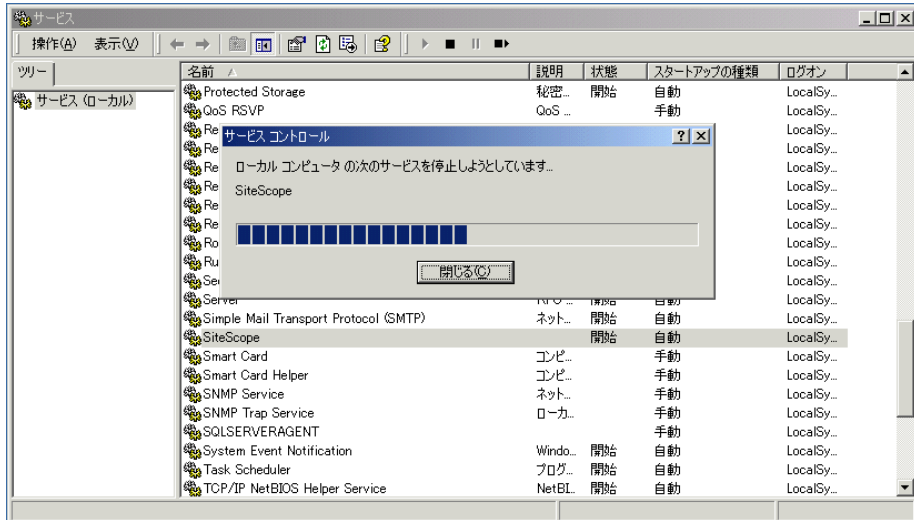
### Windows プラットフォームの SiteScope のアンインストール

サーバ・マシンから SiteScope をアンインストールできます。Windows プラットフォーム上で稼動している SiteScope の場合、SiteScope には、コンピュータから SiteScope ソフトウェアをアンインストールするためのプログラムが含まれています。

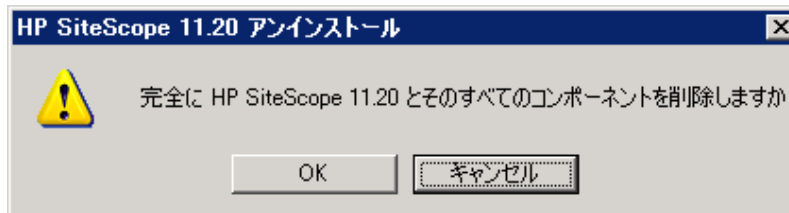
Windows プラットフォームの SiteScope をアンインストールするには、次の手順で行います。

- 1 [スタート] > [すべてのプログラム] > [管理ツール] > [サービス] を選択します。[サービス] ダイアログ・ボックスが開きます。

- サービスの一覧から **SiteScope** サービスを選択します。SiteScope が稼動している場合は、右クリックして操作メニューを表示し、[停止] を選択します。サービスの [状態] に、サービスが停止したことが示されるまで待ってから、[サービス] ウィンドウを閉じます。

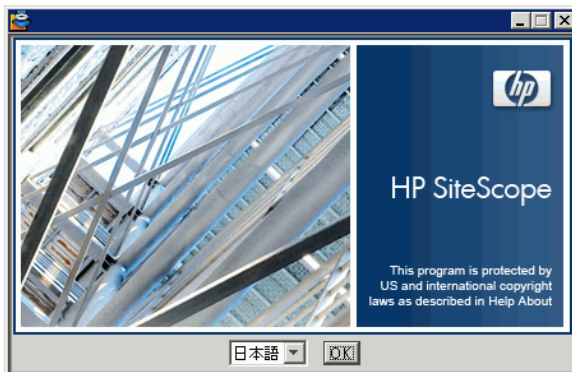


- [スタート] > [すべてのプログラム] > [HP SiteScope] > [HP SiteScope のアンインストール] をクリックして、HP ソフトウェア・インストーラを起動します。
- 次の警告が表示された場合は、[OK] をクリックします。

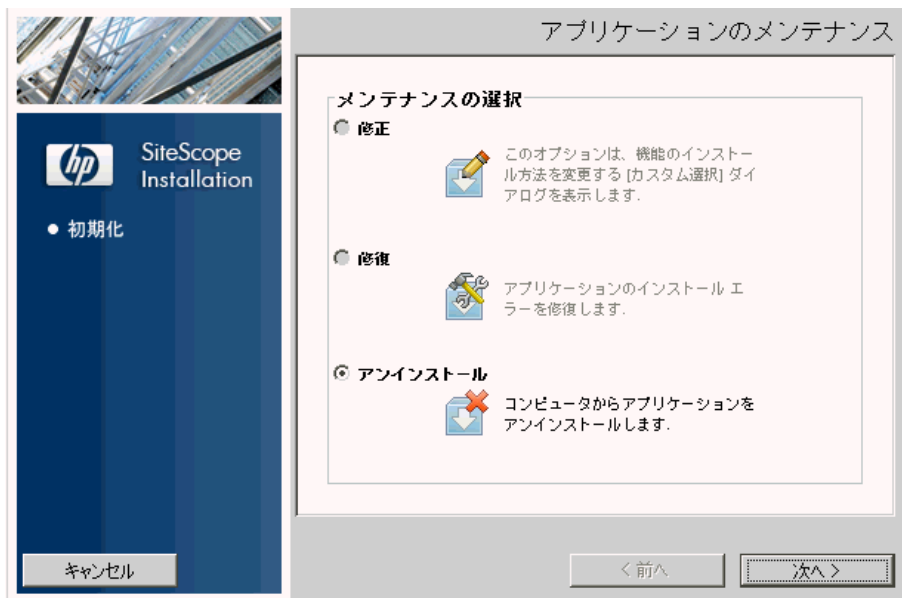




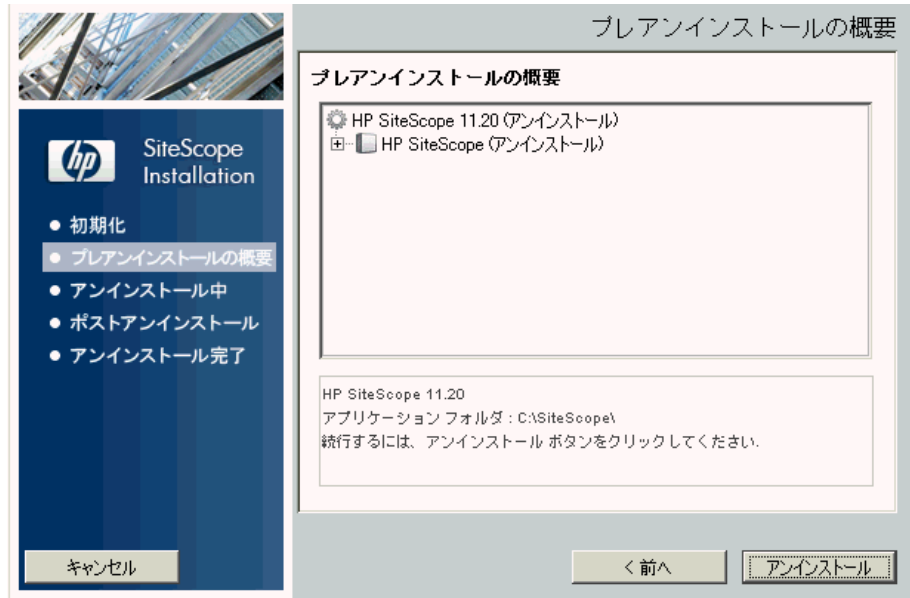
- 5 ロケールの選択画面で、表示言語を選択して [OK] をクリックします。



- 6 アプリケーションのメンテナンス画面で、[アンインストール] を選択し、[次へ] をクリックします。



- 7 [プレアンインストールの概要] 画面で、[アンインストール] をクリックします。



インストーラによって SiteScope ソフトウェア・コンポーネントが選択され、アンインストールが行われます。

- 8 HP SiteScope 設定ウィザードが開きます。HP Operations Agent をアンインストールするかどうかを指定します。[次へ] をクリックします。

アンインストール処理中は、各ソフトウェア・コンポーネントとそのアンインストールの進捗状況が画面に表示されます。

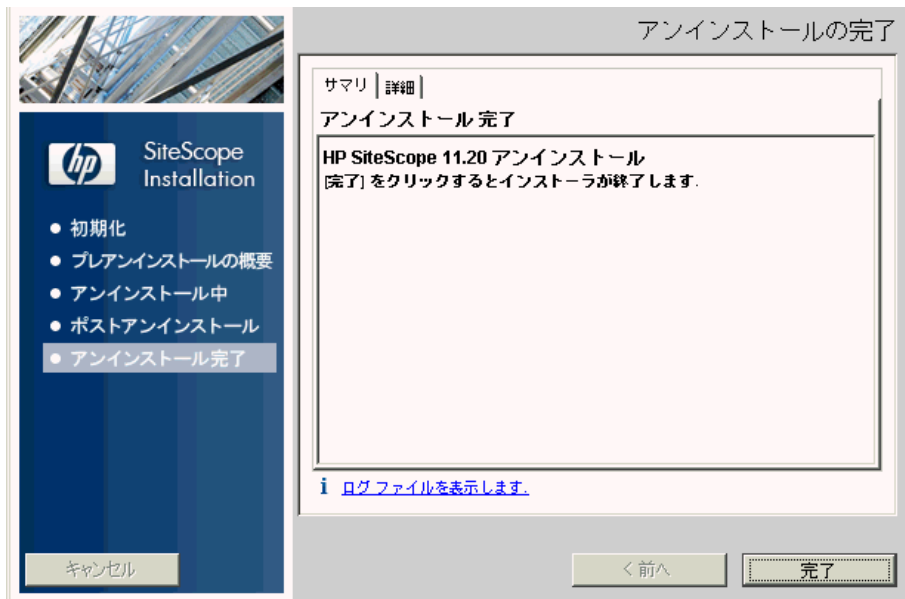
---

**注：** SiteScope が HP Operations Manager と同じマシンにインストールされている場合、SiteScope をアンインストールするとき、HP Operations Agent をアンインストールするオプションをクリアする必要があります。

---

アンインストール・プロセスが完了した時点で [アンインストールの完了] ウィンドウが開かれ、アンインストール・プロセスの概要が表示されます。

- 9 [アンインストール完了] ウィンドウで **[完了]** をクリックし、アンインストール・プログラムを閉じます。



**[ログ ファイルを表示します]** リンクからアンインストール・ログ・ファイルにアクセスし、Web ブラウザで開くことができます。削除されたパッケージの詳細については、**[詳細]** タブをクリックしてください。

- 10 システムを再起動し、変更をシステムに反映させます。再起動しないと、ほかのアプリケーションで予期しない問題が発生することがあります。

## Solaris または Linux プラットフォームの SiteScope のアンインストール

Solaris または Linux プラットフォーム上で稼動している SiteScope の場合、SiteScope には、コンピュータから SiteScope ソフトウェアをアンインストールするためのスクリプトが含まれています。スクリプトを実行できない場合は、SiteScope ファイルおよびディレクトリを手作業で削除します。

**Solaris または Linux プラットフォームの SiteScope をアンインストールするには、次の手順で行います。**

- 1 SiteScope ディレクトリでスクリプトを実行することが許可されているアカウントを使用して、SiteScope が稼動しているマシンにログオンします。通常は、SiteScope を実行しているアカウントを使用します。
- 2 <インストール・パス> /SiteScope ディレクトリに含まれている stop シェル・スクリプトを実行して、SiteScope を停止します。このスクリプトを実行するコマンド・ラインの例を次に示します。

SiteScope/stop

SiteScope が停止したことを示すメッセージが表示されます。

```
$ ./stop
Stopped SiteScope process <6252>
Stopped SiteScope monitoring process <6285>
$
```

- 3 アンインストール・コマンドを実行します。
  - ▶ X Windows モードで作業している場合は、次のコマンドを実行します。  
/opt/HP/SiteScope/installation/bin/uninstall.sh
  - ▶ コンソール・モードで作業している場合は、次のコマンドを実行します。  
/opt/HP/SiteScope/installation/bin/uninstall.sh -i console

- 4 HP ソフトウェア・インストーラが起動します。ロケールを指定し、Enter キーを押します。

```
Preparing to install...
Extracting the JRE from the installer archive...
Unpacking the JRE...
Extracting the installation resources from the installer archive...
Configuring the installer for this system's environment...
Preparing CONSOLE Mode Installation...

=====
Choose Locale...
-----

    1- Deutsch
    ->2- English
    3- Fran?ais

CHOOSE LOCALE BY NUMBER: 2
=====
HP Software Installer
-----

PRESS <ENTER> TO CONTINUE: 2
```

- 5 「1」を入力して ENTER キーを押し、SiteScope をアンインストールすることを確認します。

```
=====
Maintenance Selection
-----

Modify, repair or uninstall the application
If you want to change something on a previous step, type 'back'.
You may cancel this installation at any time by typing 'quit'.

    ->1- Uninstall          Uninstall the application from your computer.

Please select one of the options...: 1
```

- 6 アンインストール・プロセスが開始されます。HP Operations Agent がインストールされている場合は、アンインストールするよう求められます。「2」を入力して ENTER キーを押し、HP Operations Agent をアンインストールします。

```
:-----  
Uninstall HP Operations Agent  
->1 - Do not uninstall: ()  
 2 - Uninstall: ()
```

- 7 パッケージ・アンインストールの状態メッセージが表示され、アンインストールが完了します。

```
=====  
Uninstallation Complete  
-----  
  
The uninstallation has been successfully completed.
```

# 第 IV 部

---

## SiteScope の安全な稼動





# 13

---

## SiteScope プラットフォームのセキュリティ強化

### 本章の内容

- ▶ SiteScope プラットフォームのセキュリティ強化 (201 ページ)
- ▶ SiteScope ユーザ設定の設定 (202 ページ)
- ▶ パスワードの暗号化 (202 ページ)
- ▶ SSL (Secure Socket Layer) を使用した SiteScope へのアクセス (202 ページ)
- ▶ Run-time Service Model にバルク・データを送信するための SiteScope の設定 (203 ページ)

### SiteScope プラットフォームのセキュリティ強化

本章では、SiteScope プラットフォームのセキュリティを強化するために使用できる、いくつかの設定オプションについて説明します。

ネットワークおよびシステムのセキュリティは、ますます重要になっています。SiteScope は、システムの可用性を監視するツールとして、セキュリティで保護する処置が取られていない場合に使用するとシステム・セキュリティを危険にさらす可能性のあるシステム情報にアクセスすることになります。本項に示す設定とセットアップ・オプションを使用して、SiteScope プラットフォームを保護する必要があります。

---

**注意:** 2 種類の SiteScope 製品インタフェースを提供するアクティブな Web サーバが 2 つあります。SiteScope へのすべてのアクセスを制限するには、SiteScope が提供する SiteScope Web サーバおよび Apache Tomcat サーバの両方に適切な設定を適用する必要があります。

---

## SiteScope ユーザ設定の設定

SiteScope ユーザ・プロファイルは、SiteScope インタフェースにアクセスするためにユーザ名およびパスワードが要求された際に使用します。インストール後、SiteScope が稼動しているサーバに HTTP アクセスできるユーザは通常、SiteScope にアクセス可能になります。

標準設定では、SiteScope は 1 つのユーザ・アカウントとともにインストールされ、このアカウントには、標準設定のユーザ名またはパスワードは定義されません。これが管理者アカウントです。製品のインストールおよびアクセス後、このアカウントにユーザ名とパスワードを定義する必要があります。また、ほかのユーザが製品へどのようにアクセスでき、どのアクションを実行できるかを制御するために、ほかのユーザのアカウント・プロファイルを作成することもできます。ユーザ・アカウントの作成の詳細については、SiteScope ヘルプで『SiteScope の使用』の「ユーザ管理プリファレンス」セクションを参照してください。

## パスワードの暗号化

すべての SiteScope パスワードは、TDES (Triple Data Encryption Standard) と呼ばれる方法を使用して暗号化されます。TDES は、2 つまたは 3 つの異なる鍵を使用して、64 ビットのテキスト・ブロックごとに Data Encryption Algorithm を 3 重に適用します。結果として、現実的に妥当な時間内には、未承認のユーザは元のパスワードを復元できなくなります。

## SSL (Secure Socket Layer) を使用した SiteScope へのアクセス

SiteScope は、製品インタフェースへのアクセスを制御するために SSL を使用するように設定できます。このオプションを有効にすると、証明書を使用してユーザを認証することが必要となります。詳細については、233 ページ「SSL を使用するための SiteScope の設定」を参照してください。

## Run-time Service Model にバルク・データを送信するための SiteScope の設定

SiteScope の結果を zip ファイルに圧縮して、または圧縮しないで BSM の Run-time Service Model (RTSM) に送信することができます。この要求には、送信される結果が圧縮された形式であるか圧縮されていない形式であるかを RTSM に指示するパラメータが含まれています。

SiteScope の結果を圧縮された形式で送信するには、次の操作を実行します。

- 1 次のファイルを開きます。<SiteScope ルート・ディレクトリ>  
¥discovery¥discovery\_agent.properties。
- 2 appilog.agent.probe.send.results.zipped で始まる行を見つけます。この行がない場合は、ファイルに追加します。
- 3 この値を =true に変更します。
- 4 SiteScope を再起動します。SiteScope の結果は圧縮されてから RTSM に送信されます。



# 14

## 権限と資格情報

本章では SiteScope モニタの表を示します。各モニタは、対応するプロトコル、モニタへのアクセスに必要なユーザ権限と資格情報、およびその他の注意事項とともに一覧します。

この章の目的は、SiteScope モニタを保護するために必要な権限に関する基本的な情報を提供することです。

モニタ名	プロトコル/ テクノロジー	ユーザ権限と資格情報	注意事項
Amazon Web Services	HTTPS	AWS AccessKey ID, AWS SecretKey	このモニタでは、Amazon から提供された秘密のアクセス・キーを使用します。これらのキーは、Amazon のオフィシャル・サイトのユーザ・プロフィールで入手できます。HTTP 接続は保護されています。
Apache サーバ	HTTP, HTTPS	サーバ統計情報ページへのアクセスに必要な限り、必要ありません。	
BroadVision	独自開発		

モニタ名	プロトコル/ テクノロジー	ユーザ権限と資格情報	注意事項
CheckPoint Firewall-1	SNMP	コミュニティ文字列。	このモニタは SNMP V3 をサポートしないため、コミュニティ文字列はネットワーク経由でプレーン・テキストとして渡されます。対象の SNMP エージェントは、コミュニティ文字列が MIB のサブセットの読み取りのみに使用できるように設定されます。そのような設定を行うと、未承認の人物がコミュニティ文字列を取得した場合、その人物が行えるのはエージェントの OID を読み取ることだけになります（設定はできません）。

モニタ名	プロトコル/ テクノロジー	ユーザ権限と資格情報	注意事項
Cisco Works	SNMP	SNMP のバージョンに応じて、コミュニティ文字列またはユーザ名とパスワード。	<p>このモニタに対する最も安全な設定は、認証 (SHA または MD5) と DES の非公開暗号を使う、SNMP V3 の使用が設定されているエージェントに対して実行することです。この設定では、暗号化されていない SNMP データはネットワーク経由では渡されません。これにより、悪意のあるユーザが監視対象のデバイスを危険にさらす可能性を大きく低減します。監視対象デバイスの SNMP エージェントの実装バグによるセキュリティ上の脆弱性は考慮されていません。</p> <p>このモニタに対する最も危険な設定は、監視対象デバイスのエージェントによって実装された MIB 全体に対する読み取りおよび書き込みの両方のアクセス権を持つコミュニティ文字列を使う SNMP V1 を使用することです。この設定では、悪意のあるユーザがネットワーク上で盗聴することによってコミュニティ文字列を取得し、それを使用してデバイスを再設定することができます。</p>

第 14 章 • 権限と資格情報

モニタ名	プロトコル/ テクノロジー	ユーザ権限と資格情報	注意事項
Citrix サーバ	NetBIOS, WMI	Windows のパフォーマンス・オブジェクトを監視するには、231 ページ「Windows のパフォーマンス・オブジェクトの監視」に説明されている特定のアクセス権限が必要です。	231 ページ「Windows のパフォーマンス・オブジェクトの監視」の注意事項を参照してください。
ColdFusion	NetBIOS, WMI	Windows のパフォーマンス・オブジェクトを監視するには、231 ページ「Windows のパフォーマンス・オブジェクトの監視」に説明されている特定のアクセス権限が必要です。	231 ページ「Windows のパフォーマンス・オブジェクトの監視」の注意事項を参照してください。
COM+	HTTP, HTTPS		



モニタ名	プロトコル/ テクノロジー	ユーザ権限と資格情報	注意事項
CPU (Windows)	NetBIOS, WMI	Windows のパフォーマンス・オブジェクトを監視するには、231 ページ「Windows のパフォーマンス・オブジェクトの監視」に説明されている特定のアクセス権限が必要です。	<p>SiteScope が動作するサーバを Active Directory の Domain Admin グループに追加します (Windows 2000 以降の場合)。このオプションでは、SiteScope サービスは、ローカル・システム・アカウントとしてログインするように設定されますが、SiteScope が実行されているマシンは、ドメイン管理権限のあるグループに追加されます。</p> <p>非管理者アクセスを許可するように、ドメイン内のすべてのマシンのレジストリ・アクセス権を編集します。非管理者ユーザが perfmon を使用してリモートでマシンを監視できるようにする方法については、Microsoft サポート技術情報の記事 <a href="http://support.microsoft.com/kb/164018/ja-jp">http://support.microsoft.com/kb/164018/ja-jp</a> を参照してください。このオプションを使用するには、監視する各リモート・マシンでレジストリを変更する必要があります。したがって、ドメインのサーバ・リストにドメインのすべてのマシンが含まれていても、接続プロファイルなしで監視できるのは、レジストリが変更されたりリモート・マシンのみです。</p>

モニタ名	プロトコル/ テクノロジー	ユーザ権限と資格情報	注意事項
CPU (Solaris/ Linux)	Telnet, SSH, rlogin	リモート・サーバにはシェル・アクセスが必要です。また、ログイン・ユーザには、特定の実行ファイル・プログラムを実行する権限も必要です。	SiteScope が実行するコマンドに UNIX グループ権限を使用することにより、ログイン・ユーザのアクセスを制限できます。個々のオペレーティング・システムに関連するコマンドの一覧は、 <b>templates.os</b> ファイルにあります。
データベース・カウンタ	JDBC	特定のデータベースへのアクセスを認証するためにユーザの資格情報が必要です。各データベースには、アクセスが必要な個々のテーブルへのアクセス制御を提供するための特定の方法があります。	ユーザには、指定されたあらゆる SQL ステートメントを実行できる権限が必要です。
ディレクトリ	Shell	リモート・サーバにはシェル・アクセスが必要です。サポートされているアクセス・プロトコルは、 <b>telnet</b> , <b>SSH</b> , および <b>rlogin</b> です。また、ログイン・ユーザには、特定の実行ファイル・プログラムを実行する権限も必要です。	SiteScope が実行するコマンドに UNIX グループ権限を使用することにより、ログイン・ユーザのアクセスを制限できます。個々のオペレーティング・システムに関連するコマンドの一覧は、 <b>templates.os</b> ファイルにあります。
ディレクトリ (Windows)	NetBIOS	読み取り専用ファイル・システム・アクセス。	特定のファイルに対する権限は、オペレーティング・システム・レベルで制御できます。
ディレクトリ (Solaris/ Linux)	Telnet, SSH, rlogin	個々のファイルに対する読み取り専用ファイル・システム・アクセス。	特定のファイルに対する権限は、オペレーティング・システム・レベルで制御できます。

モニタ名	プロトコル/ テクノロジー	ユーザ権限と資格情報	注意事項
ディスク領域 (Windows)	NetBIOS, WMI	Windows のパフォーマンス・オブジェクトを監視するには、231 ページ「Windows のパフォーマンス・オブジェクトの監視」に説明されている特定のアクセス権限が必要です。	Windows 2000 の場合、ディスク・カウンタは <b>perfex</b> で有効になっている必要があります。
ディスク領域 (Solaris/ Linux)	Telnet, SSH, rlogin	リモート・サーバにはシェル・アクセスが必要です。また、ログイン・ユーザには、特定の実行ファイル・プログラムを実行する権限も必要です。	SiteScope が実行するコマンドに UNIX グループ権限を使用することにより、ログイン・ユーザのアクセスを制限できます。個々のオペレーティング・システムに関連するコマンドの一覧は、 <b>templates.os</b> ファイルにあります。
ダイナミック・ディスク・スペース (Windows)	NetBIOS, WMI	Windows のパフォーマンス・オブジェクトを監視するには、231 ページ「Windows のパフォーマンス・オブジェクトの監視」に説明されている特定のアクセス権限が必要です。	Windows 2000 の場合、ディスク・カウンタは <b>perfex</b> で有効になっている必要があります。

## 第 14 章 • 権限と資格情報

モニタ名	プロトコル/ テクノロジー	ユーザ権限と資格情報	注意事項
ダイナミック・ディスク・スペース (Solaris/Linux)	Telnet, SSH, rlogin	リモート・サーバにはシェル・アクセスが必要です。また、ログイン・ユーザには、特定の実行ファイル・プログラムを実行する権限も必要です。	SiteScope が実行するコマンドに UNIX グループ権限を使用することにより、ログイン・ユーザのアクセスを制限できます。個々のオペレーティング・システムに関連するコマンドの一覧は、 <b>templates.os</b> ファイルにあります。

モニタ名	プロトコル/ テクノロジー	ユーザ権限と資格情報	注意事項
F5 Big-IP	SNMP	SNMP のバージョンに応じて、コミュニティ文字列またはユーザ名とパスワード。	<p>このモニタに対する最も安全な設定は、認証 (SHA または MD5) と DES の非公開暗号を使う、SNMP V3 の使用が設定されているエージェントに対して実行することです。この設定では、暗号化されていない SNMP データはネットワーク経由では渡されません。これにより、悪意のあるユーザが監視対象のデバイスを危険にさらす可能性を大きく低減します。監視対象デバイスの SNMP エージェントの実装バグによるセキュリティ上の脆弱性は考慮されていません。</p> <p>このモニタに対する最も危険な設定は、監視対象デバイスのエージェントによって実装された MIB 全体に対する読み取りおよび書き込みの両方のアクセス権を持つコミュニティ文字列を使う SNMP V1 を使用することです。この設定では、悪意のあるユーザがネットワーク上で盗聴することによってコミュニティ文字列を取得し、それを使用してデバイスを再設定することができます。</p>
ファイル (Windows)	NetBIOS, WMI	ログ・ファイルへの読み取り専用アクセスのための Windows 権限。	

第 14 章 • 権限と資格情報

モニタ名	プロトコル/ テクノロジー	ユーザ権限と資格情報	注意事項
ファイル (Solaris/ Linux)	Telnet, SSH, rlogin	対象のファイル・システム に対するファイルの読み取 り専用権限。	
FTP	FTP	ユーザ固有のファイルをコ ピーするための読み取り専 用権限を持つ, FTP サイト 用の有効なユーザ名とパス ワード。カスタマー・サイ トは匿名ログインを許可し ます。	
Generic Hypervisor	Telnet, SSH, rlogin	リモート・サーバにはシェ ル・アクセスが必要です。ま た, ログイン・ユーザには, 特定の実行ファイル・プロ グラムを実行する権限も必 要です。	SiteScope が実行するコマ ンドに UNIX グループ権限を 使用することにより, ログ イン・ユーザのアクセスを 制限できます。個々のオペ レーティング・システムに 関連するコマンドの一覧は, <b>templates.os</b> ファイル にあります。
HAProxy	HTTP/ HTTPS	SiteScope には何も必要 ありません。 サーバには有効なユーザ名 とパスワードが必要です。	
HP iLO (Integrated Lights-Out)	SSH	HP iLO システム管理者が 設定する必要があります。	リモート・サーバを設定す る場合は, [詳細設定] 表示 枠で <b>[SSH バージョン 2 のみ を使用]</b> を選択します (リ モート・サーバを高速化)。

モニタ名	プロトコル/ テクノロジー	ユーザ権限と資格情報	注意事項
KVM	Telnet, SSH, rlogin	リモート・サーバにはシェル・アクセスが必要です。また、ログイン・ユーザには、特定の実行ファイル・プログラムを実行する権限も必要です。	SiteScope が実行するコマンドに UNIX グループ権限を使用することにより、ログイン・ユーザのアクセスを制限できます。個々のオペレーティング・システムに関連するコマンドの一覧は、 <b>templates.os</b> ファイルにあります。
LDAP	LDAP	単純な認証を行う LDAP サーバでの有効なユーザ名とパスワード。クエリまたは検索操作には適切な権限が必要です。バージョン 7.9 では、匿名認証もサポートされています。	
リンク・ チェック	HTTP/ HTTPS	HTTP/HTTPS サイトでユーザ名とパスワードが必要な限り、必要ありません。	ユーザにはリンクをクリックできる権限が必要です。
ログ・ファイル (Windows)	NetBIOS	ログ・ファイルへの読み取り専用アクセスのための Windows 権限。	
ログ・ファイ ル (Solaris/ Linux)	Telnet, SSH, rlogin	リモート・サーバにはシェル・アクセスが必要です。また、ログイン・ユーザには、特定の実行ファイル・プログラムを実行する権限も必要です。対象のファイル・システムに対するファイルの読み取り専用権限。	SiteScope が実行するコマンドに UNIX グループ権限を使用することにより、ログイン・ユーザのアクセスを制限できます。個々のオペレーティング・システムに関連するコマンドの一覧は、 <b>templates.os</b> ファイルにあります。

モニタ名	プロトコル/ テクノロジー	ユーザ権限と資格情報	注意事項
メール	SMTP	有効な電子メール・アカウントとパスワード。	
MAPI	MAPI	テスト電子メールを送受信するための 1 つまたは 2 つの電子メール・アカウントのユーザ名とパスワード。	SiteScope は SiteScope サーバ上で Local Administrator として実行する必要があります。テスト電子メールアカウントには、SiteScope サーバでの Local Administrator 権限が必要です。
メモリ (Windows)	NetBIOS, WMI	Microsoft ASP サーバ・モニタと同じ。	
メモリ (Solaris Linux)	Telnet, SSH, rlogin	リモート・サーバにはシェル・アクセスが必要です。また、ログイン・ユーザには、特定の実行ファイル・プログラムを実行する権限も必要です。	SiteScope が実行するコマンドに UNIX グループ権限を使用することにより、ログイン・ユーザのアクセスを制限できます。個々のオペレーティング・システムに関連するコマンドの一覧は、 <b>templates.os</b> ファイルにあります。
メモリキャッシュ統計	TCP	何も必要ありません。	
Microsoft アーカイブ・サーバ	NetBIOS, WMI	Windows のパフォーマンス・オブジェクトを監視するには、231 ページ「Windows のパフォーマンス・オブジェクトの監視」に説明されている特定のアクセス権限が必要です。	231 ページ「Windows のパフォーマンス・オブジェクトの監視」の注意事項を参照してください。



モニタ名	プロトコル/ テクノロジー	ユーザ権限と資格情報	注意事項
音声ビデオ会議サーバ	NetBIOS, WMI	Windows のパフォーマンス・オブジェクトを監視するには、231 ページ「Windows のパフォーマンス・オブジェクトの監視」に説明されている特定のアクセス権限が必要です。	231 ページ「Windows のパフォーマンス・オブジェクトの監視」の注意事項を参照してください。
Microsoft ASP サーバ	NetBIOS, WMI	Windows のパフォーマンス・オブジェクトを監視するには、231 ページ「Windows のパフォーマンス・オブジェクトの監視」に説明されている特定のアクセス権限が必要です。	231 ページ「Windows のパフォーマンス・オブジェクトの監視」の注意事項を参照してください。
Microsoft Director サーバ	NetBIOS, WMI	Windows のパフォーマンス・オブジェクトを監視するには、231 ページ「Windows のパフォーマンス・オブジェクトの監視」に説明されている特定のアクセス権限が必要です。	231 ページ「Windows のパフォーマンス・オブジェクトの監視」の注意事項を参照してください。
Microsoft エッジ・サーバ	NetBIOS, WMI	Windows のパフォーマンス・オブジェクトを監視するには、231 ページ「Windows のパフォーマンス・オブジェクトの監視」に説明されている特定のアクセス権限が必要です。	231 ページ「Windows のパフォーマンス・オブジェクトの監視」の注意事項を参照してください。
Microsoft フロント・エンド・サーバ	NetBIOS, WMI	Windows のパフォーマンス・オブジェクトを監視するには、231 ページ「Windows のパフォーマンス・オブジェクトの監視」に説明されている特定のアクセス権限が必要です。	231 ページ「Windows のパフォーマンス・オブジェクトの監視」の注意事項を参照してください。

モニタ名	プロトコル/ テクノロジー	ユーザ権限と資格情報	注意事項
Microsoft IIS サーバ	NetBIOS, WMI	Windows のパフォーマンス・オブジェクトを監視するには、231 ページ「Windows のパフォーマンス・オブジェクトの監視」に説明されている特定のアクセス権限が必要です。	231 ページ「Windows のパフォーマンス・オブジェクトの監視」の注意事項を参照してください。
Microsoft 仲 介サーバ	NetBIOS, WMI	Windows のパフォーマンス・オブジェクトを監視するには、231 ページ「Windows のパフォーマンス・オブジェクトの監視」に説明されている特定のアクセス権限が必要です。	231 ページ「Windows のパフォーマンス・オブジェクトの監視」の注意事項を参照してください。
Microsoft 監 視および CDR サーバ	NetBIOS, WMI	Windows のパフォーマンス・オブジェクトを監視するには、231 ページ「Windows のパフォーマンス・オブジェクトの監視」に説明されている特定のアクセス権限が必要です。	231 ページ「Windows のパフォーマンス・オブジェクトの監視」の注意事項を参照してください。
Microsoft Registrar サーバ	NetBIOS, WMI	Windows のパフォーマンス・オブジェクトを監視するには、231 ページ「Windows のパフォーマンス・オブジェクトの監視」に説明されている特定のアクセス権限が必要です。	231 ページ「Windows のパフォーマンス・オブジェクトの監視」の注意事項を参照してください。
Microsoft SQL Server	NetBIOS, WMI	Windows のパフォーマンス・オブジェクトを監視するには、231 ページ「Windows のパフォーマンス・オブジェクトの監視」に説明されている特定のアクセス権限が必要です。	231 ページ「Windows のパフォーマンス・オブジェクトの監視」の注意事項を参照してください。

モニタ名	プロトコル/ テクノロジー	ユーザ権限と資格情報	注意事項
Microsoft Windows デ イヤルアップ	MODEM	接続されている ISP アカ ントに対するユーザ名とパス ワード。アカウントには、指 定されたテスト・モニタを実 行できる権限が必要です。	
Microsoft Windows イ ベント・ログ	NetBIOS, WMI	Windows のパフォーマン ス・オブジェクトを監視す るには、231 ページ 「Windows のパフォーマン ス・オブジェクトの監視」 に説明されている特定の アクセス権限が必要です。	231 ページ「Windows のパ フォーマンス・オブジェク トの監視」の注意事項を参 照してください。
Microsoft Windows Media Player	Telnet, SSH, rlogin	対象のファイル・システム に対するファイルの読み取 り専用権限。	
Microsoft Windows Media Server	NetBIOS, WMI	Windows のパフォーマン ス・オブジェクトを監視す るには、231 ページ 「Windows のパフォーマン ス・オブジェクトの監視」 に説明されている特定の アクセス権限が必要です。	231 ページ「Windows のパ フォーマンス・オブジェク トの監視」の注意事項を参 照してください。
Microsoft Windows パ フォーマンス・カウンタ	NetBIOS	Windows のパフォーマン ス・オブジェクトを監視す るには、231 ページ 「Windows のパフォーマン ス・オブジェクトの監視」 に説明されている特定の アクセス権限が必要です。	231 ページ「Windows のパ フォーマンス・オブジェク トの監視」の注意事項を参 照してください。

## 第 14 章 • 権限と資格情報

モニタ名	プロトコル/ テクノロジー	ユーザ権限と資格情報	注意事項
Microsoft Windows リソース	NetBIOS, WMI	Windows のパフォーマンス・オブジェクトを監視するには、231 ページ「Windows のパフォーマンス・オブジェクトの監視」に説明されている特定のアクセス権限が必要です。	231 ページ「Windows のパフォーマンス・オブジェクトの監視」の注意事項を参照してください。

モニタ名	プロトコル/ テクノロジー	ユーザ権限と資格情報	注意事項
ネットワーク 帯域幅	SNMP	SNMP のバージョンに応じて、コミュニティ文字列またはユーザ名とパスワード。	<p>このモニタに対する最も安全な設定は、認証 (SHA または MD5) と DES の非公開暗号を使う、SNMP V3 の使用が設定されているエージェントに対して実行することです。この設定では、暗号化されていない SNMP データはネットワーク経由では渡されません。これにより、悪意のあるユーザが監視対象のデバイスを危険にさらす可能性を大きく低減します。監視対象デバイスの SNMP エージェントの実装バグによるセキュリティ上の脆弱性は考慮されていません。</p> <p>このモニタに対する最も危険な設定は、監視対象デバイスのエージェントによって実装された MIB 全体に対する読み取りおよび書き込みの両方のアクセス権を持つコミュニティ文字列を使う SNMP V1 を使用することです。この設定では、悪意のあるユーザがネットワーク上で盗聴することによってコミュニティ文字列を取得し、それを使用してデバイスを再設定することができます。</p>

第 14 章 • 権限と資格情報

モニタ名	プロトコル/ テクノロジー	ユーザ権限と資格情報	注意事項
ニュース	NNTP	ニュース・サーバに必要な場合、ニュース・グループ内のメッセージの総数をクエリする読み取り専用の権限を持つ、有効なユーザ名とパスワード。	
Oracle 9i アプリケーション・サーバ	HTTP/ HTTPS		
Oracle データベース	JDBC	Oracle ユーザは、 < SiteScope のルート・ディレクトリ >¥ templates.applications¥ commands.oraclejdbc にあるすべての SQL ステートメントを実行できる権限を持ってログインします。	
Ping	ICMP	N/A	
ポート	TCP	N/A	
Radius	Radius	Radius サーバでの有効なユーザ名とパスワード。ほかの権限は必要ありません。	SiteScope の IP を Radius サーバと通信可能なサーバのリストに追加する必要があります。また、PAP 認証を行うように設定する必要があります。
Real Media Player	Telnet, SSH, rlogin	対象のファイル・システムでのファイルの読み取り専用権限。	
Real Media Server	NetBIOS, WMI	Windows のパフォーマンス・オブジェクトを監視するには、231 ページ「Windows のパフォーマンス・オブジェクトの監視」に説明されている特定のアクセス権限が必要です。	231 ページ「Windows のパフォーマンス・オブジェクトの監視」の注意事項を参照してください。

モニタ名	プロトコル/ テクノロジー	ユーザ権限と資格情報	注意事項
SAP CCMS	独自開発	XMI 認証。	XMI 認証を持つプロファイルは、S_A.SYSTEM, PD_CHICAGO, S_WF_RWTEST, および SAP_ALL です。
SAP CCMS 警告	独自開発		
SAP Performance または SAP ワーク・プロセス	独自開発	現在調査中です。	
スクリプト (Windows)	Telnet, SSH, rlogin	Windows のパフォーマンス・オブジェクトを監視するには、231 ページ「Windows のパフォーマンス・オブジェクトの監視」に説明されている特定のアクセス権限が必要です。	231 ページ「Windows のパフォーマンス・オブジェクトの監視」の注意事項を参照してください。
スクリプト (Solaris/ Linux)	Telnet, SSH, rlogin	リモート・サーバにはシェル・アクセスが必要です。また、ログイン・ユーザには、特定の実行ファイル・プログラムを実行する権限も必要です。	SiteScope が実行するコマンドに UNIX グループ権限を使用することにより、ログイン・ユーザのアクセスを制限できます。個々のオペレーティング・システムに関連するコマンドの一覧は、 <b>templates.os</b> ファイルにあります。
ローカル・マシン上のスクリプト (Solaris, Linux, およ び Windows)	Telnet, SSH, rlogin/ NetBIOS	対象のファイル・システムに対するファイルの読み取り専用権限。	

第 14 章 • 権限と資格情報

モニタ名	プロトコル/ テクノロジー	ユーザ権限と資格情報	注意事項
サービス (Windows)	NetBIOS, WMI	Windows のパフォーマンス・オブジェクトを監視するには、231 ページ「Windows のパフォーマンス・オブジェクトの監視」に説明されている特定のアクセス権限が必要です。	231 ページ「Windows のパフォーマンス・オブジェクトの監視」の注意事項を参照してください。
サービス (Solaris Linux)	Telnet, SSH, rlogin	リモート・サーバにはシェル・アクセスが必要です。また、ログイン・ユーザには、特定の実行ファイル・プログラムを実行する権限も必要です。	SiteScope が実行するコマンドに UNIX グループ権限を使用することにより、ログイン・ユーザのアクセスを制限できます。個々のオペレーティング・システムに関連するコマンドの一覧は、 <b>templates.os</b> ファイルにあります。
Siebel アプリケーション・サーバ (以前の Siebel サーバ・マネージャ)	CmdLine	ユーザ・アカウントには、Siebel サーバ・マネージャ (srvrMgr) ・コマンドを発行する Siebel 管理者権限が必要です。	srvrMgr クライアントがリモートの場合、リモート srvrMgr コマンドを実行するための適切なユーザ名およびパスワードの資格情報を使用して、リモート Windows またはリモート UNIX をセットアップする必要があります。
Siebel ログ	Telnet, SSH, rlogin	対象の Siebel サーバ・ファイル・システムに対するファイルの読み取り専用権限。	
Siebel Web サーバ	HTTP/ HTTPS	対象の Siebel Extensions ページがサードパーティー製の HTML フォーム・ベースの認証ソフトウェアの背後にある場合、ユーザ名とパスワードが必要です。	ユーザには、Siebel SWE ページを取得する権限が必要です。



モニタ名	プロトコル/ テクノロジー	ユーザ権限と資格情報	注意事項
SNMP	SNMP	SNMP のバージョンに応じて、コミュニティ文字列またはユーザ名とパスワード。	<p>このモニタに対する最も安全な設定は、認証 (SHA または MD5) と DES の非公開暗号を使う、SNMP V3 の使用が設定されているエージェントに対して実行することです。この設定では、暗号化されていない SNMP データはネットワーク経由では渡されません。これにより、悪意のあるユーザが監視対象のデバイスを危険にさらす可能性を大きく低減します。監視対象デバイスの SNMP エージェントの実装バグによるセキュリティ上の脆弱性は考慮されていません。</p> <p>このモニタに対する最も危険な設定は、監視対象デバイスのエージェントによって実装された MIB 全体に対する読み取りおよび書き込みの両方のアクセス権を持つコミュニティ文字列を使う SNMP V1 を使用することです。この設定では、悪意のあるユーザがネットワーク上で盗聴することによってコミュニティ文字列を取得し、それを使用してデバイスを再設定することができます。</p>

モニタ名	プロトコル/ テクノロジー	ユーザ権限と資格情報	注意事項
MIB による SNMP	SNMP	SNMP のバージョンに応じて、コミュニティ文字列またはユーザ名とパスワード。	<p>このモニタに対する最も安全な設定は、認証 (SHA または MD5) と DES の非公開暗号を使う、SNMP V3 の使用が設定されているエージェントに対して実行することです。この設定では、暗号化されていない SNMP データはネットワーク経由では渡されません。これにより、悪意のあるユーザが監視対象のデバイスを危険にさらす可能性を大きく低減します。監視対象デバイスの SNMP エージェントの実装バグによるセキュリティ上の脆弱性は考慮されていません。</p> <p>このモニタに対する最も危険な設定は、監視対象デバイスのエージェントによって実装された MIB 全体に対する読み取りおよび書き込みの両方のアクセス権を持つコミュニティ文字列を使う SNMP V1 を使用することです。この設定では、悪意のあるユーザがネットワーク上で盗聴することによってコミュニティ文字列を取得し、それを使用してデバイスを再設定することができます。</p>

モニタ名	プロトコル/ テクノロジー	ユーザ権限と資格情報	注意事項
SNMP トラップ	SNMP	不要ですが、SiteScope にトラップを送信するためにネットワーク上でエージェントを設定する権限は必要です。予約済みのポートであるポート 162 にバインドできるように、SiteScope は権限を持つユーザとして実行する必要があります。	SNMP V1 および V2 トラップに関するセキュリティ・リスクとして、悪意のあるユーザがトラップで渡されたデータを盗聴する可能性があります。認証と非公開暗号を使用する V3 トラップを使用することにより、盗聴者によってデータが悪用される可能性が大幅に削減されます。
SunONE	HTTP/ HTTPS	認証を必要とするプロキシを使用しない限り、不要。	
システム・ログ	Telnet, SSH, rlogin	リモート・サーバにはシェル・アクセスが必要です。また、ログイン・ユーザには、特定の実行ファイル・プログラムを実行する権限も必要です。対象のファイル・システムに対するファイルの読み取り専用権限。	SiteScope が実行するコマンドに UNIX グループ権限を使用することにより、ログイン・ユーザのアクセスを制限できます。個々のオペレーティング・システムに関連するコマンドの一覧は、 <b>templates.os</b> ファイルにあります。
Tuxedo	独自開発	PeopleSoft Tuxedo には、あらかじめ設定されている 2 つのユーザ、 <b>PS</b> および <b>VP</b> が含まれています。これらは監視専用アカウントです。SiteScope の監視では、ほかのユーザの作成や使用を行うことはできません。	
URL	HTTP/ HTTPS	SiteScope には何も必要ありません。サーバには有効なユーザ名とパスワードが必要です。	

モニタ名	プロトコル/ テクノロジー	ユーザ権限と資格情報	注意事項
URL 内容	HTTP/ HTTPS	SiteScope には何も必要ありません。 サーバには有効なユーザ名とパスワードが必要です。	
URL リスト	HTTP/ HTTPS	SiteScope には何も必要ありません。 サーバには有効なユーザ名とパスワードが必要です。	
URL シー ケンス	HTTP/ HTTPS	SiteScope には何も必要ありません。 サーバには有効なユーザ名とパスワードが必要です。	
VMware デー タストア	HTTPS	vCenter の有効なユーザ名とパスワード。	データセンター、データストア、vmdisk を表示するにはユーザは適切な権限が必要です。vmdisk には、ユーザにデータストア参照可能権限がある必要があります。これらのモニタでは、vCenter からサーバ証明書をインポートする必要もあります。この作業は、SiteScope で証明書管理を使用して実行できます（[証明書のインポート] オプションを使用して、モニタ設定の前またはモニタ設定の間どちらでも可能）。

モニタ名	プロトコル/ テクノロジー	ユーザ権限と資格情報	注意事項
VMware ホスト CPU / メモリ / ストレージ / ネットワーク / 状態	HTTPS	vCenter/Host の有効なユーザ名とパスワード。	ホストおよび VM を表示するにはユーザは適切な権限が必要です。これらのモニタでは、vCenter/Host からサーバ証明書をインポートする必要もあります。この作業は、SiteScope で手動または証明書管理を使用して実行できます（[証明書のインポート] オプションを使用して、モニタ設定の前またはモニタ設定の間どちらでも可能）。
Web サーバ	NetBIOS	Windows のパフォーマンス・オブジェクトを監視するには、231 ページ「Windows のパフォーマンス・オブジェクトの監視」に説明されている特定のアクセス権限が必要です。	231 ページ「Windows のパフォーマンス・オブジェクトの監視」の注意事項を参照してください。
Web サーバ (Solaris, Linux, およ び Windows)	Telnet, SSH, rlogin	対象のファイル・システムに対するファイルの読み取り専用権限。	
Web サービス	HTTP/ HTTPS	対象の Web サービスが必要とする場合、基本認証、ダイジェスト認証、および NTLM 認証をサポートします。	
WebLogic アプリケーション・サーバ 5.x	SNMP	コミュニティ文字列の資格情報が SNMP エージェントの文字列と一致する必要があります。	
WebLogic アプリケーション・サーバ 6.x 以降	RMI	少なくともモニタ・ロールの権限を持つグループに属するユーザが必要です。	

第 14 章 • 権限と資格情報

モニタ名	プロトコル/ テクノロジー	ユーザ権限と資格情報	注意事項
WebSphere アプリケーション・サー バ 3.5x	RMI		
WebSphere アプリケーション・サー バ 4.5	RMI	少なくともモニタ・ロール の権限のあるグループを持 つ、または属するユーザが 必要です。	
WebSphere アプリケーション・サー バ 5.x (HTTP 経由の SOAP)	HTTP/ HTTPS	少なくともモニタ・ロール の権限のあるグループを持 つ、または属するユーザが 必要です。	
WebSphere MQ の状態	独自開発	SiteScope アカウントは、 MQ Windows サーバ内の mqm グループのメンバー である必要があります。  MQ UNIX では、使用され るサーバ接続チャンネルは SSL 認証を要求できません。	
WebSphere パフォーマンス・サーブ レット	HTTP/ HTTPS	サーブレットの URL の ユーザ名およびパスワード による HTTP 認証。ユーザ は資格情報をカスタマイズ できます。	

## Windows のパフォーマンス・オブジェクトの監視

### ユーザ権限と資格情報

Windows 上でパフォーマンス・オブジェクトを監視するために、ユーザには特定のアクセス権限が必要です。Microsoft サポート技術情報の記事 <http://support.microsoft.com/kb/300702/ja> および記事 <http://support.microsoft.com/kb/164018/ja-jp> を参照してください。

これらの記事には、監視対象サーバ上のユーザに許可する必要がある権限とセキュリティ・ポリシーが記述されています。

### 注意事項：

- ▶ **Perfmon User** : Windows サーバ上でパフォーマンス・オブジェクトを監視するために必要な権限が与えられたユーザです。

Windows サーバの **Performance Monitor Users** (Windows 2000 および Windows 2003), **Power Users**, および **Administrators** グループは, Perfmon User に必要な権限とセキュリティ・ポリシーのセットにすでに関連付けられています。これらのグループに属するすべてのユーザは、パフォーマンス・オブジェクトの監視に必要な権限をすべて持っており、自動的に Perfmon User となります。**Performance Monitor Users** グループには正確な権限セットがありますが、**Power Users** と **Administrators** グループには、パフォーマンスの監視に必要な追加の権限がいくつか関連付けられています。

- ▶ **SiteScope ユーザ** : SiteScope サービスにログオンするユーザです。SiteScope モニタがリモート・サーバから perfmon データを収集できるようにするために、Perfmon User として定義されたユーザの資格情報を使用して、リモート・サーバへの接続を確立する必要があります。これらの接続は次のオプションを使用して確立できます。
  - ▶ SiteScope ユーザを、リモート・マシン上のユーザでもあるドメイン・ユーザとして設定します。
  - ▶ リモート・マシン上で SiteScope ユーザが Perfmon User として定義されていない場合、リモート・マシン上で Perfmon User として定義されているユーザの資格情報を使用して、SiteScope でリモート NT オブジェクトを設定する必要があります。その後、モニタはリモート NT オブジェクトを使用するように設定されます。





# 15

---

## SSL を使用するための SiteScope の設定

### 本章の内容

- ▶ SiteScope での SSL の使用について (234 ページ)
- ▶ SSL を使用するための SiteScope の準備 (235 ページ)
- ▶ SSL 用の SiteScope の設定 (240 ページ)
- ▶ 相互 SSL 設定用の SiteScope の設定 (242 ページ)
- ▶ SSL デプロイメントを使用する BSM サーバに接続するための SiteScope の設定 (244 ページ)
- ▶ クライアント証明書を要求する BSM サーバに接続するための SiteScope の設定 (245 ページ)
- ▶ BSM サーバがクライアント証明書を必要とする時 SiteScope でトポロジ・ディスカバリ・エージェントの設定方法 (249 ページ)

## SiteScope での SSL の使用について

SiteScope は、SiteScope インタフェースへのアクセスを制限するために SSL (Secure Sockets Layer) を使用するように設定できます。SiteScope サーバで SSL をサポートするには、SiteScope インタフェースを提供する Web サーバを SSL に対応するように設定します。このためには、デジタル証明書をキー・ストア・ファイルにインポートし、SiteScope が HTTPS 要求にのみ応答するようにサーバの設定を変更します。クライアント証明書を付けてまたは付けずに SSL を必要とする BSM サーバに接続するように、SiteScope を設定することもできます。

---

**注意 :** SiteScope へのすべてのアクセスを HTTPS クライアント接続に制限するには、本項の手順に従って、SiteScope が提供する SiteScope Web サーバおよび Tomcat サーバの両方で SSL を使用するように設定する必要があります。

---

## SSL を使用するための SiteScope の準備

SiteScope には **Keytool.exe** が付属しています。Keytool は、鍵および証明書管理ユーティリティです。Keytool により、ユーザは、デジタル署名を使用した認証のための自分の公開鍵 / 秘密鍵ペアおよび関連する証明書を管理できます。また、通信するほかのユーザおよび組織の公開鍵をキャッシュすることもできます。Keytool は、`<SiteScope インストール・パス >%SiteScope%java%bin` ディレクトリにインストールされています。

---

**注意：**デジタル証明書を作成、要求、およびインストールする場合には、各手順で使用するパラメータおよびコマンド・ライン引数は非常に重要であり、繰り返し使用するものなので、必ずメモを取っておいてください。

---

---

**注：**SSL で使用するために SiteScope クラシック・インタフェースを準備するには、Tomcat サーバ (240 ページ「SSL 用の SiteScope の設定」を参照) およびクラシック・インタフェース・エンジン (`<SiteScope のルート・ディレクトリ >%docs%HTTPSaccess.htm` の説明を参照) の両方を設定する必要があります。

---

Keytool の詳細については、  
<http://java.sun.com/j2se/1.3/docs/tooldocs/win32/keytool.html> (英語サイト) を参照してください。

本項の内容

- ▶ 236 ページ「認証局からの証明書の使用」
- ▶ 238 ページ「自己署名証明書の使用」

## 認証局からの証明書の使用

認証局が発行するデジタル証明書を使用できます。このオプションを使用するには、Keytool で使用されるキー・ストア・ファイルにインポート可能なデジタル証明書が必要です。自分の組織がこれに該当するデジタル証明書を持っていない場合は、認証局に証明書の発行を要求する必要があります。

キー・ストア・ファイルおよびデジタル証明書要求を作成するには、次の手順を使用します。

**認証局に対する証明書要求ファイルを作成するには、次の手順を実行します。**

- 1 **<SiteScope のルート・ディレクトリ>%groups** ディレクトリにある **serverKeystore** ファイルを削除します。このファイルは削除しても、単にほかのディレクトリに移動してもかまいません。
- 2 **<SiteScope のルート・ディレクトリ>%java%bin** ディレクトリから次のコマンド・ラインを実行して、鍵ペアを作成します。

---

### 注：

- ▶ このコマンドおよびその他のコマンドはすべて、1 行で入力する必要があります。ここでは、ページに収まるようにコマンド・ラインを分割しています。
  - ▶ 「IOException : キーをリカバリできません」というエラーを回避するため、プライベート・キー・パスワードとキーストアのパスワードは同一でなければなりません。
- 

```
keytool -genkey -dname "CN=www.yourDomain.com, OU=yourDepartment, O=yourCompanyName, L=yourLocation, ST=yourState,C=yourCountryCode" -alias yourAlias -keypass keypass -keystore ../%groups%serverKeystore -storepass keypass -keyalg "RSA" -validity valdays
```

このコマンドにより、**<SiteScope のルート・ディレクトリ>%groups** ディレクトリに「**serverKeystore**」というファイルが作成されます。SiteScope はこのファイルを使用して、セキュア・セッションで使用される証明書を格納します。このファイルのバックアップ・コピーを別の場所に保存しておいてください。

## ガイドラインと制限事項

- ▶ **-dname** オプションの値は、ここに示す順に指定する必要があります。イタリック体で示されている部分には、各自の環境に合わせた値を指定します。キーワードは、次に示す項目の略語です。
  - ▶ **CN = commonName** : 人名 (例 : Warren Pease)
  - ▶ **OU = organizationUnit** : 組織の小区分 (例 : NetAdmin)
  - ▶ **O = organizationName** : 組織の大区分 (例 : ACMe-Systems, Inc. )
  - ▶ **L = localityName** : 地域 (都市) 名 (例 : Palo Alto)
  - ▶ **ST = stateName** : 州名 (例 : California)
  - ▶ **C = country** : 2 文字の国コード (例 : US)
- ▶ **-dname** (識別名文字列) 変数内のサブコンポーネントの大文字 / 小文字は区別されませんが、その順序は意味を持ちます (ただし、すべてのサブコンポーネントを指定する必要はありません)。**-dname** 変数は会社を表し、**CN** は SiteScope がインストールされている Web サーバのドメイン名です。
- ▶ **-storepass** には、キー・ストア・ファイルを保護するためのパスワードを指定します。パスワードは 6 文字以上で指定しなければなりません。キー・ストア・ファイルとの間で証明書のインポートや削除を行うには、このパスワードを使用する必要があります。
- ▶ **-alias** 変数は、キー・ストア内のエントリを識別するためのエイリアスまたはニックネームです。

### 3 <SiteScope のルート・ディレクトリ>%java%bin ディレクトリで次のコマンドを実行して、このキーストアに対する証明書要求を作成します。

```
keytool -certreq -alias yourAlias -file ..\..\%groups%\sis.csr -keystore
..\..\%groups%\serverKeystore -storepass passphrase
```

このコマンドにより、<SiteScope のルート・ディレクトリ>%groups ディレクトリに「sis.csr」というファイルが作成されます。このファイルを使用して、認証局からの証明書を要求します。

認証局から証明書を受け取ったら（応答メッセージに **cert.cer** という名前のファイルが含まれています）、前述の手順で作成したキー・ストア・ファイルにこの証明書をインポートする必要があります。キー・ストア・ファイルの名前は **serverKeystore** になっています。証明書を SiteScope で使用するためには、次の手順を使用します。

**認証局からの証明書をインポートするには、次の手順を実行します。**

- 1 <SiteScope のルート・ディレクトリ>%java%bin ディレクトリで次のコマンドを実行して、証明書データをキー・ストア・ファイルにインポートします。

```
keytool -import -trustcacerts -alias yourAlias -file cert.cer -keystore  
..%.%groups%serverKeystore
```

- 2 安全な接続を使用するように SiteScope を変更するには、SiteScope の特定の設定または設定ファイルを追加あるいは変更する必要があります。詳細については、240 ページ「SSL 用の SiteScope の設定」を参照してください。

## 自己署名証明書の使用

SiteScope で使用するための自己署名証明書を生成することもできます。このためには、次の手順に従って、Keytool ユーティリティで **-selfcert** オプションを使用して自己署名証明書を生成します。

**自己署名証明書を使用するには、次の手順で行います。**

- 1 <SiteScope のルート・ディレクトリ>%groups ディレクトリにある **serverKeystore** ファイルを削除します。このファイルは削除しても、単にほかのディレクトリに移動してもかまいません。
- 2 <SiteScope のルート・ディレクトリ>%java%bin ディレクトリで次のコマンドを実行します。変数には、自分の組織に固有な情報を指定します。

---

**注：**このコマンドおよびその他のコマンドはすべて、1 行で入力する必要があります。ここでは、ページに収まるようにコマンド・ラインを分割しています。

---

```
keytool -genkey -dname "CN=www.yourDomain.com, OU=yourDepartment,  
O=yourCompanyName, L=yourLocation, ST=yourState, C=yourCountryCode"  
-alias yourAlias -keypass keypass -keystore ../..¥groups¥serverKeystore -  
storepass passphrase -keyalg "RSA" -validity valdays
```

- 3** <SiteScope のルート・ディレクトリ>¥java¥bin ディレクトリで次のコマンドを実行します。

```
keytool -selfcert -alias yourAlias -sigalg "MD5withRSA" -keypass password -  
dname "CN=www.yourDomain.com, OU=yourDepartment,  
O=yourCompanyName, L=yourLocation, ST=yourState, C=yourCountryCode"  
-keystore ../..¥groups¥serverKeystore
```

- 4** 安全な接続を使用するように SiteScope を変更するには、SiteScope の特定の設定または設定ファイルを追加あるいは変更する必要があります。詳細については、240 ページ「SSL 用の SiteScope の設定」を参照してください。
- 5** 必要に応じて、次のコマンドを実行することで、BSM で使用する証明書をエクスポートできます。

```
keytool -exportcert -alias yourAlias -file <SiteScope のルート・ディレクトリ>  
¥certificate_name.cer -keystore ../..¥groups¥serverKeystore
```

入力を促すメッセージが表示されたら、キーストア・パスワードを入力します。

## SSL 用の SiteScope の設定

Tomcat で SSL を有効にするには、Tomcat サーバが使用する設定ファイルを変更する必要があります。

- 1 **<SiteScope のルート・ディレクトリ>¥Tomcat¥conf** ディレクトリにある **server.xml** ファイルを開きます。
- 2 設定ファイルの次のようなセクションを探します。

```
<!-- Define a SSL Coyote HTTP/1.1 Connector on port 8443 -->
<!--
<Connector port="8443"
maxThreads="150" minSpareThreads="25" maxSpareThreads="75"
enableLookups="false" disableUploadTimeout="true"
acceptCount="100" debug="0" scheme="https" secure="true"
clientAuth="false" sslProtocol="TLS" />
-->
```

- 3 このセクションを次のように変更します。

```
<!-- Define a SSL Coyote HTTP/1.1 Connector on port 8443 -->

<Connector port="8443"
maxThreads="150" minSpareThreads="25" maxSpareThreads="75"
enableLookups="false" disableUploadTimeout="true"
acceptCount="100" debug="0" scheme="https" secure="true"
clientAuth="false" sslProtocol="TLS"
keystoreFile="<SiteScope インストール・パス >¥SiteScope¥groups¥serverKeystore"
keystorePass="testing"
/>
```

<SiteScope インストール・パス > は、SiteScope のインストール先のパスです。



---

**注：**

- ▶ SiteScope と同じサーバにほかの HP 製品がインストールされている場合は、競合を回避するために、ポート 8443 を別のポートに変更しなければならない場合があります。
- ▶ Tomcat ログ出力は、<SiteScope のルート・ディレクトリ>%logs%\tomcat.log ファイルに書き込まれます。ログ・ファイルの設定は、<SiteScope のルート・ディレクトリ>%Tomcat%\common%\classes%\log4j.properties ファイルで実行できます。

---

標準設定では、Tomcat は SiteScope ユーザのホーム・ディレクトリにある **.keystore** ファイルを探します。

Tomcat サーバ用に SSL を有効にする方法については、<http://tomcat.apache.org/tomcat-5.5-doc/ssl-howto.html> (英語サイト) を参照してください。

- 4 この例を使用して Tomcat で SSL を有効にしたら、次の URL で、SiteScope インタフェースを利用できるようになります。

<https://<SiteScope サーバ>:8443/SiteScope> (リンクは大文字と小文字が区別されます)

## 相互 SSL 設定用の SiteScope の設定

SiteScope サーバがクライアントからのクライアント証明書を要求する場合、次の手順を実行します。

- 1 SiteScope は SSL で設定する必要があります。詳細については、240 ページ「SSL 用の SiteScope の設定」を参照してください。
- 2 <SiteScope のルート・ディレクトリ>¥Tomcat¥conf¥ の次のセクションを見つけて、クライアント証明書を要求するように Tomcat サーバを設定します。  
server.xml 設定ファイル：

```
<Connector port="8443"
  maxThreads="150" minSpareThreads="25" maxSpareThreads="75"
  enableLookups="false" disableUploadTimeout="true"
  acceptCount="100" debug="0" scheme="https" secure="true"
  sslProtocol="TLS"
  keystoreFile="..¥groups¥serverKeystore"
  keystorePass="changeit"
```

そして次の属性を追加して、clientAuth="true" を変更します：

```
truststoreFile="..¥java¥lib¥security¥cacerts"
truststorePass="changeit"
truststoreType="JKS"
clientAuth="true"
/>
```

- 3 次のコマンドを実行して、クライアント証明書または認証局の証明書を SiteScope トラストストアにインポートします (<SiteScope のルート・ディレクトリ> ¥java¥lib¥security¥cacerts)。

```
C:¥SiteScope¥java¥bin > keytool -import -trustcacerts -alias <エイリアス> -
keystore ..¥lib¥security¥cacerts -file <証明書ファイル>
```

- 4 クライアント証明書を作成するか、既存のものをブラウザにインポートします。

5 SiteScope を再起動して、次のリンクを使用してそれにアクセスします。

<https://<サーバ>:8443/SiteScope> (リンクは大文字と小文字が区別されます)

---

**注 :** SiteScope SOAP API の呼び出しも証明書が必要です。次を Java コードに追加してクライアント証明書に対応します。

```
System.setProperty("javax.net.ssl.keyStore", <JKS 形式のクライアント証明書キーストアへのパス名 >);
```

```
System.setProperty("javax.net.ssl.keyStorePassword", <クライアント証明書キーストアのパスワード >);
```

```
(任意指定) System.setProperty("javax.net.ssl.trustStore", <JKS 形式のトラストストアへのパス名 >);
```

または次の JVM 引数を使用します。

```
-Djavax.net.ssl.keyStore=<JKS 形式のクライアント証明書キーストアへのパス名 >
```

```
-Djavax.net.ssl.keyStorePassword=<クライアント証明書キーストアのパスワード >
```

```
(任意指定)-Djavax.net.ssl.trustStore=<JKS 形式のトラストストアへのパス名 >
```

---

## SSL デプロイメントを使用する BSM サーバに接続するための SiteScope の設定

SSL デプロイメントを使用する BSM サーバに SiteScope を接続するには、次の手順で行います。

- 1 SiteScope サーバに接続します。
- 2 SiteScope のユーザ・インタフェースで [証明書管理] を使用して CA または BSM サーバ証明書を SiteScope にインポートします。詳細については、SiteScope ヘルプで『SiteScope の使用』の「証明書管理」セクションを参照してください。
- 3 BSM がロード・バランサを使用して設定されている場合、SiteScope のユーザ・インタフェースで [証明書管理] を使用して、Load Balance Core および Center URL の証明書を SiteScope にインポートします。詳細については、SiteScope ヘルプで『SiteScope の使用』の「証明書管理」セクションを参照してください。
- 4 証明書を BSM にインポートする方法の詳細については、HP BSM 文書ライブラリで『HP Business Service Management Hardening Guide』の「Using SSL with SiteScope」セクションを参照してください。

## クライアント証明書を要求する BSM サーバに接続するための SiteScope の設定

クライアント証明書を要求する BSM サーバに SiteScope を接続するには、次の手順で行います。

- 1 SiteScope サーバに接続します。
- 2 SiteScope のユーザ・インタフェースで [証明書管理] を使用して CA または BSM サーバ証明書を SiteScope にインポートします。詳細については、SiteScope ヘルプで『SiteScope の使用』の「証明書管理」セクションを参照してください。

---

**注：** 証明書のマシン名は完全修飾ドメイン名で、システム可用性管理の管理（手順 14）の [新規 SiteScope] ページで使用されているのと正確に同じ名前（大文字と小文字の区別も含めて）である必要があります。

---

- 3 JKS 形式でクライアント証明書を取得した場合には、<SiteScope のルート・ディレクトリ>\templates.certificates フォルダにコピーして、手順 11 から続行します。

---

**注：**

- ▶ プライベート・キー・パスワードが少なくとも 6 文字であること、またプライベート・キーとキーストア・パスワードが同一であることを確認します。
  - ▶ さらに、上記のキーストアにキーストアを発行した CA 証明書が含まれていることを確認します。
- 

そうでない場合には、以下の手順を実行します（JKS 形式でクライアント証明書を取得しなかった場合）。

- 4** <SiteScope のルート・ディレクトリ>%java%bin ディレクトリで次のコマンドを実行して、<SiteScope のルート・ディレクトリ>/templates.certificates にキーストアを作成します。

```
keytool -genkey -keyalg RSA -alias sis -keystore <SiteScope のルート・ディレクトリ>%templates.certificates%.ks -storepass <your_keystore_password>
```

例：

```
keytool -genkey -keyalg RSA -alias sis -keystore
C:%SiteScope%templates.certificates%.ks -storepass changeit
What is your first and last name?
 [Unknown]: domain.name
What is the name of your organizational unit?
 [Unknown]: dept
What is the name of your organization?
 [Unknown]: XYZ Ltd
What is the name of your City or Locality?
 [Unknown]: New York
What is the name of your State or Province?
 [Unknown]: USA
What is the two-letter country code for this unit?
 [Unknown]: US
Is CN=domain.name, OU=dept, O=XYZ Ltd, L=New York, ST=USA, C=US correct?
 [no]: yes

Enter key password for <SiteScope>
```

ENTER を押して、キーストア・パスワードと同じパスワードを使用します。

- 5** <SiteScope のルート・ディレクトリ>%java%bin ディレクトリで次のコマンドを実行して、このキーストアに対する証明書要求を作成します。

```
keytool -certreq -alias sis -file c:%sis.csr -keystore <SiteScope のルート・ディレクトリ>%templates.certificates%.ks -storepass <your_keystore_password>
```

次に例を示します。

```
keytool -certreq -alias sis -file c:%sis.csr -keystore
C:%SiteScope%templates.certificates%.ks -storepass changeit
```

- 6 認証局から証明書要求に対する署名を受けます。 .csr ファイルの内容をコピーして、証明局の Web フォームに貼り付けます。
- 7 署名付きのクライアント証明書を BASE-64 形式で <SiteScope のルート・ディレクトリ>%templates.certificates%clientcert.cer にダウンロードします。
- 8 認証局の証明書を BASE-64 形式で c:% にダウンロードします。
- 9 次のコマンドを実行して、認証局の証明書を JKS キーストアにインポートします。

```
keytool -import -alias ca -file c:%ca.cer -keystore <SiteScope のルート・ディレクトリ>%templates.certificates%.ks -storepass <your_keystore_password>
```

次に例を示します。

```
keytool -import -alias ca -file c:%ca.cer -keystore
C:%SiteScope%templates.certificates%.ks -storepass changeit
Owner: CN=dept-CA, DC=domain.name
Issuer: CN=dept-CA, DC=domain.name
Serial number: 2c2721eb293d60b4424fe82e37794d2c
Valid from: Tue Jun 17 11:49:31 IDT 2008 until: Mon Jun 17 11:57:06 IDT 2013
Certificate fingerprints:
    MD5: 14:59:8F:47:00:E8:10:93:23:1C:C6:22:6F:A6:6C:5B
    SHA1: 17:2F:4E:76:83:5F:03:BB:A4:B9:96:D4:80:E3:08:94:8C:D5:4A:D5
Trust this certificate? [no]: yes
Certificate was added to keystore
```

- 10 次のコマンドを実行して、クライアント証明書をキーストアにインポートします。

```
keytool -import -alias sis -file <SiteScope のルート・ディレクトリ>
%templates.certificates%certnew.cer -keystore <SiteScope のルート・ディレ
クトリ>%templates.certificates%.ks -storepass <your_keystore_password>
```

次に例を示します。

```
keytool -import -alias sis -file c:%SiteScope%templates.certificates%certnew.cer -
keystore C:%SiteScope%templates.certificates%.ks -storepass changeit
```

<SiteScope のルート・ディレクトリ>%java%bin ディレクトリのキーストアに証明書の応答がインストールされます。

- 11** <SiteScope のルート・ディレクトリ>¥java¥bin ディレクトリで次のコマンドを実行して、キーストアの内容を確認し、キーストアのパスワードを入力します。

```
keytool -list -keystore <SiteScope のルート・ディレクトリ>  
¥templates.certificates¥.ks
```

次に例を示します。

```
keytool -list -keystore C:¥SiteScope¥templates.certificates¥.ks  
Enter keystore password: changeit  
  
Keystore type: jks  
Keystore provider: SUN  
  
Your keystore contains 2 entries  
  
ca, Mar 8, 2009, trustedCertEntry,  
Certificate fingerprint (MD5): 14:59:8F:47:00:E8:10:93:23:1C:C6:22:6F:A6:6C:5B  
sis, Mar 8, 2009, keyEntry,  
Certificate fingerprint (MD5): C7:70:8B:3C:2D:A9:48:EB:24:8A:46:77:B0:A3:42:E1  
  
C:¥SiteScope¥java¥bin>
```

- 12** クライアント証明書にこのキーストアを使用するには、<SiteScope のルート・ディレクトリ>¥groups¥master.config ファイルに次の行を追加します。

```
_urlClientCert=<keystoreName>  
_urlClientCertPassword=<keystorePassword>
```

次に例を示します。

```
_urlClientCert=.ks  
_urlClientCertPassword=changeit
```

- 13** SiteScope で、[プリファレンス] > [統合プリファレンス] > [BSM プリファレンス利用可能操作] を選択し、[リセット] をクリックして、SiteScope サーバからすべての BSM 関連設定を削除し、BSM からすべての SiteScope 設定を削除します。



- 14 BSM で、[管理] > [システム可用性管理] を選択し、[新規 SiteScope] ボタンをクリックして、SiteScope インスタンスを追加します。

---

注：SiteScope と BSM 間の接続に失敗した場合は、<SiteScope のルート・ディレクトリ>%log%bac\_integration.log にエラーがないか調べます。

---

## BSM サーバがクライアント証明書を必要とする時 SiteScope でトポロジ・ディスカバリ・エージェントの設定方法

クライアント証明書を使用して BSM ゲートウェイ・サーバに接続するように SiteScope を設定した後で（245 ページ「クライアント証明書を要求する BSM サーバに接続するための SiteScope の設定」を参照）、ディスカバリが BSM サーバにトポロジをレポートするように次の手順を実行する必要があります。

- 1 <SiteScope のルート・ディレクトリ>%WEB-INF%classes で security という名前のフォルダを作成します（存在しない場合）。
- 2 MAMTrustStoreExp.jks と ssl.properties を <SiteScope のルート・ディレクトリ>%WEB-INF%classes から <SiteScope のルート・ディレクトリ>%WEB-INF%classes%security フォルダに移動します。
- 3 CA 証明書（または BSM サーバ証明書）をディスカバリ・トラストストア（MAMTrustStoreExp.jks）にパスワードとともにインポートします（ディスカバリ・トラストストアのデフォルトのパスワードは logomania で、次のように暗号化されます。[22,-8,116,-119,-107,64,49,93,-69,57,-13,-123,-32,-114,-88,-61]):

```
keytool -import -alias <your_CA> -keystore <SiteScope root directory>%WEB-INF%classes%security%MAMTrustStoreExp.jks -storepass
<your_keystore_password>
```

次に例を示します。

```
keytool -import -alias AMQA_CA -file c:%ca.cer -keystore C:%SiteScope%WEB-INF%classes%security%MAMTrustStoreExp.jks -storepass logomania
```

---

**Note:** プライベート・キー・パスワードは少なくとも 6 文字でなければなりません。またプライベート・キーとキーストアのパスワードは同一でなければなりません。

---

- 4 次のコマンドを使用してトラストストアのコンテンツを確認します。

```
<SiteScope root directory>%java%bin>keytool -list -keystore
<SiteScope root directory>%WEB-INF%classes%security%MAMTrustStoreExp.jks
-storepass <your_keystore_password>
Keystore type: <Keystore_type>
Keystore provider: <Keystore_provider>
Your keystore contains 2 entries
mam, Nov 4, 2004, trustedCertEntry, Certificate fingerprint (MD5):
<Certificate_fingerprint>
amqa_ca, Dec 30, 2010, trustedCertEntry, Certificate fingerprint (MD5):
<Certificate_fingerprint>
```

次に例を示します。

```
C:%SiteScope%java%bin>keytool -list -keystore C:%SiteScope%WEB-
INF%classes%security%MAMTrustStoreExp.jks -storepass logomania

Keystore type: JKS
Keystore provider: SUN

Your keystore contains 2 entries

mam, Nov 4, 2004, trustedCertEntry,
Certificate fingerprint (MD5): C6:78:0F:58:32:04:DF:87:5C:8C:60:BC:58:75:6E:F7
amqa_ca, Dec 30, 2010, trustedCertEntry,
Certificate fingerprint (MD5): 5D:47:4B:52:14:66:9A:6A:0A:90:8F:6D:7A:94:76:AB
```

- 5 SiteScope クライアント・キーストア (.ks) を <SiteScope のルート・ディレクトリ>%templates.certificates から <SiteScope のルート・ディレクトリ> SiteScope%WEB-INF%classes%security% にコピーします。
- 6 `ssl.properties` ファイルで, `javax.net.ssl.keyStore` プロパティをキーストア名に更新します。たとえば, `javax.net.ssl.keyStore=.ks` です。

- 7 キーストアのディスカバリ・パスワード（デフォルトは **logomania**）を一致させるために SiteScope クライアント・キーストア・パスワードを変更します。

```
keytool -storepasswd -new <Discovery_keystore_password> -keystore
<SiteScope root directory>%WEB-INF%classes%security%.ks -storepass
<your_keystore_password>
```

次に例を示します。

```
keytool -storepasswd -new logomania -keystore C:%SiteScope%WEB-
INF%classes%security%.ks -storepass changeit
```

- 8 キーストアのディスカバリ・パスワードを一致させるためにプライベート・キー・パスワードを変更します。

```
keytool -keypasswd -alias sis -keypass <your_keystore_password> -new
<Discovery_keystore_password> -keystore <SiteScope root directory>WEB-
INF%classes%security%.ks -storepass <your_keystore_password>
```

次に例を示します。

```
keytool -keypasswd -alias sis -keypass changeit -new logomania -keystore
C:%SiteScope%WEB-INF%classes%security%.ks -storepass logomania
```

- 9 新しいパスワードを使用してキーストアを確認します。

```
keytool -list -v -keystore <SiteScope root directory>%WEB-
INF%classes%security%.ks -storepass <your_keystore_password>
```

次に例を示します。

```
keytool -list -v -keystore C:%SiteScope%WEB-INF%classes%security%.ks -
storepass logomania
```

- 10 SiteScope サーバを再起動します。

- 11 BSM で、**[管理]** > **[システム可用性管理]** を選択し、**[新規 SiteScope]** ボタンをクリックして、SiteScope インスタンスを追加します。**[プロファイル設定]** ペインで、**[BSM フロント エンドは HTTPS を使用します]** チェック・ボックスを必ず選択します。

- 12 **[BSM]** > **[管理]** > **[RTSM 管理]** > **[IT ユニバース マネージャ]** > **[システム モニタ]** ビューにトポロジが表示していることをチェックします。

## トラブルシューティング

- ▶ 次のエラーについては、<SiteScope のルート・ディレクトリ>%logs%bac\_integration% に配置されている bac-integration.log を確認します。

```
2010-12-30 11:03:06,399 [TopologyReporterSender]
(TopologyReporterSender.java:364) ERROR - failed to run main topology agent.
topologyCommand=TopologyCommand{commandType=RUN_SCRIPT, O
java.lang.IllegalArgumentException: cannot find script with name=create_monitor.py
at
com.mercury.sitescope.integrations.bac.topology.dependencies.DependenciesCraw
ler.findDependencies(DependenciesCrawler.java:60)
at
com.mercury.sitescope.integrations.bac.topology.dependencies.ScriptDependencie
sFinder.find(ScriptDependenciesFinder.java:80)
at
com.mercury.sitescope.integrations.bac.topology.TopologyReporterSender.getDepe
ndencies(TopologyReporterSender.java:552)
at
com.mercury.sitescope.integrations.bac.topology.TopologyReporterSender.send(To
pologyReporterSender.java:347)
at
com.mercury.sitescope.integrations.bac.topology.TopologyReporterSender.run(Topo
logyReporterSender.java:304)
at java.lang.Thread.run(Thread.java:619)
```

- ▶ 証明書およびキーストアのパスワードが同一であることを確認します。

# 第 V 部

---

作業の開始と **SiteScope** へのアクセス



# 16

## インストール後の管理

### 本章の内容

- ▶ インストール後の管理チェックリスト (255 ページ)

### インストール後の管理チェックリスト

このセクションでは、SiteScope のインストール後に実行する推奨手順を説明します。

✓	ステップ
	SiteScope サポートの登録。詳細については、19 ページ「スタートアップ・ロードマップ」を参照してください。
	Web ブラウザを使用して、SiteScope Web インタフェースにログオンします。詳細については、262 ページ「SiteScope への接続」を参照してください。
	SiteScope の以前のバージョンから SiteScope 11.20 にアップグレードする場合は、設定ツールを使用して、モニタおよびグループの設定データを以前の SiteScope から新しい SiteScope に転送します。設定ツールの使用方法の詳細については、155 ページ「SiteScope 設定ツールの使用」を参照してください。
	インストール時に SiteScope のライセンス情報を入力しなかった場合、SiteScope ヘルプで『SiteScope の使用』の [一般プリファレンス] セクションの説明に従って、[一般プリファレンス] ページに入力します。新しい SiteScope は評価ライセンスで 60 日間操作できます。ライセンスの詳細については、ライセンスの詳細については、35 ページ「SiteScope のライセンス」を参照してください。

✓	ステップ
	<p>SiteScope 管理者アカウント用のユーザ名およびパスワードを作成します。これは標準のアカウントで、製品がインストールされると有効になります。このアカウントは SiteScope を管理するすべての権限を持ち、アカウントを制限しなければ、製品にアクセスするすべてのユーザが使用します。組織の要件に基づいて、その他のユーザ・アカウントを作成して設定します。詳細については、SiteScope ヘルプで『SiteScope の使用』の「ユーザ管理プリファレンス」セクションを参照してください。管理者ユーザにユーザ名とパスワードが定義されていない場合は、SiteScope はログイン・ページをスキップして自動的にログインします。</p>
	<p>SiteScope 電子メールのプリファレンスの電子メール・サーバに管理者の電子メール・アドレスを設定し、SiteScope が使用できるメール・サーバを指定して、電子メール・メッセージや警告をユーザに転送します。詳細については、SiteScope ヘルプで『SiteScope の使用』の「電子メール・プリファレンス」セクションを参照してください。</p>
	<p>監視を可能にするリモート・サーバの接続プロファイルを設定します。セキュリティ要件に応じて、使用する接続方法を指定します。詳細については、SiteScope ヘルプで『SiteScope の使用』の「リモート・サーバ」セクションを参照してください。</p>
	<p>必要に応じて、ログのプリファレンスを調整して、監視データを SiteScope サーバ上に保持する日数を設定します。標準では、SiteScope は 40 日以上経過したログを削除します。監視データを外部データベースにエクスポートする場合は、データベースと必要なドライバを準備し、ログのプリファレンスを適切に設定します。詳細については、SiteScope ヘルプで『SiteScope の使用』の「ログ・プリファレンス」セクションを参照してください。</p>
	<p>リモート・データベースとの接続用のミドルウェア・ドライバと、ドライバを必要とするモニタ用のアプリケーションをインストールします。</p>
	<p>SiteScope を Business Service Management (BSM) のデータ・コレクタとして使用する場合は、BSM 統合を設定します。詳細については、SiteScope ヘルプで『SiteScope の使用』の「BSM の操作」セクションを参照してください。</p>
	<p>SiteScope を使用して BSM で HP Operations Manager (HPOM) またはオペレーション管理で使用するためにイベントを送信、またはメトリックをレポートするとき、HP Operations Manager 統合を設定します。詳細については、SiteScope ヘルプで『SiteScope の使用』の「Operations Manager および BSM の操作」セクションを参照してください。</p>



✓	ステップ
	ビジネス・システム・インフラストラクチャを評価して特定した要件と制約に基づき、グループおよびモニタ構成の枠組みを設定します。
	テンプレートを作成します。これによりグループ構造、命名規則、設定が標準化され、迅速にモニタをデプロイできるようになります。詳細については、SiteScope ヘルプで『SiteScope の使用』の「ユーザ定義のテンプレートおよびソリューション・テンプレート」セクションを参照してください。
	グループと主要なモニタの依存関係を作成し、過剰な警告を制御できるようにします。詳細については、SiteScope ヘルプで『SiteScope の使用』の「SiteScope グループを使った作業」セクションを参照してください。
	SiteScope をビジネスの関係者およびシステム管理者に公開します。

SiteScope のユーザが定義され、監視データの受信が可能な状態で運用が開始されたら、ビジネス・ユーザおよびシステム・ユーザに対して、SiteScope のレポート機能および警告機能にアクセスして利用する方法を説明するプロセスを開始します。



# 17

---

## SiteScope を使った作業の開始

### 本章の内容

- ▶ SiteScope サービスの開始 (259 ページ)
- ▶ Windows プラットフォームでの SiteScope サービスの開始と停止 (260 ページ)
- ▶ Solaris および Linux プラットフォームでの SiteScope プロセスの開始と停止 (261 ページ)
- ▶ SiteScope への接続 (262 ページ)
- ▶ SiteScope クラシック・インタフェース (263 ページ)
- ▶ 注意事項と制限事項 (264 ページ)

### SiteScope サービスの開始

SiteScope のプロセスは、インストール中にすべてのプラットフォームで起動されます。

- ▶ Windows プラットフォームでは、SiteScope は、サーバが再起動された場合に自動的に再起動するよう設定されたサービスとして追加されます。
- ▶ Solaris および Linux プラットフォームでは、SiteScope がインストールされたサーバを再起動する場合は常に、SiteScope のプロセスを再起動する必要があります。

本項で説明する手順を使用して、必要に応じて SiteScope のプロセスの開始と停止を手動で行うことができます。

## Windows プラットフォームでの SiteScope サービスの開始と停止

SiteScope は、Microsoft Windows プラットフォーム上のサービスとしてインストールされます。標準設定では、サーバが再起動されるときには常に、SiteScope サービスが自動的に再起動されるよう設定されています。[サービス] コントロール・パネルを使用して、SiteScope サービスの開始と停止を手動で行うことができます。

[サービス] コントロール・パネルを使用して SiteScope サービスの開始または停止を行うには、次の手順で行います。

- 1 [スタート] > [設定] > [コントロール パネル] > [管理ツール] > [サービス] を選択し、[サービス] コントロール・パネルを開きます。
- 2 サービスのリストで [SiteScope] を選択し、右クリックしてショートカット・メニューを表示します。
- 3 ショートカット・メニューから必要に応じて [開始] または [停止] を選択します。

### net start コマンドおよび net stop コマンド

net start コマンドおよび net stop コマンドを使用して SiteScope サービスの開始と停止を行うこともできます。

net start コマンドを使用して SiteScope サービスを開始するには、次の手順で行います。

- 1 SiteScope がインストールされているサーバのコマンド・ライン・ウィンドウを開きます。
- 2 次の構文を使用して netstart ユーティリティを実行します。

```
net start SiteScope
```

net stop コマンドを使用して SiteScope サービスを停止するには、次の手順で行います。

- 1 SiteScope を実行しているサーバのコマンド・ライン・ウィンドウを開きます。
- 2 次の構文を使用して netstop ユーティリティを実行します。

```
net stop SiteScope
```

## Solaris および Linux プラットフォームでの SiteScope プロセスの開始と停止

製品に付属するシェル・スクリプトを使用して、SiteScope 開始と停止を手動で行うことができます。init.d スクリプトを使用して、サーバが再起動されるときに SiteScope を自動的に再起動することもできます。

---

**注：**SiteScope は root ユーザ・アカウントから Solaris または Linux にインストールされる必要がありますが、インストールされた後は非 root ユーザ・アカウントから実行できます。詳細については、26 ページ「SiteScope を実行する権限のある非 root ユーザ・アカウントの設定」を参照してください。

---

**Solaris および Linux 上で SiteScope のプロセスを開始するには、次の手順で行います。**

- 1 SiteScope がインストールされているサーバのターミナル・ウィンドウを開きます。
- 2 次の構文を使用して、start コマンド・シェル・スクリプトを実行します。

```
<インストール・パス> /SiteScope/start
```

**Solaris および Linux 上で SiteScope のプロセスを停止するには、次の手順で行います。**

- 1 SiteScope を実行しているサーバのターミナル・ウィンドウを開きます。
- 2 次の構文を使用して、stop コマンド・シェル・スクリプトを実行します。

```
<インストール・パス> /SiteScope/stop
```

前述のコマンドの<インストール・パス>を SiteScope がインストールされている場所のパスに置き換えます。たとえば、SiteScope が /usr ディレクトリにインストールされている場合には、SiteScope の stop コマンドは次のようになります。

```
/usr/SiteScope/stop
```

## SiteScope への接続

SiteScope は、Web アプリケーションとして設計されています。このため、SiteScope の参照と管理には、SiteScope サーバにアクセスできる Web ブラウザを使用します。

SiteScope は、2 つのポート（8080 および 8888）で応答するようにインストールされます。このポートを使用するように設定されているサービスがほかにある場合は、インストール・プロセスによって別のポートで SiteScope が応答するように設定されます。

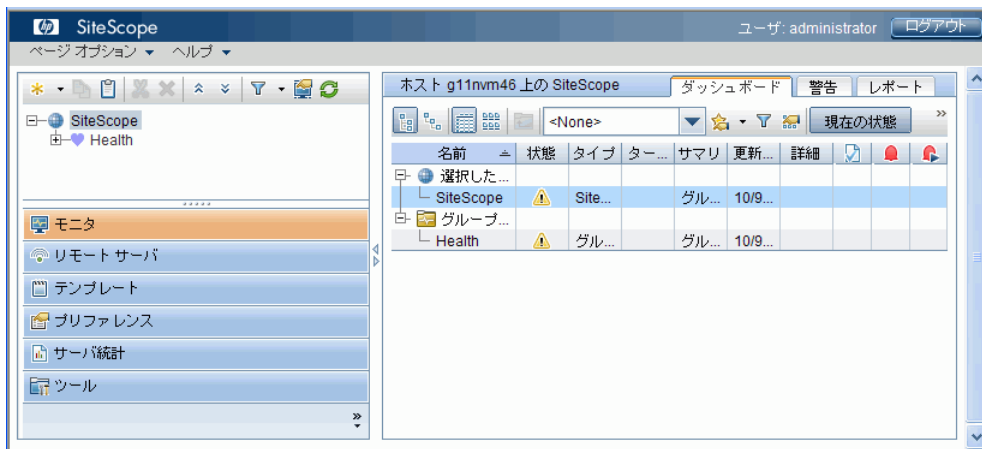
Windows プラットフォームでは、インストール・プロセスによって、[スタート] > [すべてのプログラム] の SiteScope 用にメニューに SiteScope へのリンクが追加されます。[スタート] メニュー・フォルダはインストール時に選択します。

## SiteScope へのアクセス

SiteScope にアクセスするには、Web ブラウザで SiteScope のアドレスを入力します。標準アドレスは、`http://localhost:8080/SiteScope` です。

Windows プラットフォームでは、[スタート] メニューから SiteScope にアクセスすることもできます。[スタート] > [すべてのプログラム] > [HP SiteScope] > [HP SiteScope を開く] をクリックします。SiteScope ポートを SiteScope のインストール後に変更した場合、ポートは「HP SiteScope を開く」リンクで更新されます。

SiteScope が初めてデプロイされた場合は、インタフェース要素の初期化のために遅延が生じます。次に示すように、SiteScope が [ダッシュボード] ビューで開きます。



---

**注：**

- ▶ このアカウントとその権限の使用を制限するには、管理者アカウント・プロファイルを編集して、ユーザ名とログイン・パスワードを含める必要があります。これにより、SiteScope にアクセスする前に SiteScope によってログイン・ダイアログが表示されます。管理者アカウント・プロファイルの編集に関する情報については、SiteScope ヘルプで『SiteScope の使用』の「ユーザ管理プリファレンス」セクションを参照してください。
  - ▶ SiteScope を別のマシンから表示する場合は、JRE (Java Runtime Environment) 1.6.0\_26 以降がインストールされているマシンを使用することをお勧めします。
- 

## SiteScope クラシック・インタフェース

SiteScope の以前のバージョンで利用できた SiteScope クラシック・インタフェース (URL は `http:// < sitescope ホスト > :8888`) は、SiteScope の管理には使用できなくなりました。

**master.config** ファイルの **\_serverFilter** プロパティにクラシック・インタフェースの特定のページが一覧表示されている場合は、引き続きこれらのページにアクセスできます。標準設定で一覧表示されているページには、[Monitor Summary] ページと [Alert Report] ページがあります。

---

**注：** 標準設定で有効になっている SiteScope クラシック・インタフェースのページは削除しないでください。何らかの機能に影響を及ぼす可能性があります。

---

## 注意事項と制限事項

この項では、SiteScope へのログオン時の次の問題に対する注意事項と制限事項について説明します。

- ▶ 273 ページ「SiteScope が起動せず、エラー・メッセージが表示される」
- ▶ 273 ページ「SiteScope アプレットの読み込みが失敗して「NoClassDefFound」例外が表示される」
- ▶ 274 ページ「64 ビットのコンピュータからアプレットをロードする場合の問題」
- ▶ 274 ページ「Solaris にインストールされている SiteScope の場合：停止および起動コマンドを使用すると、「SiteScope failed to start as a background process」というエラーが表示されます。」
- ▶ 266 ページ「ブラウザ・ウィンドウの複数のタブで同じ SiteScope サーバを開くと、SiteScope がハングする」
- ▶ 275 ページ「SiteScope メニュー・バーが開くが、アプレットの起動に失敗し、空の画面、エラー、または「x」の画像が表示される」
- ▶ 276 ページ「SiteScope を起動できない場合に SiteScope インストールのバックアップとリカバリを行う」

### SiteScope が起動せず、エラー・メッセージが表示される

SiteScope アプレットの起動時に「Java Runtime Environment がロードできません」というエラー・メッセージや、ほかの未知のエラーが発生した場合は、次の手順で行います。

各手順の後で、SiteScope を再度開いてみてください。それでもエラーが発生する場合は、次の手順に進んでください。

- 1 すべてのブラウザ・ウィンドウを閉じます。
- 2 Windows タスク・マネージャを使用して、実行中のブラウザ・プロセスがあればすべて終了します。
- 3 ローカルの Java アプレット・キャッシュを消去します。[スタート] > [コントロール パネル] > [Java] を選択します。[基本] タブで、[設定] > [ファイルの削除] をクリックし、[OK] をクリックします。



- 4 次のフォルダの内容を削除して、ローカルの Java アプレット・キャッシュを消去します。C:\Documents and Settings\<ユーザ名>\Application Data\Sun\Java\Deployment\cache

## SiteScope アプレットの読み込みが失敗して「NoClassDefFound」例外が表示される

アプレットの読み込みが失敗して「NoClassDefFound」例外が表示される場合は、クライアント Java 設定 ([コントロール パネル] > [Java] > [基本] タブ > [インターネット一時ファイル] > [設定]) で [コンピュータに一時ファイルを保持します] を選択します。

セキュリティ上必要な場合は、SiteScope アプレットの使用が完了した時点でこれらの一時ファイルを手動で削除してください。

- 1 SiteScope アプレットを終了します。
- 2 [スタート] > [コントロール パネル] > [Java] > [基本] タブを選択します。
- 3 [インターネット一時ファイル] セクションで、[設定] > [ファイルの削除] をクリックします。

## 64 ビットのコンピュータからアプレットをロードする場合の問題

64 ビットのコンピュータで SiteScope を実行している場合、JRE に一致するブラウザのバージョンを使用してください。

JRE	[参照]
64 ビット JRE	<ul style="list-style-type: none"> <li>▶ Internet Explorer (64 ビット)</li> <li>▶ FireFox (64 ビット)</li> </ul>
32 ビット JRE	<ul style="list-style-type: none"> <li>▶ Internet Explorer (32 ビット)</li> <li>▶ FireFox (32 ビット)</li> </ul>

## **Solaris にインストールされている SiteScope の場合：停止および起動コマンドを使用すると、「SiteScope failed to start as a background process」というエラーが表示されます。**

この問題は、再起動を試行したとき SiteScope が正常にシャットダウンされていないと発生します。一部の環境では、SiteScope を起動して、その直後に停止すると、SiteScope が正しく停止されない場合があります。

この問題には次の 2 つの解決策があります。

### **解決策 1 (SiteScope を起動する前に問題を回避する場合)**

- 1 SiteScope プロセスを手動で強制終了します。
- 2 `ps -e | grep SiteScope` を実行し、SiteScope のプロセス ID を取得します。
- 3 `kill -9 < SiteScope のプロセス ID >` を実行します。

### **解決策 2 (SiteScope を起動して、直ちに停止する場合)**

- 1 SiteScope を停止する前に、`< SiteScope のルート・ディレクトリ > %groups` フォルダに移動し、`monpid` というファイルがそのフォルダに表示されていることを確認します。
- 2 表示されていない場合は、作成されるまで数分間待機します。
- 3 SiteScope を停止します。

## **ブラウザ・ウィンドウの複数のタブで同じ SiteScope サーバを開くと、SiteScope がハングする**

ブラウザ・ウィンドウの複数のタブで同じ SiteScope サーバ・ユーザ・インタフェースを開いた場合、SiteScope サーバ・タブ間で移動を試みると SiteScope がハングします。

### **考えられる解決策：**

- ▶ 重複しているタブを閉じ、同一の SiteScope サーバ・ユーザ・インタフェースに対してタブが 1 つだけ開かれた状態にします。
- ▶ または、新しいブラウザ・ウィンドウを開きます。

## SiteScope メニュー・バーが開くが、アプレットの起動に失敗し、空の画面、エラー、または「x」の画像が表示される

これは、Java コントロール・パネルが Web ブラウザを使用するように設定されていないために発生します。

### 考えられる解決策：

- 1 [スタート] > [コントロール パネル] > [Java] をクリックします。[基本] タブで [ネットワーク設定] をクリックし、[直接接続] オプションを選択し、[OK] をクリックします。
- 2 [詳細] タブで、[ブラウザのデフォルトの Java] フォルダ（または Java 5 を使用している場合は[<APPLET> タグのサポート)を展開します。[Microsoft Internet Explorer] と [Mozilla ファミリ] が選択されていることを確認します。[適用] をクリックしてから [OK] をクリックします。
- 3 ブラウザを再起動します。

## SiteScope を起動できない場合に SiteScope インストールのバックアップとリカバリを行う

SiteScope が停止し、再起動ができなくなったために SiteScope 設定データをリカバリするには、現在の SiteScope インストール・ディレクトリとこのディレクトリ内に含まれるすべてのサブディレクトリのバックアップを作成し、その後で新しいバージョンの SiteScope をインストールします。現在の SiteScope インストールをバックアップするには、設定ツールを使用して SiteScope データを .zip ファイルにエクスポートするか、あるいは必要なファイルを手動でバックアップします。

SiteScope の再インストールが完了した時点で、モニタ設定データを SiteScope にコピーできます。設定ツールを使用してインストール・ディレクトリのバックアップを作成した場合は、設定ツールを使用してこのコピー作業が行えます。設定ツールを使用しなかった場合は、バックアップしたすべてのフォルダとファイルを新しいインストール・ディレクトリから削除してから、バックアップしたフォルダとファイルをこのインストール・ディレクトリにコピーします。

SiteScope インストールをバックアップするには、次の手順で行います。

1 SiteScope を停止します。

---

**注:** 必ずしも必要ではありませんが、バックアップを作成する前に SiteScope を停止することをお勧めします。

---

2 次のいずれかの方法で、現在の SiteScope インストールのバックアップを作成します。

- ▶ 設定ツールを使用して、設定を **.zip** ファイルにエクスポートする。詳細については、155 ページ「SiteScope 設定ツールの使用」を参照してください。
- ▶ 次のフォルダとファイルを、SiteScope インストールからバックアップ先にコピーします。

ディレクトリ	説明
¥cache	Business Service Management が停止していた場合に Business Service Management に報告されなかったデータ・サンプルが含まれています。
¥conf¥ems	統合モニタ・タイプとともに使用される重要な設定ファイルおよび制御ファイルが含まれています。これは、別の Business Service Management アプリケーションに報告するエージェントとして SiteScope を使用する場合にのみ適用されます。
¥conf¥integration	Business Service Management との統合に使用されるトポロジ・ファイルが含まれています。
¥discovery¥scripts¥custom	カスタム・ディスカバリ・スクリプトが含まれています。
¥groups	SiteScope の運用に必要な、モニタ、警告、レポート、およびその他の重要な設定データが含まれています。

ディレクトリ	説明
¥htdocs	定期レポートとユーザがカスタマイズした SiteScope インタフェースのスタイル・シートが含まれています。レポート・ページの損傷を防ぎ、古いレポートを表示するためには、このディレクトリをバックアップして SiteScope ディレクトリ (同じ SiteScope バージョンにあるディレクトリ) にコピーします。このフォルダは、設定を新しい SiteScope バージョンにインポートする際にバックアップできません。
¥logs	日付が記述された監視データのログなど、多くのログが含まれています。最新の監視データのログ・ファイルと、このディレクトリに含まれるほかのタイプのログを選択的にバックアップしてください。また、履歴の継続性を保つために、 <b>error.log</b> , <b>RunMonitor.log</b> , <b>access.log</b> , <b>alert.log</b> , <b>monitorCount.log</b> ログをバックアップすることもできます。
¥persistence	これは、この製品の中心的な永続ディレクトリです。このディレクトリには、モニタ、グループ、警告、テンプレートなど、定義されているすべての SiteScope エントリが含まれています。
¥scripts	スクリプト・モニタが使用するスクリプトが含まれています。
¥scripts.remote	スクリプト・モニタがリモート・サーバ上のほかのスクリプトをトリガするために使用するコマンド・スクリプトが含まれています。
¥templates.*	モニタの機能、アラートの内容、その他の機能をカスタマイズするために使用されるデータとテンプレートが含まれています。すべて <b>templates</b> という名前が始まるサブディレクトリのグループです。 <b>例</b> : <b>templates.mail</b> , <b>templates.os</b> , <b>templates.webscripts</b>
¥WEB-INF¥lib¥peregrine.jar	HP Service Manager 統合を設定した際に変更 (再生成) された可能性があるファイルです。

**SiteScope インストールをリカバリするには、次の手順で行います。**

- 1 SiteScope の新規インストールを実行します。詳細については、105 ページ「SiteScope のインストール」を参照してください。
- 2 SiteScope のインストールが完了した後で、次の処理を行います。
  - ▶ 現在の SiteScope インストール・ディレクトリのバックアップを作成するために設定ツールを使用した場合は、作成済みの **.zip** ファイルを設定ツールを使用してインポートします。詳細については、155 ページ「SiteScope 設定ツールの使用」を参照してください。
  - ▶ バックアップを手動で作成した場合は、前述のフォルダとファイルをすべて新しいインストール・ディレクトリから削除してから、バックアップしたフォルダとファイルをこのインストール・ディレクトリにコピーします。

# 第 VI 部

---

付録





# A

---

## IIS と SiteScope の Tomcat サーバとの統合

Internet Information Server (IIS) を SiteScope に付属の Apache Tomcat サーバと統合するには、Apache Tomcat サーバが使用する設定ファイルに変更を行い、IIS 設定の対応する Web サイト・オブジェクトに仮想ディレクトリを作成します。

### 本章の内容

- ▶ Apache Tomcat サーバ・ファイルの設定 (273 ページ)
- ▶ IIS の設定 (277 ページ)

## Apache Tomcat サーバ・ファイルの設定

IIS を Apache Tomcat サーバと統合できるようにするには、SiteScope に付属の Apache Tomcat サーバの設定ファイルを編集しなければなりません。

**Apache Tomcat サーバ・ファイルの設定を設定するには、次の手順で行います。**

- 1 Apache のコネクタ・ファイルのダウンロード・サイトから最新の Java Connector jk をダウンロードします  
(<http://tomcat.apache.org/download-connectors.cgi>) (英語サイト)。
- 2 `isapi_redirect.dll` ファイルを < Tomcat インストール・ディレクトリ > %bin%\win32 ディレクトリにコピーします。標準設定では、Tomcat サーバは SiteScope のインストール時に `C:\%SiteScope%\Tomcat` にインストールされます。このディレクトリが存在しなければ、win32 ディレクトリを作成します。

3 次のいずれかを実行します。

- ▶ **isapi\_redirect.dll** ファイルと同じディレクトリに設定ファイルを作成し、**isapi\_redirect.properties** という名前を付けます。以下にこのファイルの例を示します。

```
# Configuration file for the Jakarta ISAPI Redirector

# The path to the ISAPI Redirector Extension, relative to the website
# This must be in a virtual directory with execute privileges
extension_uri=/jakarta/isapi_redirect.dll

# Full path to the log file for the ISAPI Redirector
log_file=C:\SiteScope\Tomcat\logs\isapi.log

# Log level (debug, info, warn, error or trace)
log_level=info

# Full path to the workers.properties file
worker_file=C:\SiteScope\Tomcat\conf\workers.properties.minimal

# Full path to the uriworkermap.properties file
worker_mount_file=C:\SiteScope\Tomcat\conf\uriworkermap.properties
```

この設定はログ・ファイル（< **SiteScope のルート・ディレクトリ**> **¥Tomcat¥logs** ディレクトリに含めることをお勧めします）とワーカ・ファイルおよびワーカのマウント・ファイル（< **SiteScope のルート・ディレクトリ**> **¥Tomcat¥conf** ディレクトリに格納しなければなりません）を指します。

- ▶ 同じ設定エントリ（上記を参照）を次のパスのレジストリに追加します。  
HKEY\_LOCAL\_MACHINE¥SOFTWARE¥Apache Software Foundation¥Jakarta Isapi Redirector¥1.0

- 4 < SiteScope のルート・ディレクトリ> ¥Tomcat¥conf ディレクトリに **workers.properties.minimal** という名前の SiteScope ワーカー・ファイルを作成します。以下に SiteScope ワーカー・ファイルの例を示します。

```
# workers.properties.minimal -
#
# This file provides minimal jk configuration
# properties needed to
# connect to Tomcat.
#
# Defining a worker named ajp13w and of type ajp13
# Note that the name and the type do not have to
# match.
worker.list=ajp13w
worker.ajp13w.type=ajp13
worker.ajp13w.host=localhost
worker.ajp13w.port=8009
#END
```

---

**注：**

- ▶ **worker.ajp13w.port** は使用されている Tomcat のバージョンによって異なります。< SiteScope のルート・ディレクトリ> ¥Tomcat¥conf¥server.xml を開いて、文字列 <Connector port= を検索して、この Tomcat のバージョンが使用しているポートを判別します。
- ▶ SiteScope を SiteMinder と統合するように設定する場合、**server.xml** ファイルの <!-- Define an AJP 1.3 Connector on port 8009 --> セクションで、次のようにリダイレクト・ポートを変更します。  
<!-- <Connector port="18009"  
URIEncoding="UTF-8" enableLookups="false" redirectPort="8443"  
protocol="AJP/1.3" /> -->  
から <Connector port="18009"  
URIEncoding="UTF-8" enableLookups="false" redirectPort="80"  
protocol="AJP/1.3" /> へ変更
- ▶ IIS と Tomcat が同じマシン上にはない場合は、**workers.properties.minimal** のホスト属性をほかのマシンを指すよう変更します。

- 5 < SiteScope のルート・ディレクトリ> %Tomcat%conf ディレクトリに SiteScope ワーカーのマウント・ファイルを作成します。次に、前述の設定例と同じように、**uriworkermap.properties** という名前の SiteScope ワーカーのマウント・ファイルの例を示します。

```
# uriworkermap.properties - IIS
#
# This file provides sample mappings for example:
# ajp13w worker defined in workermap.properties.minimal
# The general syntax for this file is:
# [URL]=[Worker name]
/SiteScope=ajp13w
/SiteScope/*=ajp13w
#END
```

新しい構文は、SiteScope の 2 つのルールを次の 1 つに結合します。

```
/SiteScope/*=ajp13w
```

---

**注 :** Tomcat ログ出力は、< SiteScope のルート・ディレクトリ> %logs%tomcat.log ファイルに書き込まれます。ログ・ファイルの設定は、< SiteScope のルート・ディレクトリ> %Tomcat%common%classes%log4j.properties ファイルで実行できます。

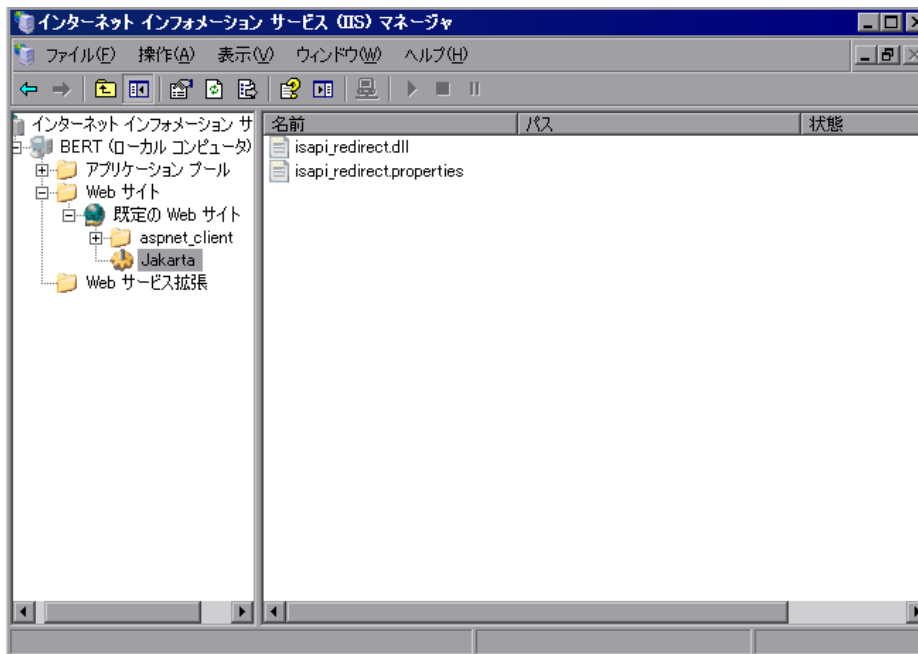
---

## IIS の設定

Tomcat サーバが使用する設定ファイルに変更を行ったら、IIS 設定の対応する Web サイト・オブジェクトに仮想ディレクトリを作成する必要があります。

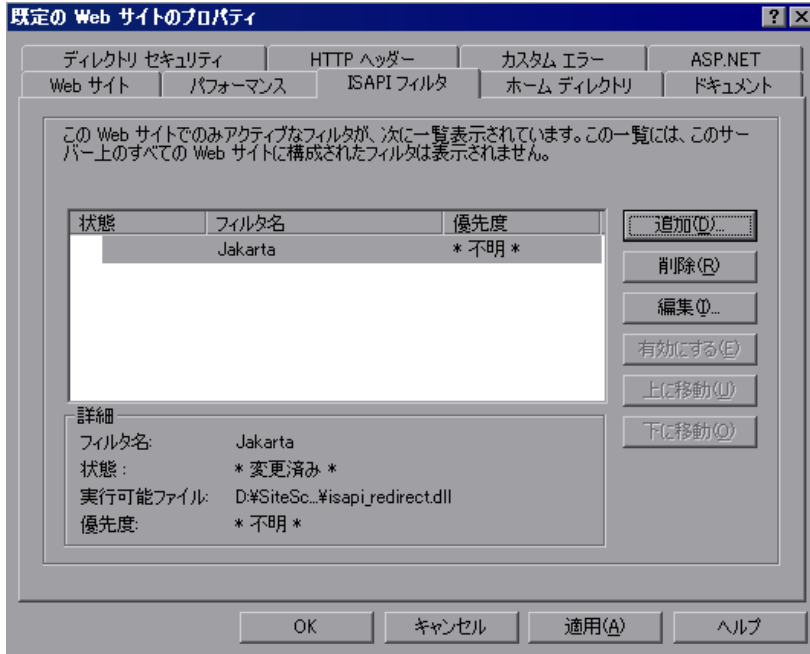
IIS を設定するには、次の手順で行います。

- 1 Windows で、[スタート] > [設定] > [コントロール パネル] > [管理ツール] > [インターネット インフォメーション サービス (IIS) マネージャ] をクリックします。
- 2 右側の表示枠で、「<ローカル コンピュータ名> ¥Web Sites¥ < Web サイト名 >」を右クリックし、[新規作成] > [仮想ディレクトリ] をクリックします。この名前を **Jakarta** に変更し、**isapi\_redirect.dll** が含まれるディレクトリに **ローカル・パス** を設定します。



- 3 < Web サイト名 > を右クリックし、[プロパティ] をクリックします。

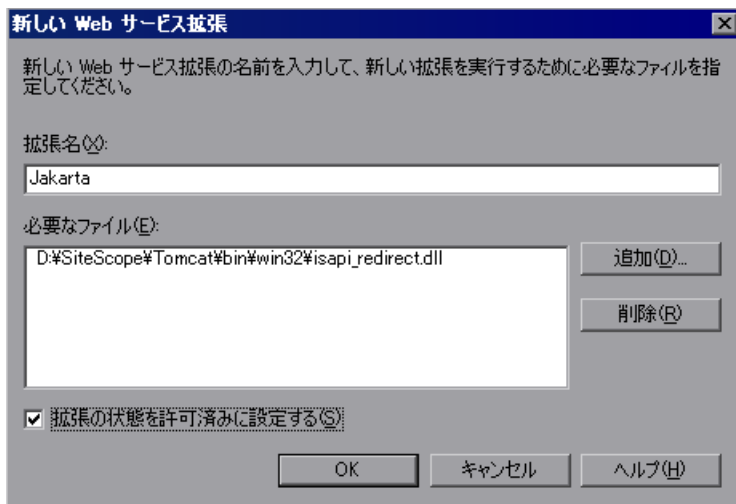
- 4 [ISAPI フィルタ] タブをクリックしてから、[追加] をクリックします。[フィルタ名] カラムで、「Jakarta」を選択し、isapi\_redirect.dll を参照します。フィルタが追加されますが、この段階ではまだアクティブではありません。



[適用] をクリックします。

- 5 [<ローカル マシン名>] > [¥Web サービス拡張] を右クリックし、[新しい Web サービス拡張を追加] をクリックします。[新しい Web サービス拡張] ダイアログ・ボックスが開きます。

- 6 [拡張名] ボックスに「Jakarta」という名前を入力し、[必要なファイル] で `isapi_redirect.dll` ファイルを参照します。[拡張の状態を許可済みに設定する] を選択します。



[OK] をクリックします。

- 7 IIS Web サーバを再起動し、Web サービス経由でアプリケーションにアクセスしてみてください。





# B

---

## SiteScope と SiteMinder との統合

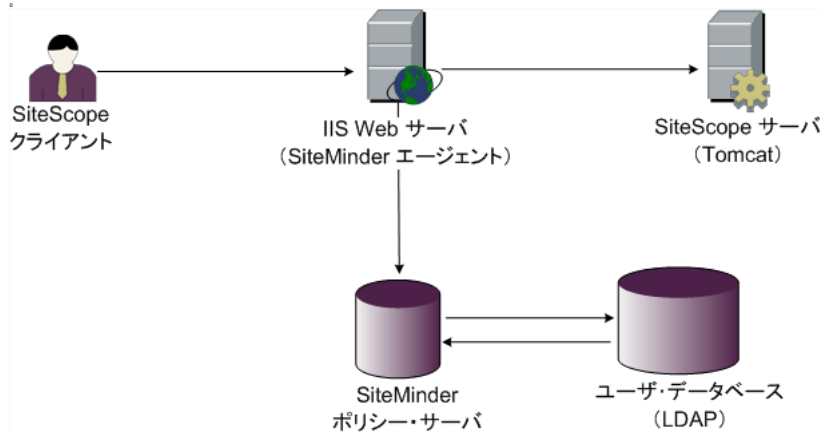
SiteScope は、セキュリティ・アクセス管理ソリューションである SiteMinder と統合でき、顧客のユーザとアクセス管理設定を活用できます。

### 本章の内容

- ▶ SiteMinder との統合について (282 ページ)
- ▶ 統合の要件 (283 ページ)
- ▶ 統合のプロセス (283 ページ)
- ▶ SiteMinder ポリシー・サーバの設定 (284 ページ)
- ▶ SiteMinder を使用するための SiteScope の設定 (286 ページ)
- ▶ IIS の設定 (286 ページ)
- ▶ さまざまな SiteScope ロールの権限の定義 (287 ページ)
- ▶ SiteScope へのログオン (287 ページ)
- ▶ 注意事項とガイドライン (288 ページ)

## SiteMinder との統合について

次の図で、SiteScope を SiteMinder と統合して、SiteScope ユーザを認証して権限を与える方法について説明します。



このアーキテクチャでは、SiteMinder エージェントは、SiteScope の Tomcat アプリケーション・サーバの前に配置された IIS Web サーバ上に構成されています。SiteMinder エージェントは Web サーバ上になければなりません。IIS Web サーバは、すべての SiteScope ユーザを（LDAP 上または任意のほかの同様のリポジトリ上で）管理する SiteMinder ポリシー・サーバに接続されます。

SiteMinder エージェントはすべての SiteScope の関連トラフィックを傍受し、ユーザの資格情報を確認します。ユーザの資格情報は、認証と権限付与のため SiteMinder ポリシー・サーバに送信されます。SiteMinder はユーザを認証すると、ログインして SiteMinder の認証を渡そうとした正確なユーザを示すトークンを（特別な HTTP ヘッダを付けて）SiteScope に送ります。

---

**注：** SiteScope クライアント、IIS Web サーバ、および SiteScope Tomcat アプリケーション・サーバは同じマシンで構成することを推奨します。

---

## 統合の要件

この節では、SiteScope と SiteMinder を統合するためのシステム要件について説明します。

オペレーティング・システム	Windows 2000, Windows 2003 Standard/Enterprise SP1
Web サーバ	IIS 5.0, IIS 6.0
アプリケーション・サーバ	Tomcat 5.0.x
Java コネクタ	Java Connector jk-1.2.21 以降

## 統合のプロセス

この節では、SiteMinder との統合のプロセスについて説明します。

**SiteScope を SiteMinder と統合するには、次の手順で行います。**

### 1 SiteMinder ポリシー・サーバを準備して設定します。

SiteMinder 管理者は、Web エージェントのインストール、IIS Web サーバへの Web エージェントのインストール、および Web エージェントの設定のために、SiteMinder ポリシー・サーバを準備する必要があります。

さらに、SiteMinder 管理者は SiteMinder ポリシー・サーバを設定する必要があります。SiteMinder の推奨設定の詳細については、284 ページ「SiteMinder ポリシー・サーバの設定」を参照してください。

### 2 SiteMinder を使用するために SiteScope を設定します。

SiteScope を SiteMinder と統合できるようにするには、Tomcat サーバが使用する設定ファイルを変更する必要があります。詳細については、273 ページ「Apache Tomcat サーバ・ファイルの設定」を参照してください。

### 3 IIS を設定します。

IIS 設定の対応する Web サイト・オブジェクトに仮想ディレクトリを作成する必要があります。詳細については、277 ページ「IIS の設定」を参照してください。

#### 4 SiteScope のロールごとに権限を定義します。

SiteMinder との統合が有効になったら、SiteScope のロールごとに権限を定義しなければなりません。詳細については、287 ページ「さまざまな SiteScope ロールの権限の定義」を参照してください。

## SiteMinder ポリシー・サーバの設定

SiteScope 領域オブジェクト、認証用と追加属性を持つクッキーの送信用の 2 つの SiteScope ルール・オブジェクト、追加の LDAP 属性を SiteScope に転送する SiteScope 応答オブジェクトを生成することによって、また SiteScope ルールと応答をセキュリティ・ポリシー・オブジェクトに追加することによって SiteMinder ポリシー・サーバを設定します。

ポリシー・サーバで SiteScope 領域オブジェクトを作成する前に、次のことを確認します。

- ▶ ドメイン上に特別な管理者（1 つ以上のユーザ・ディレクトリ）が設定されていること。
- ▶ 1 つ以上のユーザ・ディレクトリ・オブジェクトが設定されていること。これらのオブジェクトは、LDAP ディレクトリまたはほかの任意のリポジトリに含まれるユーザを表します。
- ▶ 認証スキームを定義していること。

ドメインが 1 つ以上のユーザ・ディレクトリ・オブジェクトに接続されていること。領域用に特別なドメインを作成する必要はありません。既存のドメインを使用できます。

**SiteMinder ポリシー・サーバを設定するには、次の手順で行います。**

- 1 SiteMinder 管理にログインします。
- 2 領域を作成し、次の情報を入力します。
  - ▶ **名前** : 領域に名前を入力します。例 : **SiteScope realm**
  - ▶ **リソース・フィルタ** : **/SiteScope** と入力します。SiteScope 次のすべてが領域に含まれます。

- 3 新規領域を右クリックして、[**Create rule under realm**] をクリックします。
  - ▶ 認証用に新しいルールを作成します。ルールに分かりやすい名前を入力します (例 : **SiteScope rule**)。[**Action**] セクションで、[**Web Agent Action**] オプションを選択し、すべての HTTP 要求スキーム (**Get**, **Post**, および **Put**) を選択します。
  - ▶ クッキーおよびその他の属性の SiteScope への転送用に 2 番目のルールを作成します。ルールに分かりやすい名前を入力します (例 : **Users role**)。[**Action**] セクションで [**Authentication events**] オプションを選択し、ドロップダウン・リストから [**OnAuthAccept**] を選択します。
- 4 SiteScope 応答オブジェクトを作成して、追加の LDAP 属性を関連する認証情報とともに SiteScope に転送します。
  - a [**Responses**] を右クリックして、[**Response Properties**] ウィンドウを開きます。
  - b 応答に分かりやすい名前を入力します。例 : **SiteScope Role**
  - c [**Attribute List**] セクションで [**Create**] ボタンをクリックして、属性リストを設定するための新規ウィンドウを開きます。
  - d [**Attribute Kind**] セクションで、[**User Attribute**] オプションを選択します。
  - e [**Attribute Fields**] セクションで、変数名として **SITESCOPE\_ROLE** を選択し、SiteScope へのヘッダで送信されるあらかじめ設定されていたユーザ・ディレクトリから選択されたフィールドに属性名を選択します。これは認証用に送信されるユーザ・ディレクトリ属性です。

---

**注 :** LDAP グループ・オブジェクトまたはネストされたグループ・オブジェクトを使用して SiteScope のロールを定義している場合は、[**変数名**] フィールドに特別な SiteMinder 変数が使用されます。ネストされたグループの情報を **SITESCOPE\_ROLE** HTTP ヘッダに含める場合は、通常のグループには **SM\_USERGROUPS** 変数を使用しなければなりません。

---

- 5 SiteScope ルールと応答をセキュリティ・ポリシー・オブジェクトへ追加します。
  - a [Policies] オプションをクリックして、新規セキュリティ・ポリシーを作成します。
  - b ポリシーに分かりやすい名前を入力します。例 : **SiteScope Policy**
  - c [Users] タブをクリックして、ポリシーを適用するエンティティを追加または削除します (領域の同じドメインの一部であるユーザ・ディレクトリからのみエンティティを選択できます)。
  - d [Rules] タブをクリックして、手順 3 で説明した 2 つのルール、**Users Role** と **SiteScope Rule** を選択します。さらに、手順 4 のユーザ・ロールの応答として以前に定義された **SiteScope Role** 応答を追加します。

## SiteMinder を使用するための SiteScope の設定

SiteScope を SiteMinder と統合できるようにするには、Tomcat サーバが使用する設定ファイルを変更する必要があります。Tomcat サーバ・ファイルの設定の詳細については、273 ページ「Apache Tomcat サーバ・ファイルの設定」を参照してください。

## IIS の設定

Tomcat サーバが使用する設定ファイルに変更を行ったら、IIS を設定する必要があります。IIS 設定の詳細については、277 ページ「IIS の設定」を参照してください。

## さまざまな SiteScope ロールの権限の定義

SiteMinder との統合が有効になったら、(SiteScope の通常ユーザの権限モデルを使用して) SiteScope のロールごとに権限を定義しなければなりません。このロールへのユーザの関連付けは、LDAP グループ内など、SiteScope 外で行われます。新規 SiteScope ユーザが追加されたら、これは SiteMinder でのみ定義されなければなりません。ユーザは自動的に関連する SiteScope ロールから権限を継承するためです。

---

**注：** SiteMinder が使用する SiteScope ユーザ・アカウントにはパスワードが必要ないことを確認してください。パスワードがあると SiteMinder はログオンできなくなります。ユーザ・アカウントの作成の詳細については、SiteScope ヘルプで『SiteScope の使用』の「ユーザ管理プリファレンス」セクションを参照してください。

---

## SiteScope へのログオン

ユーザが SiteScope にログオンを試みると、SiteMinder が要求を傍受します。SiteMinder がユーザの資格情報を認証すると、SiteScope ユーザ名とロール(グループ)が SiteScope に割り当てられます(例: ユーザ「Fred」、ロール「Accounting」)。ユーザ名が有効なユーザ名として認識されなくてもロールが認識されれば、そのロールで SiteScope にログインできます(先の例では、ユーザ「Accounting」)。

**SiteScope にログオンするには、次の手順で行います。**

Web ブラウザを開き、次の URL を入力します。

`http:// < IIS マシン名 > /SiteScope`

---

**注：** IIS と SiteScope が同じマシンにある場合は、ポート 8080 ではなく標準設定のポート 80 に接続しなければなりません。

---

SiteMinder がユーザの認証に成功し、SiteScope にログオンすると、直接 SiteScope がダッシュボード・ビューを開きます。

## 注意事項とガイドライン

- ▶ SiteScope にログインしたすべてのユーザ名は監査ログに一覧表示されます。監査ログは、< **SiteScope のルート・ディレクトリ** > **¥logs** ディレクトリにあります。これは、ユーザがロール名でログインした場合も同様です。たとえば、Fred というユーザが、SiteScope によって有効なユーザとしては認識されないけれどもロールは認識されたためにロールでログインした場合でも、すべての操作は監査ログでユーザ名 Fred で一覧表示されます。
- ▶ SiteMinder 環境からログアウトした後でブラウザがリダイレクトされるページを指定できません（これは、SiteScope で [ログアウト] ボタンをクリックすると開くページです）。ログアウト・ページを有効にするには、< **SiteScope のルート・ディレクトリ** > **¥groups** にある **master.config** ファイルを開いて次の行を追加します。

```
_siteMinderRedirectPageLogout=<url_to_go_to_after_logout>
```

- ▶ SiteMinder が SiteScope にログオンするときに使用するユーザ・アカウントにはパスワードを設定してはなりません。さもないと SiteMinder がログオンできなくなります。SiteScope でのユーザ・アカウントの設定の詳細については、SiteScope ヘルプで『SiteScope の使用』の「ユーザ管理プリファレンス」セクションを参照してください。
- ▶ ユーザが SiteScope URL を使用して SiteScope に直接アクセスするのを防ぐため、SiteScope のインストール時に Tomcat サーバで HTTP ポート 8080 および 8888 を無効にすることを検討してください。
- ▶ Web ブラウザが無効になってから 30 分後にユーザが SiteScope からログアウトされないようにするため、**master.config** ファイルの `"_keepAliveFromJSP="` プロパティを `"=true"` に変更してください。



---

# 索引

## 記号

64 ビット

64 ビットのインストール準備 113

## C

CentOS 6.2 108, 109

## H

HP ソフトウェア Web サイト 12

HP ソフトウェア・サポート Web サイト 12

## I

IIS

SiteScope との統合 273

設定 277

## L

Linux

SiteScope インストールの準備 107

SiteScope のアンインストール 196

SiteScope の要件 73

SiteScope プロセスの開始 261

SiteScope プロセスの停止 261

## S

SiteMinder

SiteScope との統合 281

SiteScope

IIS との統合 273

Linux プラットフォーム上でのサイズ  
設定 185

SSL デプロイメントを使用する BSM

サーバに接続するための設定 244

SSL の使用 233

SSL 用の設定 240, 242

UNIX のスレッドの計算 185

UNIX 環境での考慮事項 25

Windows NT または 2000 環境での考  
慮事項 24

Windows 上でのサイズ設定 181

アップグレードの準備 81

アンインストール 191

インストールのための認定サーバ  
構成 77

インストール, 始める前に 67, 79

インストール後の管理作業 255

エージェントレス監視, 概要 29

エンタープライズの監視方法 19

管理者アカウントへのアクセス 256

クライアント証明書を要求する BSM

サーバに接続するための設定 245

サーバの状態の監視 30

システム要件 69

その他のサーバの監視 32

強化 201

使用されるポート 34

SiteScope サービス

実行 259

停止 259

SiteScope 設定ツール, Linux 163

SiteScope 設定ツール, Windows 155

SiteScope のアップグレード 81

SiteScope のアンインストール 191

Linux 上 196

Windows 191

SiteScope のインストール

コンソール・モードの使用 139, 170

SiteScope の設定 155

SiteScope へのアクセス 262

SiteScope への接続, 標準設定のインタ

## 索引

- フェース 262
- SiteScope 設定ツール 155
- Solaris
  - SiteScope インストールの準備 107
  - SiteScope の要件 72
  - SiteScope プロセスの開始 261
  - SiteScope プロセスの停止 261
- SSL
  - CA 証明書のインポート 238
  - CA 証明書の使用 236
  - Keytool ユーティリティ 235
  - SiteScope の設定 233
  - SiteScope へのアクセス 202
  - 使用するための SiteScope の設定 240, 242
  - 自己署名証明書の使用 238
- U**
- UNIX
  - JVM のサイズ設定 187
  - SiteScope のサイズ設定 185
  - SiteScope 使用考慮事項 25
  - スレッド・スタック・サイズのサイズ設定 187
  - ヒープ領域のサイズ設定 187
- UNIX/Linux
  - SiteScope 監視に適したシェル 25
  - 一般的なサイズ設定についての推奨事項 188
- V**
- VMware, サポート対象環境 74
- W**
- Web の監視
  - SiteScope のインストール 30
  - 使用されるライセンス・ポイントの見積もり 60
- Windows
  - SiteScope の要件 71
  - SiteScope でのセキュア・シェル接続の使用 33
  - 一般的なサイズ設定についての推奨事項 184

- Windows 2000
  - NT パフォーマンス・カウンタ・ライブラリ 31
  - SiteScope 使用考慮事項 24
- Windows プラットフォーム
  - SiteScope サービスの開始 260
  - SiteScope サービスの停止 260
- Windows 上での SiteScope のチューニング 183

## あ

- アカウント
  - root として SiteScope を実行 26
- アカウント権限, セキュリティ 26
- アプリケーション・パフォーマンスの監視, SiteScope のインストール 30
- アプリケーション・モニタ, 使用されるライセンス・ポイントの見積もり 60
- 暗号化, パスワードの暗号化 202

## い

- インストール
  - 64 ビットのインストール準備 113
  - Linux プラットフォームのアカウント権限 138, 147
  - Linux/Solaris での準備 107
  - root として SiteScope を実行しない 26, 107
  - Windows に関するユーザ・アカウント 24
  - Windows または Linux 105
  - インフラストラクチャの評価 21
  - サーバのサイズ設定 22
  - デプロイメント計画 19
  - ネットワークの要素 23
  - 完全インストールの実行 114
  - 後の管理作業 255
  - 手順の概要 68

## え

- エージェントレス監視, SiteScope 29

## お

オンライン・リソース 11

## か

### 監視

- AIX プラットフォーム 32
- HP-UX プラットフォーム 32
- NT パフォーマンス・カウンタ 31
- SCO プラットフォーム 33
- SiteScope でサポートされるプラットフォーム 32
- SiteScope でのセキュア・シェルの使用 33
- エンタープライズ・システムの方法 19
- ファイアウォール経由 34
- ライセンス・タイプ 36
- ライセンス・タイプの概要 36

管理者, ログイン・アカウント 256

## き

技術情報 11

## け

### 権限と資格情報

- Apache サーバ 205
- Amazon Web Services 205
- ASP サーバ 217
- BroadVision 205
- CheckPoint Firewall-1 206
- CiscoWorks 207
- Citrix サーバ 208
- ColdFusion 208
- COM+ 208
- CPU (Linux) 210
- CPU (Windows) 209
- F5 Big-IP 213
- FTP 214
- HP iLO (Integrated Lights-Out) 214
- HTTP 経由の SOAP 230
- IIS 218
- LDAP 215
- MAPI 216
- MIB による SNMP 226
- Microsoft Director サーバ 217
- Microsoft Registrar サーバ 218

- Microsoft アーカイブ・サーバ 216
- Microsoft エッジ・サーバ 217
- Microsoft 仲介サーバ 218
- Microsoft フロント・エンド・サーバ 217
- Microsoft 監視および CDR サーバ 218
- NT Dialup 219
- NT Perf カウンタ 219
- NT イベント・ログ 219
- Oracle 9iAS 222
- Oracle JDBC 222
- Ping 222
- Radius 222
- Real Media Player 222
- Real Media Server 222
- SAP CCMS 223
- SAP GUI 223
- Siebel Web サーバ 224
- Siebel サーバ・マネージャ 224
- Siebel ログ 224
- SNMP 225
- SNMP トラップ 227
- SQL サーバ 218
- SunOne 227
- Tuxedo 227
- URL 227
- URL シーケンス 228
- URL 内容 228
- URL リスト 228
- VMware ホスト CPU 229
- VMware ホスト・ストレージ 229
- VMware ホスト・ネットワーク 229
- VMware ホスト・メモリ 229
- VMware ホスト状態 229
- Web サーバ 229
- Web サーバ (Linux, Windows) 229
- Web サービス 229
- WebLogic 5.x 229
- WebLogic 6.x 以降 229
- WebSphere 3.5x 230
- WebSphere 4.5 230
- WebSphere 5.x 230
- WebSphere MQ 230
- WebSphere パフォーマンス・サーブレット 230
- Windows Media Player 219

Windows Media Server 219  
Windows Resource 220  
システム・ログ 227  
ディレクトリ (Windows) 210  
メモリ (Windows) 216  
ログ・ファイル (Windows) 215  
音声ビデオ会議サーバ 217  
サービス (Linux) 224  
サービス (Windows) 224  
スクリプト (Linux) 223  
スクリプト (Windows) 223  
ダイナミック・ディスク・スペース  
(Linux) 212  
ダイナミック・ディスク・スペース  
(Windows) 211  
ディスク領域 (Linux) 211  
ディスク領域 (Windows) 211  
ディレクトリ 210  
ディレクトリ (Linux) 210  
データベース 210  
ニュース 222  
ネットワーク帯域幅 221  
ファイル (Linux) 214  
ファイル (Windows) 213  
ポート 222  
メール 216  
メモリ (Linux) 216  
リンク・チェック 215  
ローカル・マシン上のスクリプト  
(Linux, Windows) 223  
ログ・ファイル (Linux) 215

## さ

サーバの監視, リモート UNIX 上の適し  
たシェル 25  
サーバの状態の監視, SiteScope の  
インストール 30  
サイズ設定  
Linux プラットフォーム上の  
SiteScope 185  
UNIX 上のスレッド・スタック 187  
UNIX 上のヒープ領域 187  
サイレント・インストール 153  
サイレント・モードでの SiteScope のインス  
トール 153

## し

システム要件  
Linux 上の SiteScope 73  
SiteScope のインストール 69  
SiteScope の認定サーバ構成 77  
Solaris 上の SiteScope 72  
Windows 上の SiteScope 71

## せ

セキュリティ  
SiteScope アカウント権限 26, 107  
SiteScope のセキュリティ強化 201  
SSL の使用 233  
標準のログイン・アカウント 256  
設定ツール, Linux 163  
設定ツール, Windows 155

## そ

ソリューション・テンプレート  
ライセンス 56

## て

デプロイメント  
SiteScope サーバのサイズ設定 22  
インフラストラクチャの評価 21  
ネットワークについての考慮事項 23  
計画の概要 19  
電子メール, 使用するための SiteScope  
の設定 256

## と

トラブルシューティングと技術情報 11

## ね

ネットワークの監視, SiteScope のイン  
ストール 30

## ひ

評価期間 62

**ふ**

ファイアウォール，経由した SiteScope  
の監視 34

**ほ**

ポート  
監視に使用 34

**も**

モニタ  
タイプごとに使用されるライセンス・  
ポイント 45

**ら**

ライセンス  
SiteScope での要求 63  
SiteScope モニタ 35  
ソリューション・テンプレート 56  
無料の評価版 62  
ライセンス・タイプ 36  
SiteScope の概要 36  
ライセンス・ポイント  
Web の監視の見積もり 60  
アプリケーションの監視の見積もり 60  
数の見積もり 59

**ろ**

ログ・ファイル  
データの保存量を設定 256

